

Title	阪大が世界10指に入るには : なぜ香港の大学は強いのか
Author(s)	大阪大学国際高等教育戦略研究チーム
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27397
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

平成 25 年度課外研究奨励費報告書

阪大が世界 10 指に入るには
～なぜ香港の大学は強いのか～

2013 年 2 月

大阪大学国際高等教育戦略研究チーム

はじめに

「大阪大学総長としての私の夢は、今から 18 年後、2031 年に創立 100 周年を迎える時に、大阪大学が研究型総合大学として世界トップ 10 に入ることです。」

入学式で、はじめてこの平野俊夫総長の言葉を聞いたとき、「一体この人は何を言っているのだろう」というのが私の正直な感想であった。確かに大阪大学は泣く子も黙る難関大学であり、その源流でたる適塾及び懐徳堂から考えれば、日本でも有数の伝統を誇る総合大学である。それでも「世界トップ 10」とは何事だろうか。日本国内だけでも、世界でも有数の巨大総合大学である東京大学、卒業生から 5 人のノーベル賞受賞者を輩出した京都大学という強敵がいる。

イギリスの専門誌 **Times Higher Education** が 2013 年 10 月に発表したランキングでは大阪大学は 144 位という結果であった。この順位については相当な検討の余地があるが、どんなに臆目に見ても、大阪大学にとって「世界トップ 10 入り」が壮大な計画であることは間違いない。実際にトップ 10 入りしている大学の顔ぶれを見れば、**Harvard**、**MIT**、**Stanford** といったアメリカの一流大学や **Oxford**、**Cambridge** といったイギリスの歴史ある名門校が名を連ねている。

大阪大学が創立 100 周年を迎える 2031 年に英米の一流大学と比肩する大学として評価を受けるためには、間違いなく今までの大阪大学とは違った取り組みが必要だ。もちろん、今後は「大阪大学未来戦略」に則った取り組みが行われていくことになるわけだが、その中で私たちにできることは何だろうかと考え、この研究をはじめた。私たちは、大学ランキングにおいてアジア圏では特に高い評価を得ている香港の三大学（香港大学、香港科技大学、香港中文大学）に注目し、実際に現地での研究調査も行った。具体的には、上記三大学では学生向けアンケートや教職員の方へのインタビューを行い、大阪大学内でも学生向けのアンケートを実施してきた。

未熟さのあまり、苦労も多かったが、仲間とともになんとかここまでたどりつくことができた。このように報告書という形で研究を発表できること、そしてここに至るまで協力してくれた同級生の仲間を誇りに思う。

加えて、このような研究をしていく中で、大阪大学を含め様々な大学の先生から多くの助言やサポートを頂くことができた。それらのすべてが研究をしていく上での助けとなった。この場をお借りして改めて御礼申し上げたい。

学部一回生にしては大風呂敷を広げてしまった。身の丈に合った研究ではないかもしれない。それでも、この報告書が大阪大学を「世界 10 指」へといざなう一助となれば幸いである。

平成 26 年 2 月 13 日

小川 智之

リサーチメンバー一覧

外国語学部	中国語専攻	岡島大悟
外国語学部	中国語専攻	小川智之
外国語学部	英語専攻	鈴木佳織
外国語学部	ヒンディー語専攻	竹中李香
外国語学部	中国語専攻	土肥篤生
外国語学部	中国語専攻	平松佑太
外国語学部	ロシア語専攻	藤本映眞

目次

1. はじめに	
2. 第一章 ～世界大学ランキングの分析～	
① 世界大学ランキング紹介.....	1
② 大阪大学の Times Higher Education World University Rankings における現状.....	3
3. 第二章 ～香港及び阪大内におけるアンケート調査～	
① 香港大学アンケート調査結果.....	8
② 香港科技大学アンケート調査結果.....	24
③ 香港中文大学アンケート調査結果.....	38
④ 大阪大学アンケート調査結果.....	53
4. 第三章 ～世界大学ランキングに対する他大学のとりくみ～	
① 香港大学文学部 中野 嘉子准教授.....	72
② 香港科技大学・香港中文大学 各大学の職員の方々.....	78
③ 京都大学工学研究科 榎木哲夫教授（理事補）.....	82
5. 第四章 提言	87
6. おわりに・参考資料・謝辞.....	96

第一章

～世界大学ランキング の分析～

(文責 鈴木)

①世界大学ランキング 紹介

ひとくちに世界大学ランキングと言っても実は世の中には様々なランキングが存在する。ランキングを発表する機関が複数あり、それと同じ数だけ大学ランキングも存在するのだ。日本を始め、多くの国で注目されている大学ランキングとしては Times Higher Education World University Rankings、QS World University Rankings、Academic Ranking of World Universities (上海交通大学が発表している世界大学ランキング) また MBA のランキングとしてイギリスの有力紙 Financial Times が発表するランキングなどが挙げられるが、ここでは文部科学省の発表する「国立大学改革プラン」においても引用された Times Higher Education World University Rankings についてと、その評価基準・指標について取り上げる。

Times Higher Education World University Rankings とは、英国の新聞 Times が新聞の付録冊子として発行してい

る高等教育情報誌 The Times Higher Education において公表している世界大学ランキングである。英国の新聞社によって作られたランキングであるため英国の大学が高い順位に位置するように評価基準が設けられているともしばしば批判されるが、その評価基準は変に偏りがあるわけではなく様々な評価軸がバランスよく盛り込まれている。

2011-2012 版のランキングに使用された評価基準・指標が現在最新の 2013-2014 版のランキングまで使用されており、近年の評価は前年度の評価と比較して出されている。13 の performance indicator : 評価基準があり、さらにこの 13 の評価基準は 5 つの分野に分かれている。5 つの分野とは Teaching: the learning environment, Research: volume, income, and reputation, Citations: research influence, Industry Indicator: innovation, International outlook: staff, students and research であり、その 5 つの分野が全体の評価に占める割合は Teaching 30%, Research 30%, Citations 30%, Industry Indicator 2.5%, International outlook 7.5% である。より細かい評価指標とそれらが全体の評価に占める割合は下の通りである。(Citations は Research Indicator 内に Normalized Citation Impact (country adjusted) として含まれている。)

Teaching 教育関係 30%		
Academic staff / students	教育スタッフ数/学生数比率	4.50%
Doctoral degrees awarded / undergraduate degrees awarded	博士号授与数/学士号授与数比率	2.25%
Doctoral degrees awarded / academic staff	教育スタッフ一人当たりの博士号授与数	6%
Teaching reputation	教育関連のアンケート調査:教育の世評	15%
Institutional income / academic staff	教育スタッフ一人当たりの機関収入	2.25%
Research Indicators 研究関係 30%		
Papers / academic and research staff (normalized)	教育・研究スタッフ一人当たりの論文数(機関の規模に応じて調節)	6%
Research income / academic staff (normalized)	教育スタッフ一人当たりの研究費(機関の規模に応じて調節)	6%
Research reputation	研究関連のアンケート調査:研究の世評	18%
Citations 論文引用 30%		
Normalized Citation Impact (country adjusted)	論文引用(国別、機関の規模に応じて調節)	30%
Industry Indicator 産業関係 2.5%		
Research income from industry / academic staff	教育スタッフ一人当たりの産業界からの収入比率	2.50%
Industrial co-authorships*	産業界の研究者との共著論文比率	N/A
International Outlook Indicator 国際化関係 7.5%		
Academic staff – international / academic staff	教育スタッフ数に対する外国人教育スタッフ数比率	2.50%
Students – international / students	学生数に対する外国人学生数比率	2.50%
Papers – international co-author / papers	論文数に対する国際共著論文数比率	2.50%

Maximum value is 100.

* Industrial co-authorships are not available in 2013; they are under consideration for 2014.

②大阪大学の Times Higher Education World University Rankings における現状

過去四年間の世界大学ランキングにおける各年のトップ10大学の総得点と各評価基準の点数の平均値とその平均値

	Overall score	Teaching	International outlook	Industry Income	Research	Citations
2010-2011	92.98	92.88	65.28	70.49	95.31	96.44
2011-2012	92.45	91.15	68.81	71.7	95.07	98.74
2012-2013	92.64	91.22	68.49	73.57	96.22	98.07
2013-2014	91.96	90.06	72.62	71.42	94.77	97.61
平均値	92.51	91.33	68.8	71.79	95.34	97.72

過去四年間の世界トップ10大学の各評価における最低点の平均値

	Overall score	Teaching	International outlook	industry income	Research	Citations
2010-2011	89.5	84.2	29.5	34.5	89.7	88.3
2011-2012	89.8	82.8	49.6	35.9	87.4	93.9
2012-2013	90.4	85.1	49.7	39.9	89.2	93
2013-2014	87.5	83.2	57.3	40.6	88.1	90
平均値	89.30	83.83	46.53	37.73	88.60	91.30

上の表は過去四年間に Times Higher Education が発表した世界大学ランキングにおける各年のトップ10の大学の総得点と各評価基準の点数の平均値の平均をとったものおよび、世界トップ10の大学となるために最低限必要であった点数とその平均値である。世界トップ10の大学の総得点と各評価基準の点数の平均値は Overall score が 92.51 点、Teaching が 91.33 点、

International outlook が 68.8 点、Industry income が 71.79 点、Research が 95.34 点、Citation が 97.72 点であり、世界トップ10の大学となるために最低限必要であった点数の平均値は Overall score が 89.3 点、Teaching が 83.83 点、International outlook が 46.53 点、Industry income が 37.73 点、Research が 88.6 点、Citation が 91.3 点であった。ここで Times Higher

Education が過去四年間に発表した世界大学ランキングにおける大阪大学の評価を見る。

Times Higher Education の世界大学ランキングにおける過去四年間の大阪大学の評価

	順位	Overall score	Teaching	International outlook	Industry income	Research	Citations
2010-2011	130	53.4	61.7	20.1	73.4	63.4	40
2011-2012	119	51	61.8	21.1	75	56.5	40
2012-2013	147	52	59.5	23.6	69.6	55.7	46.4
2013-2014	144	49	52.5	27.6	71.2	47.6	50.4

過去四年間の Times Higher Education の発表する世界大学ランキングにおける大阪大学の順位は2012-2013年から2013-2014年にかけて僅かな上昇が見られるものの、約十五位下がっている。しかし、Times Higher Education が評価するのは三年前の大学の実績であるので、現在も大阪大学の数値上の評価が下がり続けているとは言えないが、大阪大学の評価が下がっていたことは紛れもない事実である。直近

の評価点、2013-2014年のTimes Higher Education の世界大学ランキングにおける大阪大学の評価点はOverall scoreが49点、Teachingが52.5点、International outlookが27.6点、Industry incomeが71.2点、Researchが47.6点、Citationsが50.4点であった。この大阪大学の直近の評価点と世界トップ10の大学の過去四年間の各評価点の平均値を比較する。

大阪大学と世界トップ10の大学の各評価点の比較

	大阪大学	世界トップ10の大学の平均値	世界トップ10の大学の最低点の平均値
Overall score	49	92.51	89.3
Teaching	52.5	91.33	83.83
International outlook	27.6	68.8	46.53
Industry income	71.2	71.79	37.73
Research	47.6	95.34	88.6
Citations	50.4	97.92	91.3

Industry income を除き、大阪大学の評価点は世界トップ10の大学の評価点の平均値にも、最低点の平均値にも遠く及んでいない。世界トップ10の大学の最低点の平均値との差は、Overall score においては約40点、Teaching においては約30点、International outlook においては約20点、Research においては約40点、Citation においては約40点ある。大阪大学が世界トップ10の大学となるためには最低でもこれらの点差を埋めなければならない。しかし、

具体的には大学のどういった点が評価されるのか、例えば大阪大学の Teaching : 教育のどういった点が評価され、逆にどういった点が評価されていないのかがわからなければ、ただ闇雲に対策をすすめることになってしまう。そこで、THOMSON REUTERS が発表した Times Higher Education 2013-2014 年版の大学世界ランキングのより細かい評価指標とその細かい評価指標における大阪大学の評価点を見る。

Teaching Indicators

大阪大学

Academic staff / students	79
Doctoral degrees awarded / undergraduate degrees awarded	58
Doctoral degrees awarded / academic staff	50
Teaching reputation	45
Institutional income / academic staff	48

Research Indicators

Papers / academic and research staff (normalized)	47
Research income / academic staff (normalized)	44
Research reputation	49
Normalized Citation Impact (country adjusted)	50

Industry Indicators

Research income from industry / academic staff	71
Industrial co-authorships*	N/A

International Outlook Indicators

Academic staff - international / academic staff	27
Students - international / students	36
Papers - international co-author / papers	21

Maximum value is 100.

* Industrial co-authorships are not available in 2013; they are under consideration for 2014.

世界トップ10の大学のより細かい評価基準における評価データを入手することができなかつたため、このデータを世界トップ10の大学のデータと比較することはできないが、大阪大学のデータのみを見るだけでも得るものは多くある。例えば世界トップ10の大学となるために最低限必要な点数との差が約30点ある評価基準、**Teaching Indicator** を見てみると、一口に**Teaching** といっても学生数に対する教育スタッフ数、学士号授与数に対する博士号授与数、教育スタッフひとりあたりの博士号授与数、教育関連のアンケート調査:教育の世評、教育スタッフひとりあたりの機関収入などかなり具体的な評価対象があることがわかってくる。さらに、点数を見てみると学生数に対する教育スタッフ数:79点、学士号授与数に対する博士号授与数:58点、教育スタッフひとりあたりの博士号授与数:50点、教育関連のアンケート調査:45点、教育スタッフひとりあたりの機関収入:48点である。**Teaching** の中で見てみると最も点数が高いのは学生数に対する教育スタッフ数:79点で、最も点数が低かったのは教育関連のアンケート調査(教育の世評):45点であった。よって、**Teaching** の対策を行う際は特に教育関連のアンケート調査(教育の世評)の点数を上げる対策を行うべきだということがわかる。同様にほかの評価基準の点数を見てみると、**Research Indicator** では教育スタッフひとりあたりの研究費:44点、**International Outlook Indicator** では論文数に対する国際共著論文数比率:21点が最も評価点の低い評価指標であるということがわかった。しかし、**Research Indicator** と **International**

Outlook Indicator においては特に突出して点数の高い評価基準はないため、大阪大学の世界大学ランキングにおける順位を上げるためには、どの評価基準に対しても力を入れて対策をするべきであろう。

しかし、これに加えランキングにおける順位を上げようとする際にはもう一つ注意しなければならないことがある。それは5つの評価基準の分野が全体の点数に占める割合や、細かい評価指標がその分野において占める割合である。具体的にいえば、**Teaching** の評価点が総合点においてどれほどの点数を占めているのか、その**Teaching** のより細かい評価指標の一つである **Academic staff/student** の評価点が**Teaching Indicator** 全体の点数においてどれほどの点数を占めているのか注意を払わなければならないことである。例えば、大阪大学の **International outlook** の評価点は27.6点とほかの分野の点数と比べて格段に低い、この **International outlook** の点数を上げる対策を行ったとすると総合点にはどのような影響が出てくるだろうか。残念ながら、**International outlook** の評価点は総合点に対してわずか7.5%しか占めないため、仮に大阪大学の **International outlook** の評価点が100点になったとしても総合点は約5点しか上昇せず、順位は144位から50位上昇し94位にしかならない。

(2013-2014年度版のTHE参照)弱点を克服することは確かに点数や順位の上昇につながるが、総合点に占める割合によっては必ずしも大幅な総合点の上昇にはつながらないのだ。逆に、総合点に占める割合の高い評価基準を意識して対策を行いさえすれ

ば大幅な総合点の上昇が見込める。その例を一つ挙げると、Teaching のより細かい評価指標：Teaching Indicator の Teaching reputation が挙げられる。Teaching Indicator には 5 つの評価指標があり、それぞれの評価点が Teaching Indicator の点数や総合点において占める割合は、Doctoral degrees awarded/undergraduate degrees awarded が 4.5%、Doctoral degrees awarded/academic staff が 2.25%、Teaching reputation が 15%、Institutional income/academic staff が 2.25% である。現在 Teaching reputation の点数は 45 点だが、仮にこの点数が 100 点になるとすれば、総合点は約 36.1 点と大幅に上昇し、85.1 点になり、順位は 130 位上昇し、14 位になる。
(2013-2014 年度版の THE 参照)

Teaching reputation の他に Research Indicator にも Research reputation という評価指標があり、この評価指標も総合点に占める割合が 18% と非常に大きい。しかも、この Reputation という評価指標は他の評価指標よりも総合点に対して占める割合が大きいだけでなく、他の評価指標よりも対策を進めやすいと思われる。そもそも Reputation とは大阪大学の教育や研究に関する世評であり、要するに大阪大学の Teaching・Research についての情報がいかに世の中に知られ、認められているかということである。大阪大学の現在の実力を世の中に認知してもらうことが点数に繋がるのだから、大阪大学の実力を伸ばすこと、つまり職員数や博士号取得者数、機関収入や論文数、他にも研究費、産業収入、外国人職

員・研究員数を増やすことに比べれば、もともとある事実を世の中に認知させるという Reputation に対する対策はより行いやすく、即効性もあるのではないだろうか。以上のことを考えれば、2031 年までに世界トップ 10 入りを目指す大阪大学はこのように大幅な点数の上昇を見込め、かつ対策が行いやすく点数にもつながりやすい評価基準に対する対策を最初に行うべきではないか。

第二章

～香港及び阪大内におけるアンケート調査～

(文責 岡島・竹中)

①香港大学アンケート調査結果

我々は、2013年9月中旬、下旬に香港大学に赴きアンケート調査を実施した。総計で248枚の有効回答数を得た。2013年11月現在時点の統計によると総学生数は27005人となっており、全学生における0.92%を占めていることになる。総学生数の内訳としては、学部生15227人、院生11778人となっている。学部生は、210枚の有効回答を得て1.38%、院生は38枚の有効回答を得て0.32%を占めていることになる。

1. 香港大学に在籍する交換留学生の出身国・地域について

現在、香港大学全体では留学生が10491人在籍しており、内訳として、外国人留学生在が9303人、交換留学生在が1188人在籍している。外国人留学生在については6割以上を中国本土からの学生が占めている。なおここでは、交換留学生を中心に取り

上げる。大きな地域ごとに資料を見てみると、北米中米南米(アメリカ、カナダ、メキシコ、チリ)からの留学生在数が464人で39.06%を占めて最も多く、次にヨーロッパ(フランス、イギリス、ドイツ、スペインなど)からの留学生在数が331人で27.86%を占め、アジア(日本、韓国、シンガポール、台湾など)からの留学生在数が316人で26.60%を占める結果となった。

<http://www.cpaohku.hk/qstats/student-profiles>

(出典：香港大学公式ホームページ)

外国人留学生の割合とは大きく異なる結果が出ている。(広義の)アメリカ地域、ヨーロッパ地域、アジア地域からばらつきがなく、安定した割合の交換留学生を獲得していることからやはり、香港がグローバルシティで、世界共通語の「英語」を公用語としている強みは生かされているだろう。

2. 香港大学から交換留学した学生の渡航国・地域について

次に、香港大学の学生が留学先として選択している国々や地域について検証する。全体で1065人が交換留学しており、ヨーロッパ地域が417人で39.15%を、次いで(広義の)アメリカ地域が404人で37.93%、アジア地域が167人で15.68%を占める結果となっている。

<http://www.cpaohku.hk/qstats/student-profiles>

(出典：香港大学公式ホームページ)

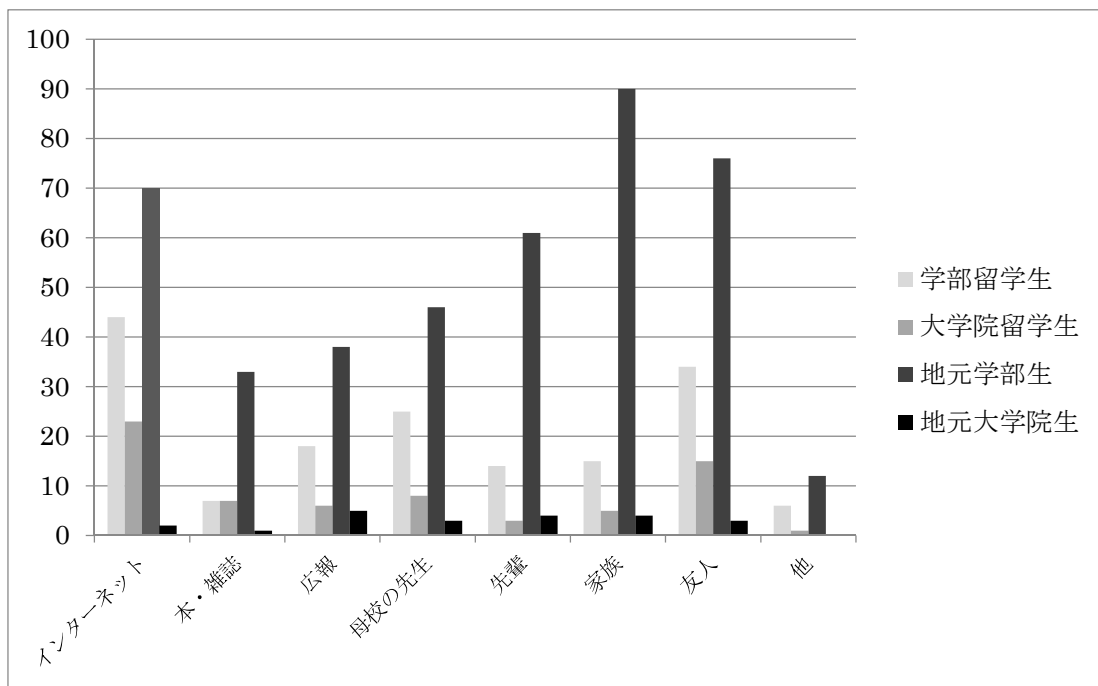
資料を読み解くと前項目の問いと比較し、異なる結果が出た。香港大学に在籍する学生の割合は3地域でそれほど差は生じてい

なかったが、香港大学からの交換留学先として選択された比率を比べると、アジア地域が低い結果となっている。これは、一般に研究力の強さから生じる強い魅力を有する欧米諸国の大学に比べて、アジア諸国の大学は十分それに対応しきれていないということがうかがえるだろう。

3. 香港大学を知ったメディアについて

ここでは、香港大学を知った媒体について掘り下げることとする。なお、この質問については複数選択可とした。留学学部生76人にアンケートを実施したところ、44人(57.89%)が「インターネット」と答え、次いで34人(44.74%)が「友人」を選択した。出身大学の生徒間においても、香港大学の知名度は突出しているであろう。一方で、「本・雑誌」と答えた学生数はわずか7人(9.21%)であった。この傾向は、他2大学でも見られる。留学院生30人に同様の質問をしてみると23人(76.67%)が「インターネット」、15人

(50%)が「友人」と回答した。留学学部生と比較してみると、ほぼ同程度の回答比率となっている。次に地元学部生に焦点を当てよう。地元学部生134人にアンケート実施したところ90人(67.16%)が「家族」を、76人(56.72%)が「友人」を、70人(52.24%)が「インターネット」を選択していた。他2大学と比較しても、「家族」や「友人」などの割合が高い結果となっていたことから、学生だけではなく、一般市民の香港大学に対する評価が高いことがわかる。香港大学は1910年の創立で香港最古の大学であり、そのことも影響を与えているのであろう。最後に、地元院生に関して、地元院生には8人にアンケートを実施した。そのうち5人(62.5%)が「広報」を、4人(50%)がそれぞれ「先輩」、「家族」を選択しており、「広報」の面でも他2大学と比較し充実していると考えられる。

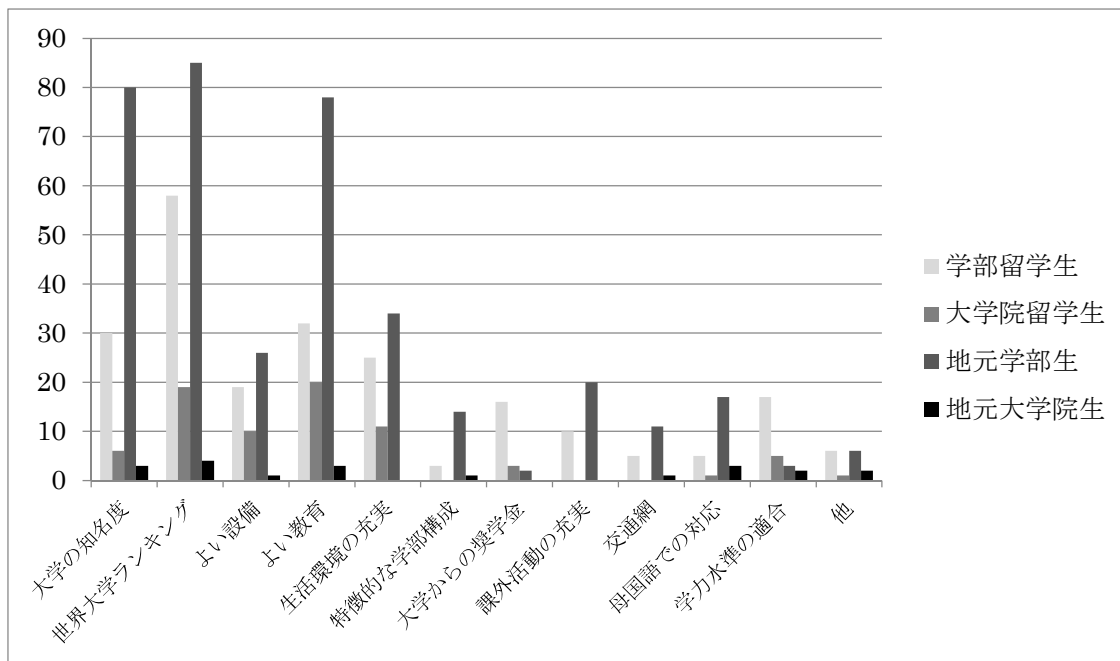


4. 香港大学を進学先に決定した理由について

続いて、実際に進学先決定の要因について掘り下げる。なおこの質問も複数回答可とした。まず、留学学部生に関しては58人(76.32%)が「世界大学ランキング」を、続いて32人(42.11%)が「良い教育」を挙げた。このことから、他2大学と同様に、海外にも香港大学の良質な教育が知れ渡っていることがうかがえると同時に、2013年現在、香港三大学の中で最も「世界大学ランキング」が高い香港大学では、留学に際し、「世界大学ランキング」を大いに参考にし、それを指標にして進学先を決定していることがわかる。留学院生に関しては、20人(66.67%)が「良い教育」を、続いて19人(63.33%)が「世界大学ランキング」を挙げている。留学院生も、「世界大学ランキング」に重きを置いて進学先の決定を下している割合が高いこと

を示す結果になったことから、香港大学に在籍する留学生は総じて上記のことが言えるだろう。地元学生に関しては85人(63.43%)が「世界大学ランキング」を、続いて80人(59.70%)が「大学の知名度」を選択した。地元学部生では、香港科技大学、香港大学の学生が「世界大学ランキング」を一番多く選択していた。地元学部生にも、「世界大学ランキング」を重視する傾向が表れており、それに「知名度」をプラスして最終的に進学先を決定しているようである。地元院生に関しても、4人(50%)が「世界大学ランキング」を、3人(37.5%)が「大学の知名度」「質の良い教育」「母国語での対応」を選択していた。地元院生に関しても同様のことが言えるだろう。しかし、全体的に「生活環境の充実さ」を回答した学生が少ない結果となった。これは香港中心部にありショッピングなどに便利な点もあるが、大学付近の道路が狭いなど、他2大学と比較して喧騒としている街中に

香港大学が存在していることが大きな要因として考えられる。



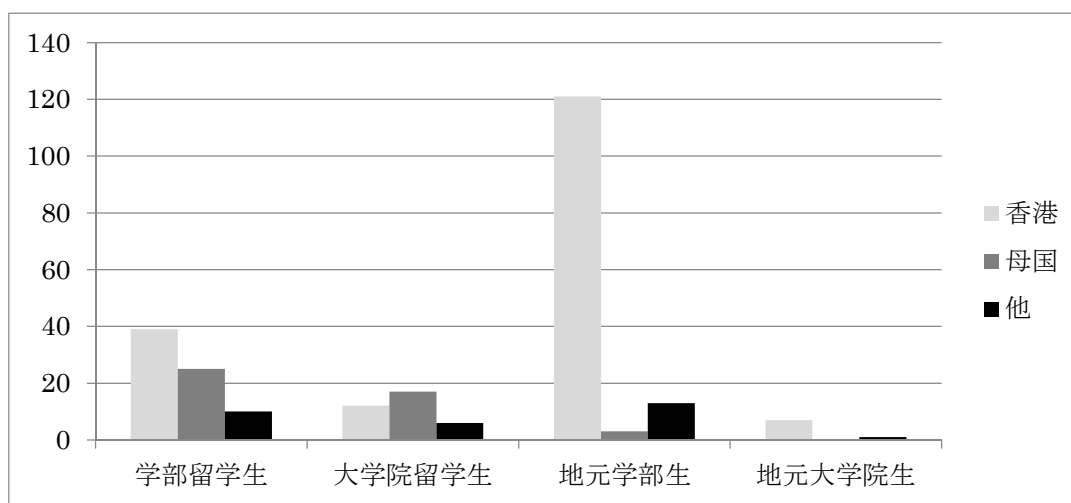
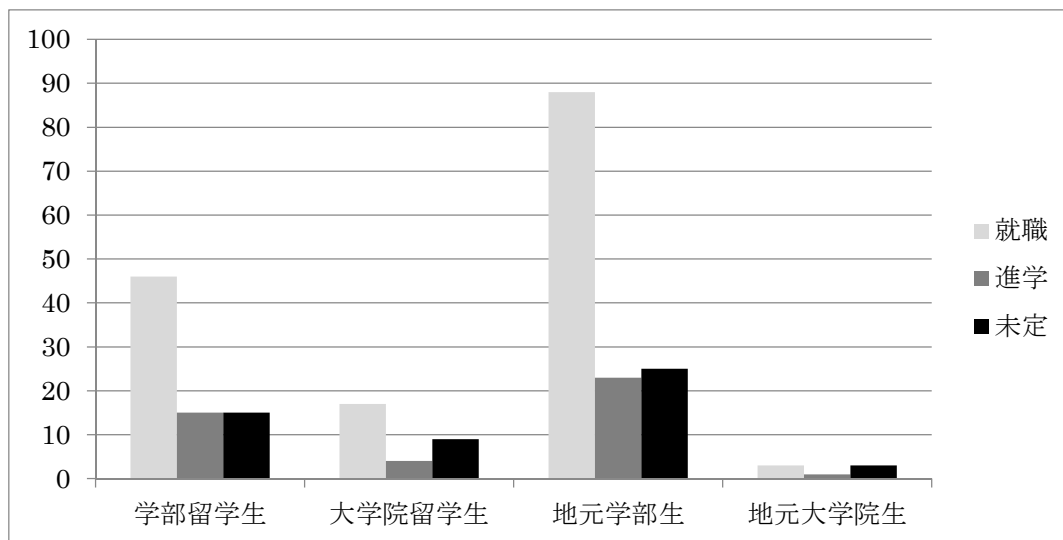
5. 香港大学に在学する学生の今後の進路について

留学学部生は46人(60.53%)が「就職」を、15人(19.74%)が「進学」「未定」と答えた。また進路先としては「香港」が最も多く、ついで「母国」、「その他」と続いた。また「アメリカ」という声が多く聞かれた。「香港」が最も多かったことから、卒業後そのまま「香港」に滞在し続ける割合が高いと見受けられる。中国人留学生に的を絞ると、「香港」よりも「母国」と回答した学生が最も多く、今後経済発展が期待される母国中国で就職する割合が高いとの結果が出た。中国だけではなく、BRICS諸国の留学生はこの傾向が強い結果となった。これは、他2大学と類似した傾向が出ている。留学院生に関しては、17人(56.67%)が「就職」を、9人(30%)が「未

定」、4人(13.33%)が「進学」と回答した。就職先としては「香港」、「母国」、「日本」、「アメリカ」、「シンガポール」が見受けられた。進学先としては、「アメリカ」や「イギリス」などの欧米が目立つ結果となった。地元学生に関しては88人(65.67%)が「就職」を、25人(18.66%)が「未定」、23人(17.16%)が「進学」と答えた。進路先としては回答数のうち9割近くの大多数が香港を選択したが、一部では「イギリス」、「アメリカ」、「カナダ」、「台湾」、「韓国」などの声も聞かれた。しかしながら、地元学部生の積極的な海外への「就職」、「進学」は見られない結果となった。他2大学も同様の状態にあるため、香港の学生は総じて上記のことが言えるだろう。しかし一方で、「進学」する率が他2大学と比べて高い面もある。地元院生に関しては、3人(37.5%)が「就職」、「未定」を、1

人（12.5%）が「進学」を選択した。進路先としては、7人（87.5%）が「香港」と答えるなど地元生は、院生を中心に比較

的地元志向が強い結果となっていることが明らかとなった。



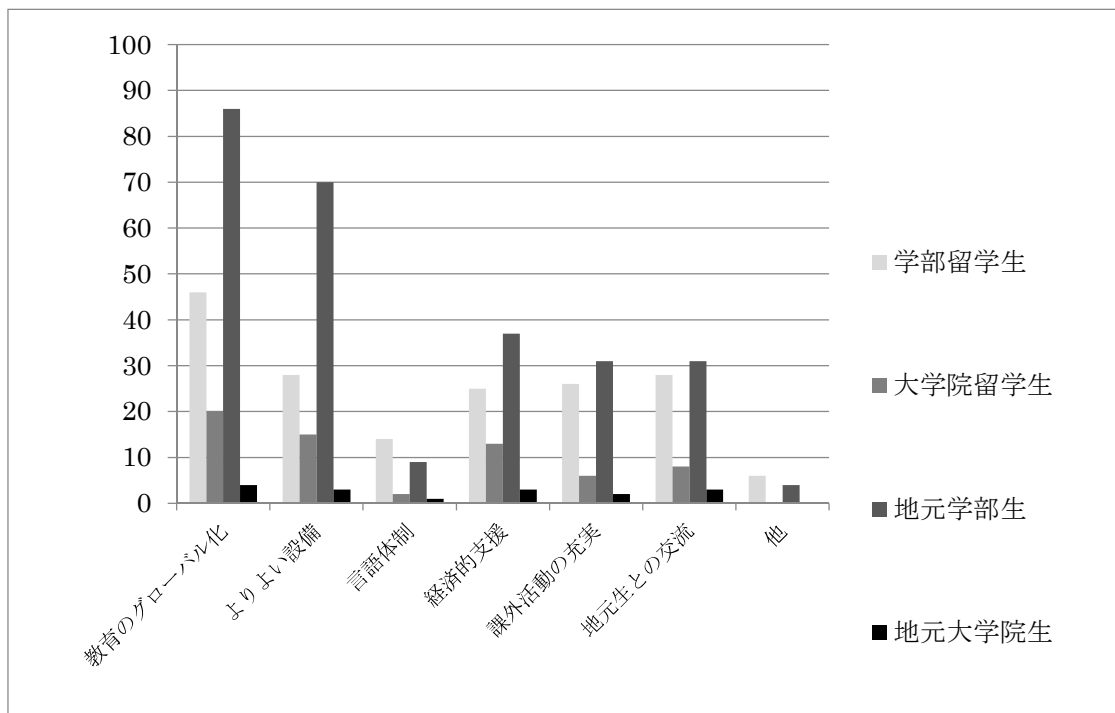
6. 香港大学に求める要素について

ここでは、香港大学に求める要素、つまり香港大学に在学する学生の不満を掘り下げていく。ここでの質問も複数回答可とした。留学生、地元生ともに「教育のグローバル化」を求める声が多かった。これは、他2大学でも見られる現象であった。ここで、詳細に分析すると、留学学部生は、46人（60.

53%）が「教育のグローバル化」を選択し、割合的に最も高く、次に高かったのは28人（36.84%）が回答した「より良い設備」「地元学生・住民との交流の場」であった。インタビューをしたところ、設備に関しては食堂の拡充などを求めている学生が見受けられた。また、医学部研究生にインタビューした際には、メインキャンパスから離れたところにあるので、統合してほしいと

の意見も見受けられた。留学院生に関しては、20人(66.67%)が「教育のグローバル化」を、15人(50%)が「より良い設備」を選択した。このことから留学院生に関しても、上記のことが言えるだろう。次に、地元学部生に関しては、86人(64.18%)が「教育のグローバル化」を、70人(52.24%)が「より良い設備」を選択した。2014年にはMTR「香港大學駅」が香港大学のメインキャンパスの入口に誕生する予定である。長らく香港大学は、香港中心部から地下鉄とバスを乗り継いで行くなど交通が不便であったが、これを機に一気に解消できるであろう。これによって、交通の不便さからくる設備に対する不満は

改善するだろう。また地元院生に関しては、4人(50%)が「教育のグローバル化」を、3人(37.5%)が「より良い設備」「経済的支援」「地元の学生・住民との交流の場」を回答しており、地元院生に関しては、引き続き上記の面のことと、奨学金などの経済的支援を求めている。ここから香港大学全体としては「教育のグローバル化」を求める学生が多数いるということが判明した。留学生比率の面から考えると香港3大学の中で一番充実している香港大学でもこのような結果が出ていることから、更なる「国際化」を学生も取り巻いて断行していかなければならないだろう。

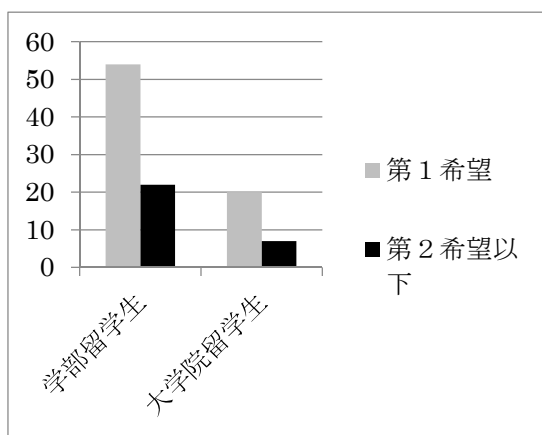


7. 香港大学の希望順位について

留学生のみを対象にアンケートを実施した。留学学部生に関しては、54人(71.05%)が第一希望を香港大学にしており、22人(28.94%)が他大学を希望して

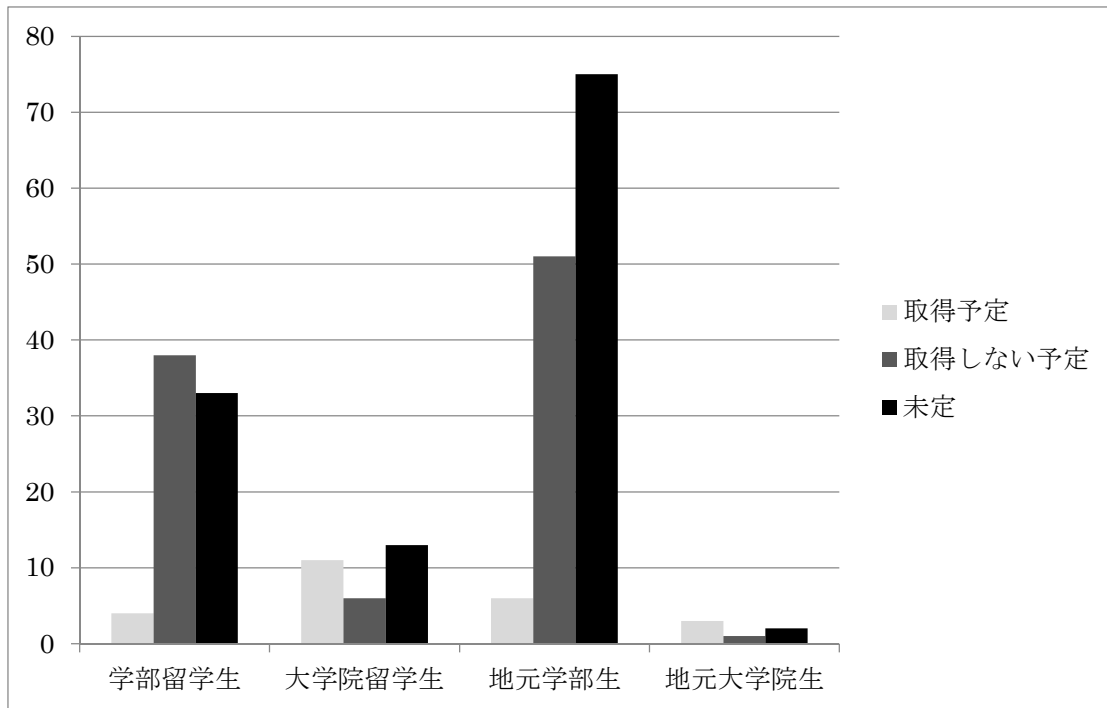
いた。それらの第1希望としては、具体的な大学名としてケンブリッジ大学、マサチューセッツ工科大学、カリフォルニア大学バークレー校、メリーランド大学、香港中文大学、香港理工大学など欧米のトップレベル大学が目立った。第一希望を断念した理由

には、第1希望大学の奨学金がもらえなかったからという面が目立った。米国の私立大学の学費では、平均的に日本の国立大学のそれと比較して10倍もの開きがある。奨学金をもらえなければ留学するのは厳しいと言わざるを得ない。留学院生に関しては、20人(66.67%)が第一希望を香港大学にしており、7人(23.33%)が他大学を希望していた。それらの第一希望先としては、具体的な大学名として、ケンブリッジ大学、香港科技大学、香港中文大学、比較的地元の大学が目立っている。その中でも香港大学を選択した理由は、希望の学部が存在するなどの回答が多かった。香港大学は、学部数が香港最大であるため、他2大学と比較しても多様なニーズに合った大学だといえるであろう。なお、おおよそ半数程度の学生が無回答であった。



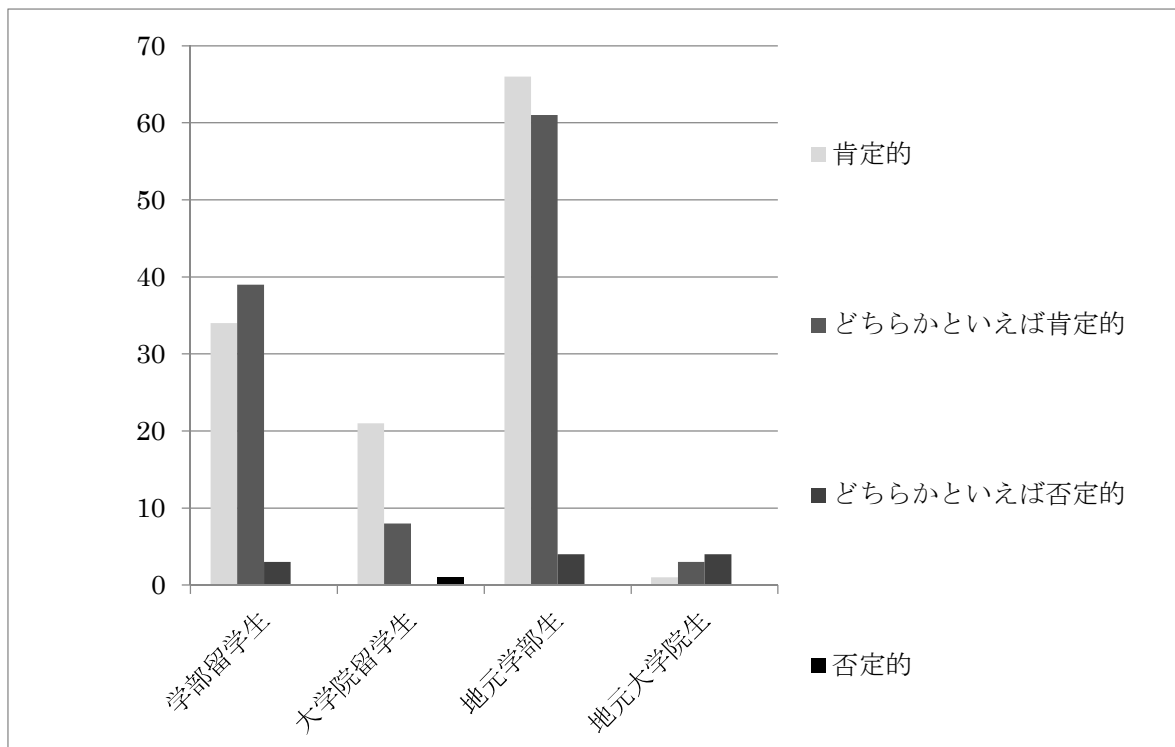
8. 博士号取得について

博士号取得に関して、全体では243人の回答者のうち24人(9.88%)が「取得する予定」、96人(39.51%)が「取得しない予定」、123人(50.61%)が「未定」と回答した。留学学部生では75人の内4人(5.33%)が「取得する予定」、38人(50.67%)が「取得しない予定」、33人(44.00%)が「未定」と答えた。留学院生では30人中11人(36.67%)が「取得予定」、6人(20.00%)が「取得しない予定」、13人(43.33%)が「未定」と答え、留学院生の取得予定という回答が多かった。そもそも院生は博士号習得のために院に行く者が多いため当然の結果である。続いて現地学生であるが、回答した学部生全132人のうち6人(4.55%)が「取得予定」、51人(38.64%)が「取得しない予定」、75人(56.82%)が「未定」と答えた。院生では6人中3人(50%)が「取得予定」、1人(16.67%)が「取得しない予定」、2人(33.33%)が「未定」と答えた。他2大学と何ら変わりのない結果であった。



9. 香港大学に抱くイメージについて
 全体では245人の回答者の内122人(49.80%)が「肯定的」、111人(45.31%)が「どちらかといえば肯定的」、11人(4.50%)が「どちらかといえば否定的」、そして1人(0.41%)が「否定的」と回答

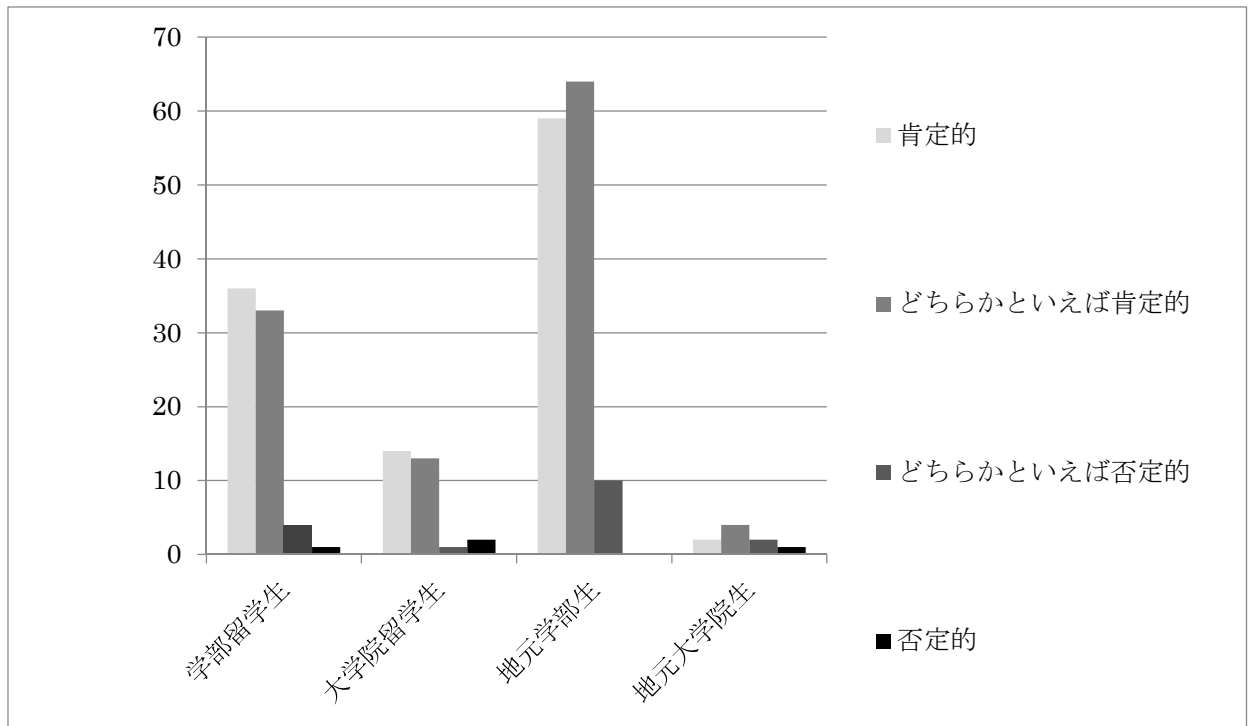
した。「否定的」と回答したのは留学院生1人のみで、「どちらかといえば否定的」と答えた人数と合わせても全体の5%にも満たない。香港最高学府だけあって、やはり学生の満足度も高いようだ。



10. 香港という土地に抱くイメージについて

全体の回答数は246人であった。香港という土地に「肯定的」なイメージを抱いているのは111人(45.12%)、「どちらかといえば肯定的」なのは114人(46.34%)、「どちらかといえば否定的」なのは17人(6.91%)、「否定的」なのは4人(1.63%)であった。肯定的な意見が多く、香港大学に抱くイメージと比較したとき全体

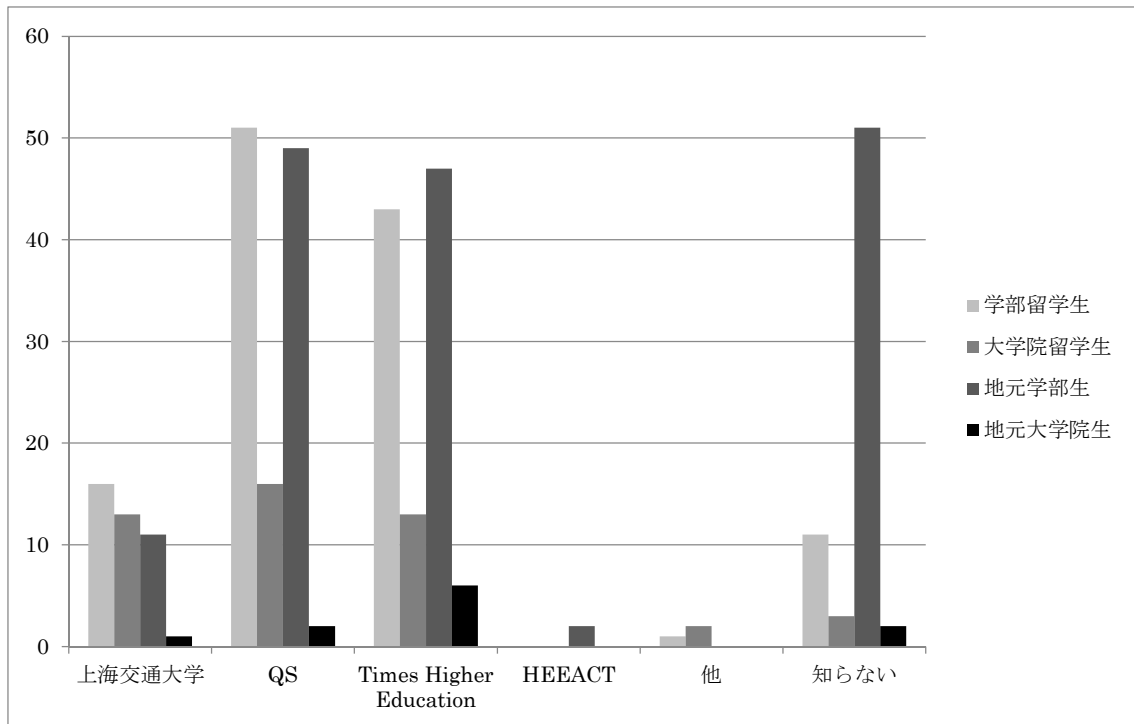
的に大きな変動はないが、少し否定的な意見は増えたようだ。個別に割合を見てみると、留学・現地両学部生のそれぞれの割合に大きな変化がない一方で、院生(0.00%⇒11.11%)・留学院生(3.33%⇒6.67%)については「否定的」の回答が増えている。これは早く海外で働きたいという気持ちの表れなのか、単に長く居住していた香港が嫌いになってしまった結果なのかは定かでないが、香港大には満足でも香港に満足しない人がいるという事実は面白い。



11. 認知している世界大学ランキングについて

香港大学では全体の80.29%が世界大学ランキングについて認知しているという結果が出た。この結果から多数の学生が世界大学ランキングについて認識していることがわかる。そのなかで、QSが最も学生に認識されており、全体の34.71%を占めていた。続いてTHEが32.06%を占めており、僅差ではあるがQSの方が学生に浸透しているようである。また、上海交通大学やHEEACTについて認識している学生は少数であることが判明した。また、世界大学ランキングについて「知らない」と回答した学生は全体の19.71%を占めていた。そのうちの76.11%が地元の学部生であった。また、地元の学部生に限定して考

察してみると地元の学部生全体のうち、「知らない」と回答した学生が最も多く31.86%を占めていた。続いてQSが30.63%であり、THEは29.36%という結果となった。また、留学生と地元生を比較すると、留学生が「知らない」と答えた割合は留学生全体の8.28%であるのに対して、地元生全体では「知らない」と回答した割合は29.94%であった。進学時に世界大学ランキングについて一考する留学生が地元生より多数であり、また地元生に関しては地元の知名度をより重視する傾向にあるという結果から、ランキングに対する意識の差がアンケートに反映されたと考えられる。これより、全体的に約2割の学生が、ランキングについて意識していないようであるが、地元の学部生においてはその傾向が顕著であることがわかった。

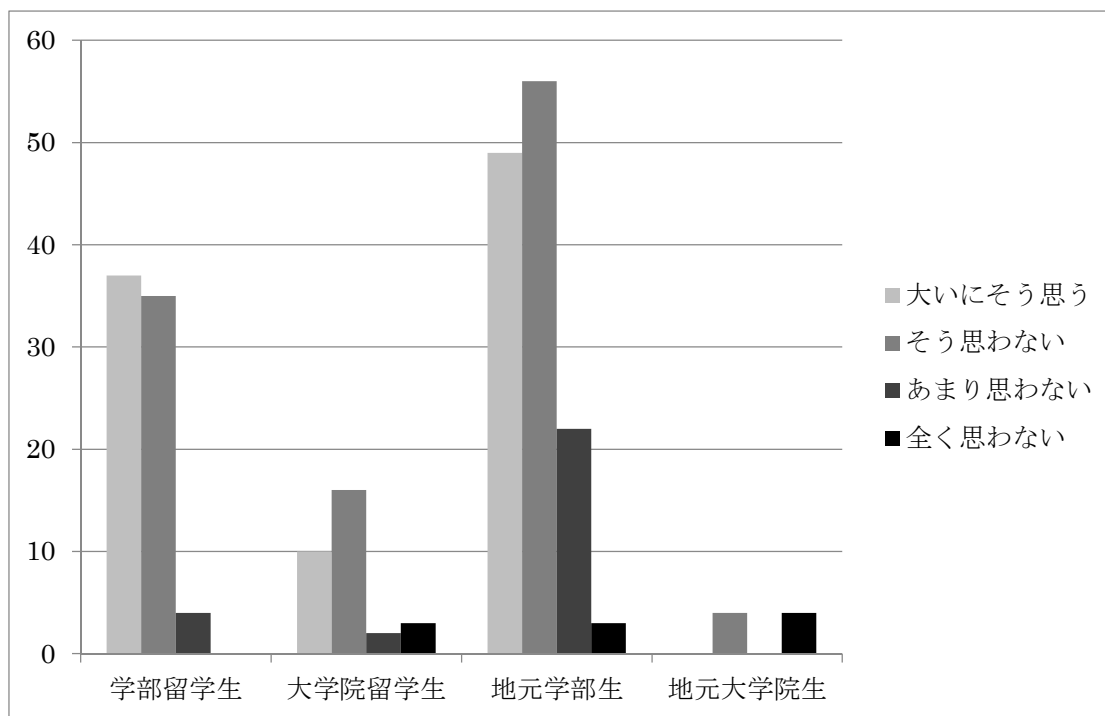


1 2. 進学に際し世界大学ランキングが考慮される比重について

進学先として世界大学ランキングを重要視する度合いについて、「大いにそう思う」を選択した学生は全体の39.18%、「そう思う」を選択した学生は45.31%であり、両者を合わせた84.49%もの学生がランキングを重要視することがわかった。この割合は、3大学のなかで最も高く、非常に大勢の学生が進学時に世界大学ランキングについて考慮することが伺える。実際、香港大学は世界大学ランキングの順位が3大学の中で最も高い。この事実は、香港大学を志望校として決定した学生たちの動機のひとつである可能性が高いと考えられる。特に、留学生の学部生においては94.47%の学生がランキングを重視していると回答しており、海外に進学する留学生にとっては、世界大学ランキングが志望校を決定する際の重要な指標になっていることが、顕

著に現れている。また、留学生の院生や地元の学部生においても進学時にランキングを考慮する学生が80%を超えている。しかし、アンケートに回答した地元の院生全体に関しては、「そう思う」を回答した学生が50%、「まったく思わない」を選択した学生が50%であった。地元の院生に関しては、世界大学ランキングを進学の決定の要因として重要視する学生もいるが、全くしない学生も少なくないことがわかる。比較的、世界大学ランキングの順位において西欧やアメリカの大学が高順位を占める中、学部を経て大学院に進むと決めた時、海外ではなく地元・香港の大学院を志望していることから、地元の院生は世界大学ランキングとは別に、各々の持つ進学の動機があったのだと思われる。よって、香港大学全体では、圧倒的多数の学生が世界大学ランキングを重視していることが判明した一方、地元の院生に関しては、その傾向が比較的

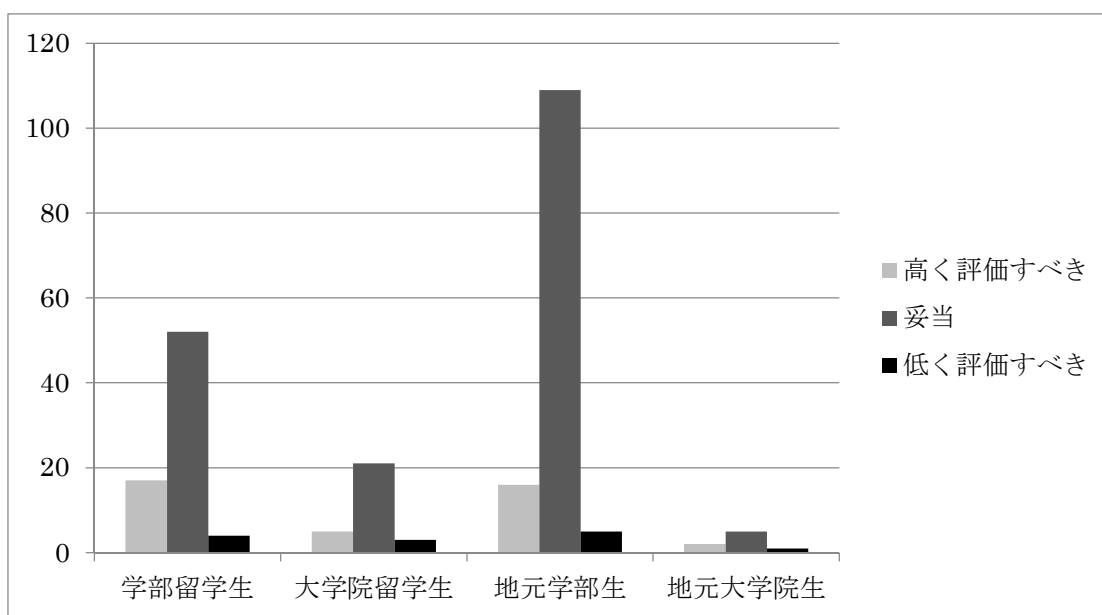
薄いことがわかった。



13. 香港大学の世界大学ランキングの順位について

香港大学の学生の78.26%が「妥当である」と選択しており、最も割合が高かった。香港3大学の間で比較すると、同項目において香港科技大学が58.79%、香港中文大学が36.77%であることを踏まえると相対的に高い数値であり、香港3大学のなかで香港大学の学生が最も、自身の大学の順位について納得しているといえる。また、「もっと高く評価されるべきだ」を回答したのは、全体の17.39%であり、「もっと低く評価されるべきだ」を回答したのは5.65%であった。よって、「もっと低く評価されるべきだ」を選択した学生が非常に少ないことから前に述べたことがいえるであろう。特に、地元の学部生の全体

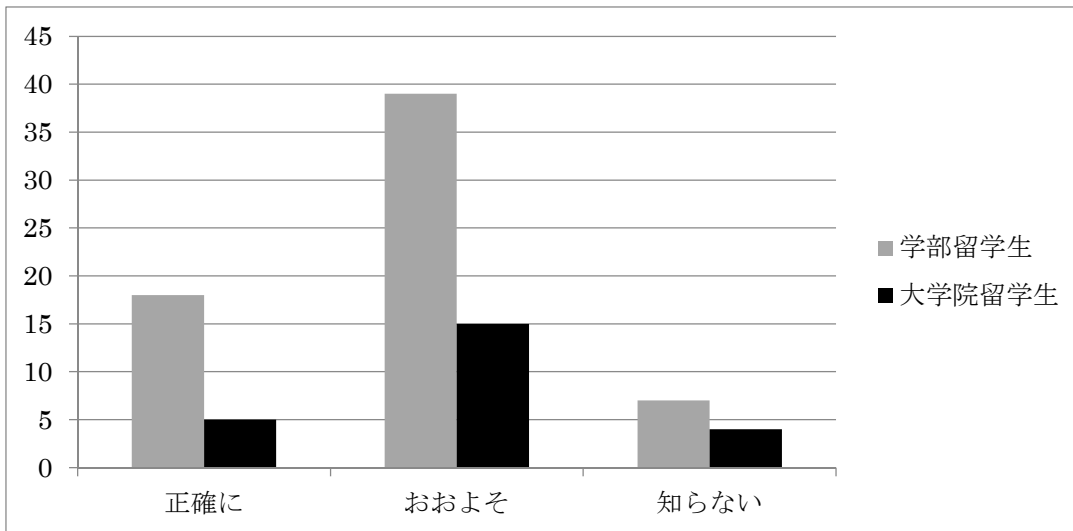
においては、90.83%もの学生が「妥当である」を回答している結果となった。このことから、地元の学部生の大多数はランキングの順位について受け入れていると考えられるが、そもそも地元の学部生は世界大学ランキングについて、認知していない学生や、進学の際に考慮していない学生が少なからず見受けられたので、単に自身の大学の順位について妥当であるか見極めることが困難であり、その結果、「妥当である」を選択した可能性があり、その点は留意しておくべきである。しかし、全体的な結果から、また「妥当である」という項目を選択した割合が、留学生全体で70%を超え、地元生の院生では、62.5%であったことから、香港大学では世界大学ランキングの順位について受け入れている傾向が強いといえる。



1 4. 出身大学のランキング把握について

アンケートに回答した留学生において自身の出身校の順位について、26.14%が「正確に把握している」、61.36%が「おおよそ把握している」、12.5%が「把握していない」と回答した。3大学内で比較すると、出身大学の順位を把握している学生の割合が高い結果となっている。しかし、“正確に”把握しているのは、把握している学生の内29.87%であり、多数の学生は自身の出身校のランキングの順位について明確に認識していないことがわかる。この

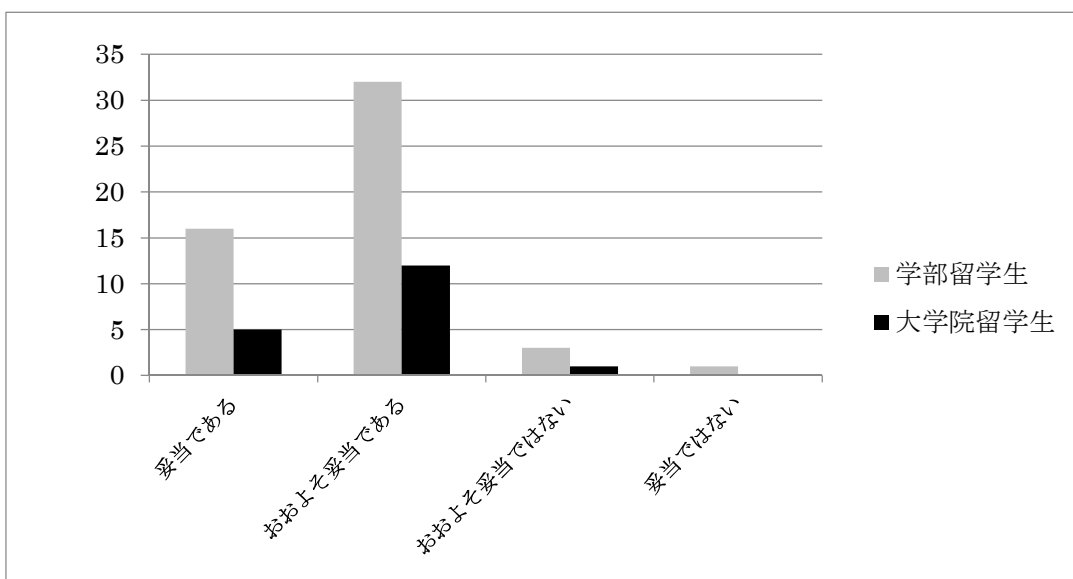
ことから、多数の留学生は進学先を決める際に世界大学ランキングを重要視する傾向にあるが、その時、出身大学のランキングの順位より進学先の大学、つまり香港大学のランキングの順位に重点を置いていたり、また世界大学ランキングを進学の動機の一つとして、参考程度に考えていたりする学生がいる可能性があるといえるだろう。しかし、結果的に、「把握していない」を選択した学生が少数であることから、多くの留学生は自身の出身校の順位について意識しているようである。



15. 出身大学と香港大学とのランキング順位の比較における妥当性

香港大学に留学した学生は、各々の出身大学と香港大学との順位の妥当性について30%が「妥当である」、62.86%が「おおよそ妥当である」を選択している。両者を合わせた92.86%の学生が妥当性について肯定的に捉えている。この割合は3大学の中で最も高い結果となった。また、特に香港大学の場合、「妥当である」と明確な回答をした学生も30%と3大学内で最も高

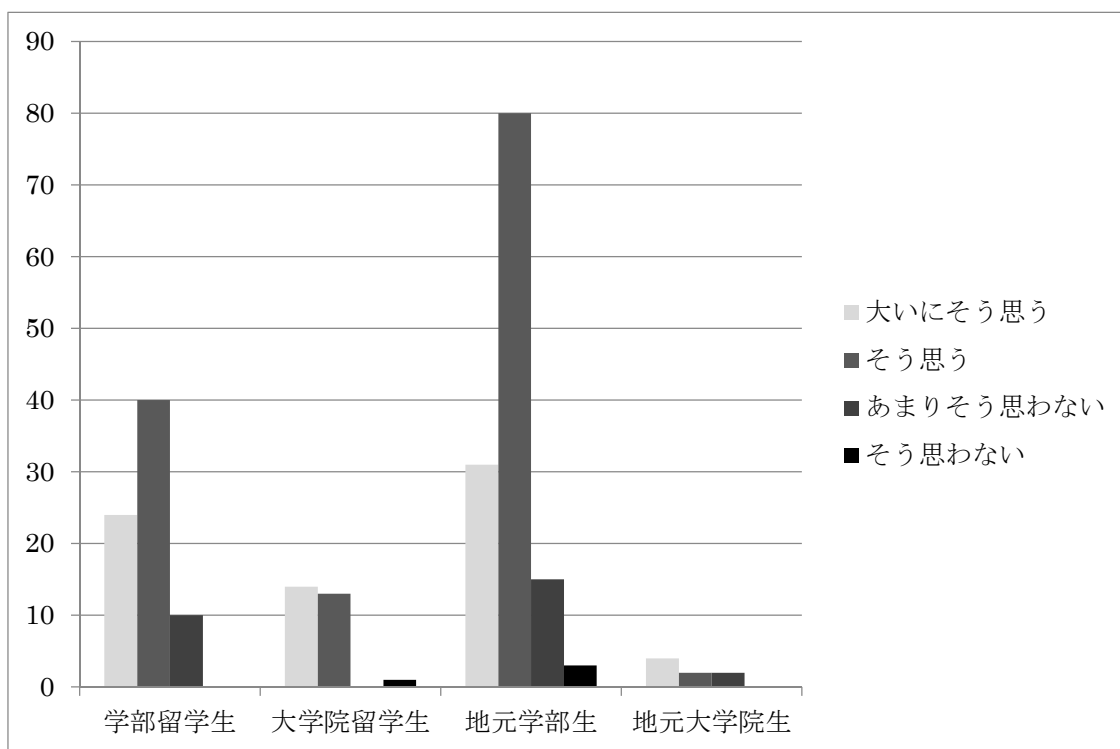
かった。このことから、香港大学に進学した学生は出身大学と香港大学の順位の妥当性について偏頗に感じている学生は比較的少数であることがいえる。よって、留学生が出身大学と香港大学とを比較した結果、ランキングの順位に妥当性を感じた場合が多数であったとすることができる。また、実際に香港大学の留学生全体ではランキングを信頼している学生が87.5%と3大学内で最も高かったように、この結果はランキングの信憑性の向上につながったと考えられるだろう。



16. 香港大学の世界大学ランキングに対する積極さについて

学生の視点から考慮すると、香港大学は世界大学ランキングの順位向上に大いに積極的であるとみられているようだ。なぜなら、学生全体の87.03%の学生が「大いにそう思う」または「そう思う」を選択したからである。留学生と地元生を比較してみると、留学生全体の91.17%、地元生の85.40%が、大学のランキング向上における取組を肯定的に捉えている。若干ではあるが、留学生のほうが大学に対して高い評価をしていることがわかる。また、学部生と院生を比較してみると、学部生全体の84.24%、院生全体の91.66%が肯

定的に捉えていることがわかった。留学生は出身大学と香港大学との比較が可能であり、また院生は学部生であったときの大学との比較が可能であるので、両者は相対的に経験が豊富であるといえる。よって、香港大学は両者からの評価が高いため、学生の立場からはかなり高評価であるとうかがえる。実際に、院生の留学生に焦点を当てると、アンケートに回答した学生の内、50%が「大いにそう思う」を選択しており、また「そう思う」には46.43%が回答している結果となり、非常に大学に対して肯定的に捉えていることがわかる。



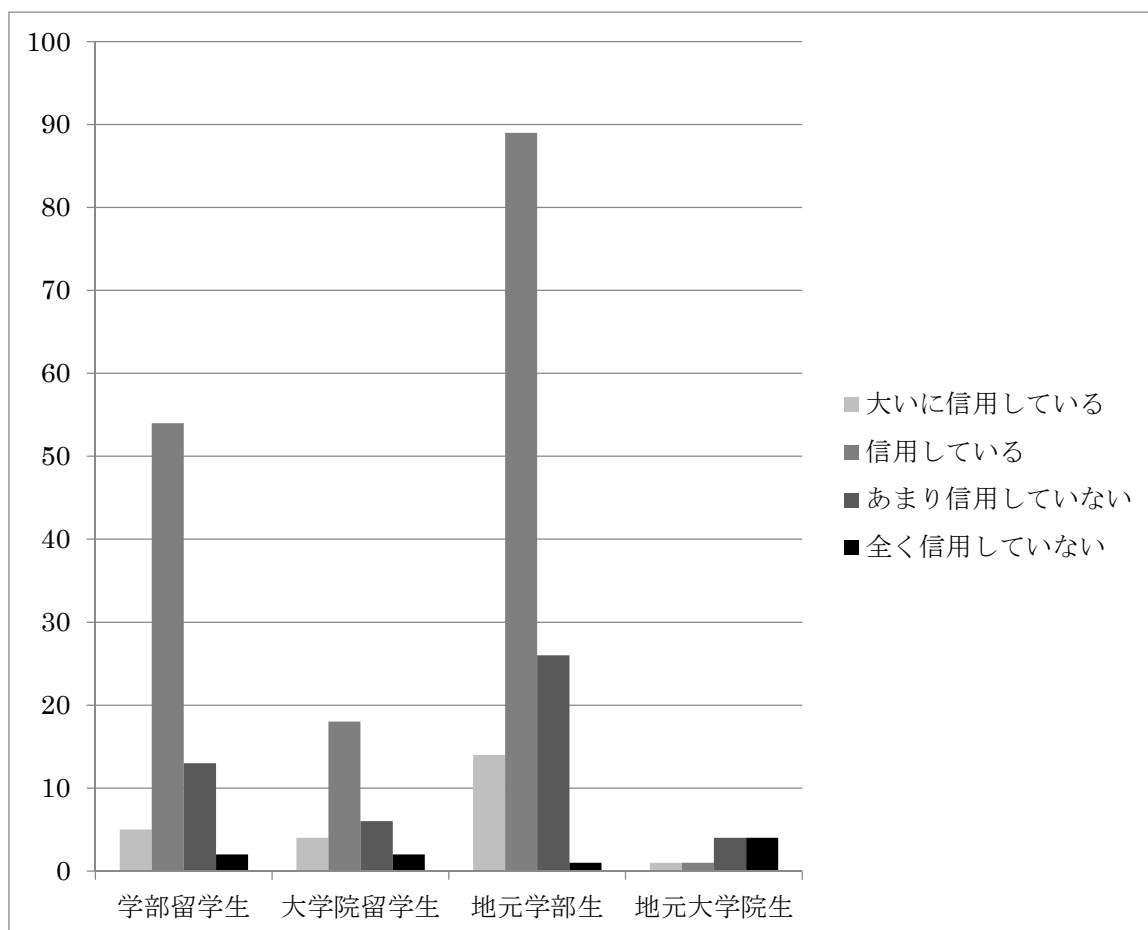
17. 世界大学ランキングの信憑性について

全体的に見れば、香港大学の学生は世界大学ランキングについて信頼しているとい

える。なぜなら、10.71%の学生が「大いに信用している」、72.32%の学生が「信用している」を選択し、両者を合わせた83.03%の学生が世界大学ランキングについて信憑性があると判断したからであ

る。具体的に世界大学ランキングについて留学生の学部生の79.73%、留学生の院生の73.33%、地元の学部生の79.23%が信頼していると回答したが、地元の院生においては20%と、相対的にかなり低い結果となったことは注目すべき点である。詳細には、アンケートに回答した地元の院生の10%が「大いに信用している」、10%が「信用している」、40%が「あまり信用していない」そして残りの40%が「まったく信用していない」と回答していた。80%もの学生が世界大学ランキングを否定的に捉えている。故に、香港大学の地元院生

に関しては、世界大学ランキングの信憑性について、疑っている学生が少なくない。この結果から、香港大学の地元院生は世界大学ランキングを信用している学生が比較的少数なので、進学の際にそれを重要視する学生は必然的に少ないと考えられ、17の間のアンケート結果の要因の一つになったと思われる。よって、香港大学全体では、世界大学ランキングを信用している学生は多数いるが、地元の院生に関しては疑っている学生も多いと結論づけることができる。



②香港科技大学

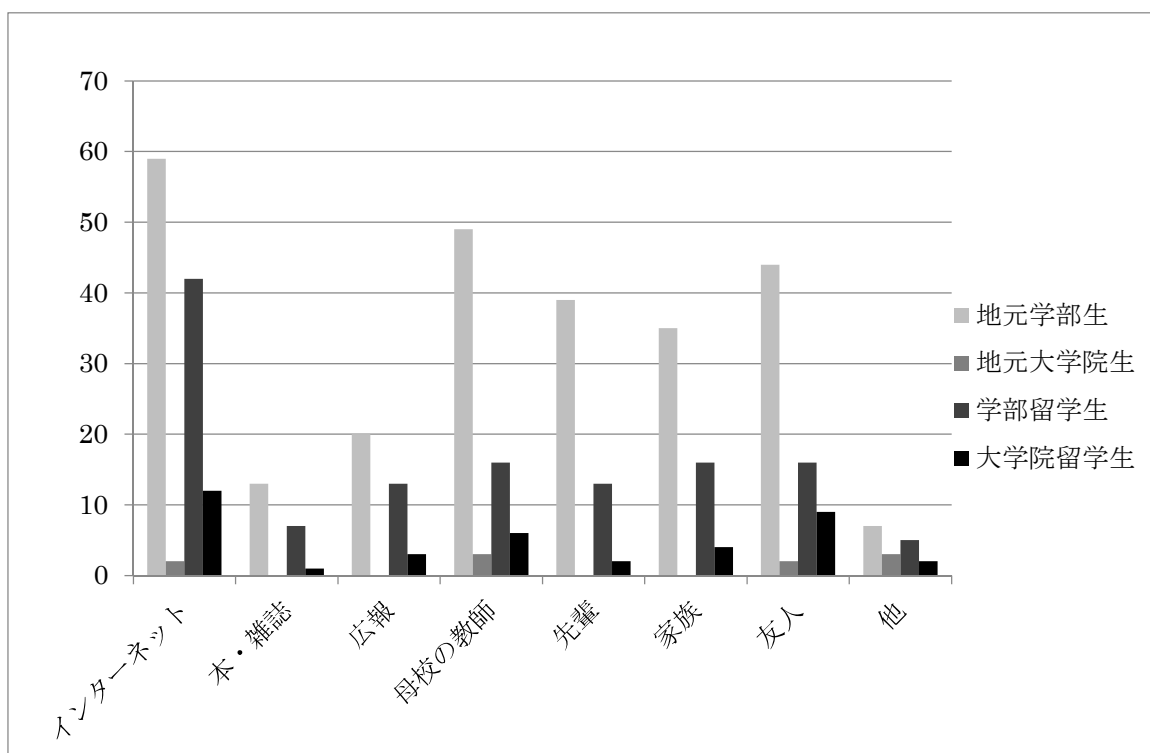
アンケート調査結果

我々は、2013年9月中旬、下旬に香港科技大学に赴きアンケート調査を実施した。総計で203枚の有効回答数を得た。2012年12月31日時点の統計によると総学生数は12584人となっており、全学生における1.61%を占めていることになる。総学生数の内訳としては、学部生8640人、院生3944人(2012年12月31日時点)となっている。学部生は、172枚の有効回答を得て1.99%、院生は30枚の有効回答を得て0.76%を占めていることになる。不明回答1枚あり。

1. 香港科技大学を知ったメディアについて

ここでは、香港科技大学を知った媒体について掘り下げることにする。なお、この質問については複数選択可とした。留学学部生71人にアンケートを実施したところ、42人(59.15%)が「インターネット」と答え、次いで16人(22.54%)が「母校の先生」、「家族」、「友人」を選択した。一方で、「本・雑誌」と答えた学生数はわずか7人(9.86%)であった。この傾向は、香港中文大学、香港大学でも見られ、総じて香港の大学を「本・雑誌」で知ることには少ないと見受けられる。留学院生23人に同様の

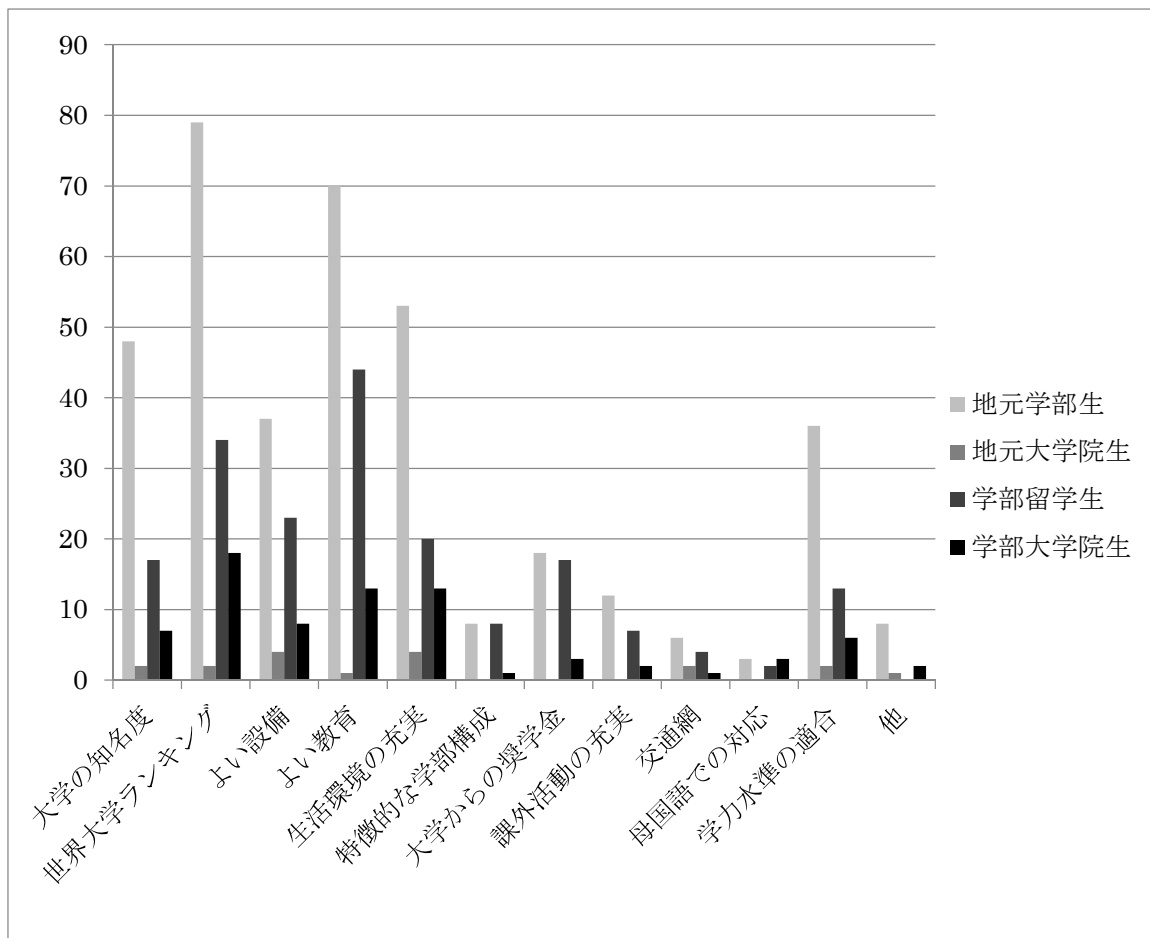
質問をしてみると12人(52.17%)が「インターネット」、9人(42.86%)が「友人」と回答した。6人(26.09%)が「母校の先生」と回答した。留学学部生と比較してみると、類似した傾向の結果がみられる。次に地元学部生に焦点を当てよう。地元学部生101人にアンケート実施したところ59人(58.42%)が「インターネット」を、49人(48.51%)が「母校の先生」を、44人(43.56%)が「友人」を選択していた。他2大学と比較して、地元生にもかかわらず「インターネット」を選んだ割合が高かった。このことから、周囲の取り巻く人々からの情報が比較的乏しいと見受けられ、設立してからわずか22年と新興大学であるので、香港の人々からのレピュテーションが他2大学と比べ低いのではないかと推定される。これは、3大学の中でも、香港科技大学ならではの問題である。香港科技大学は、実際にホームページに力を入れ、特に留学に関する情報については、QSによる順位付けを参考に他大学との相違点を明確にするなど豊富な量を誇っていた。最後に地元院生に関して。地元院生には7人にアンケートを実施した。そのうち3人(42.86%)が「母校の先生」「友人」を2人(28.57%)がそれぞれ「インターネット」、「友人」を選択しており、結果から単一的な媒体によって香港科技大学を知ったという傾向が強いようである。



2. 香港科技大学を進学先に決定した理由について

続いて、実際に進学に際し、決定する要因になったことを掘り下げる。なおこの質問も複数回答可とした。まず、留学学部生に関しては44人(61.97%)が「よい教育」を、続いて34人(47.89%)が「世界大学ランキング」を挙げた。このことから、他2大学と同様に、海外にも香港科技大学の良質な教育が知れ渡っていることがうかがえるだろう。留学院生に関しては、18人(78.26%)が「世界大学ランキング」を、続いて13人(56.52%)が「よい教育」「生活環境の充実さ」を挙げている。留学院生は、「世界大学ランキング」に重きを置いて留学先の決定を下している割合が高いことを示す結果になるだろう。地元学

生に関しては79人(78.22%)が「世界大学ランキング」を、続いて70人(69.31%)が「生活環境の充実さ」を選択した。地元学部生では、香港科技大学、香港大学の学生が「世界大学ランキング」を一番多く選択していた。これは、QSやTHEにおいて香港中文大学と比較して高い順位が出ていることによるものだといえる。地元院生に関しても、4人(57.14%)が「よい設備」「生活環境の充実」を選択していた。香港科技大学は、香港中心部から比較的離れた、南シナ海に臨む風光明媚な海岸沿いに位置しており、静寂な環境で学べる環境が地元生に人気を呈しているのかもしれない。

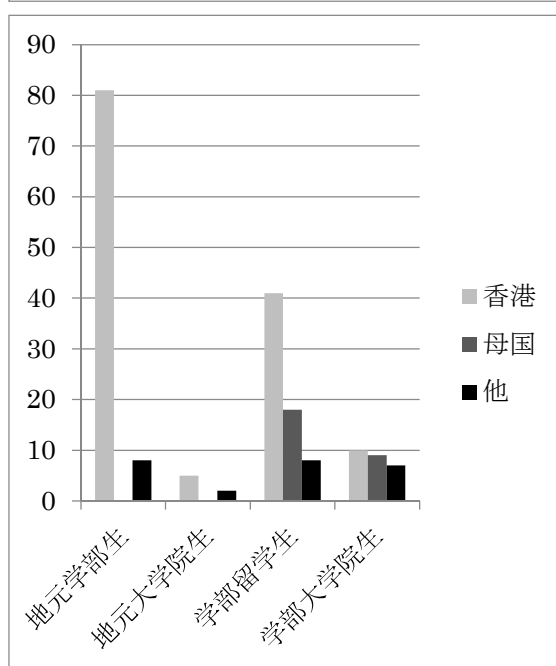
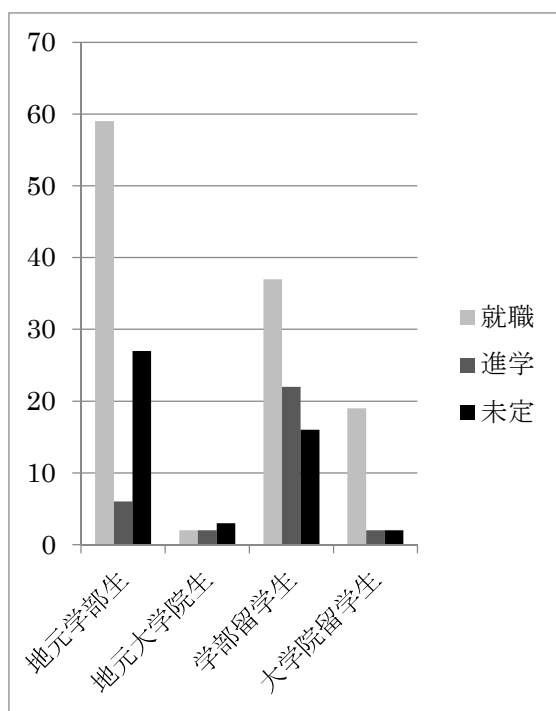


3. 香港科技大学に在学する学生の今後の進路、進路先について

留学学部生は37人(52.11%)が「就職」を、22人(30.99%)が「進学」を、16人(22.54%)が「未定」と答えた。また進路先としては「香港」が最も多く、ついで「母国」、「その他」と続いた。また「アメリカ」や「日本」という声も聞かれた。「香港」が最も多かったことから、卒業後そのまま「香港」に滞在し続ける割合が高いと見受けられる。中国人留学生に的を絞ると、「香港」よりも「母国」と回答した学生が最も多く、今後経済発展が期待される母国中国で就職する割合が高いとの結果が出た。留学院生に関しては、19人(82.

61%)が「就職」を、2人(8.70%)が「就職」、「未定」と回答した。就職先としては香港、「母国」、「日本」、「アメリカ」が見受けられた。地元学生に関しては59人(58.42%)が「就職」を、27人(26.73%)が「未定」、6人(5.94%)が「進学」と答えた。進路先としては回答数のうち9割もの大多数が「香港」を選択したが、一部では「日本」、「アメリカ」、「カナダ」、「台湾」などの声も聞かれた。しかしながら、地元学部生の積極的な海外への「就職」、「進学」は見られない結果となった。地元院生に関しては、3人(42.86%)が「未定」を、2人(28.57%)が「進学」、「未定」と選択した。進路先としては、5人(71.42%)が「香港」と答えた。地元生は、学部

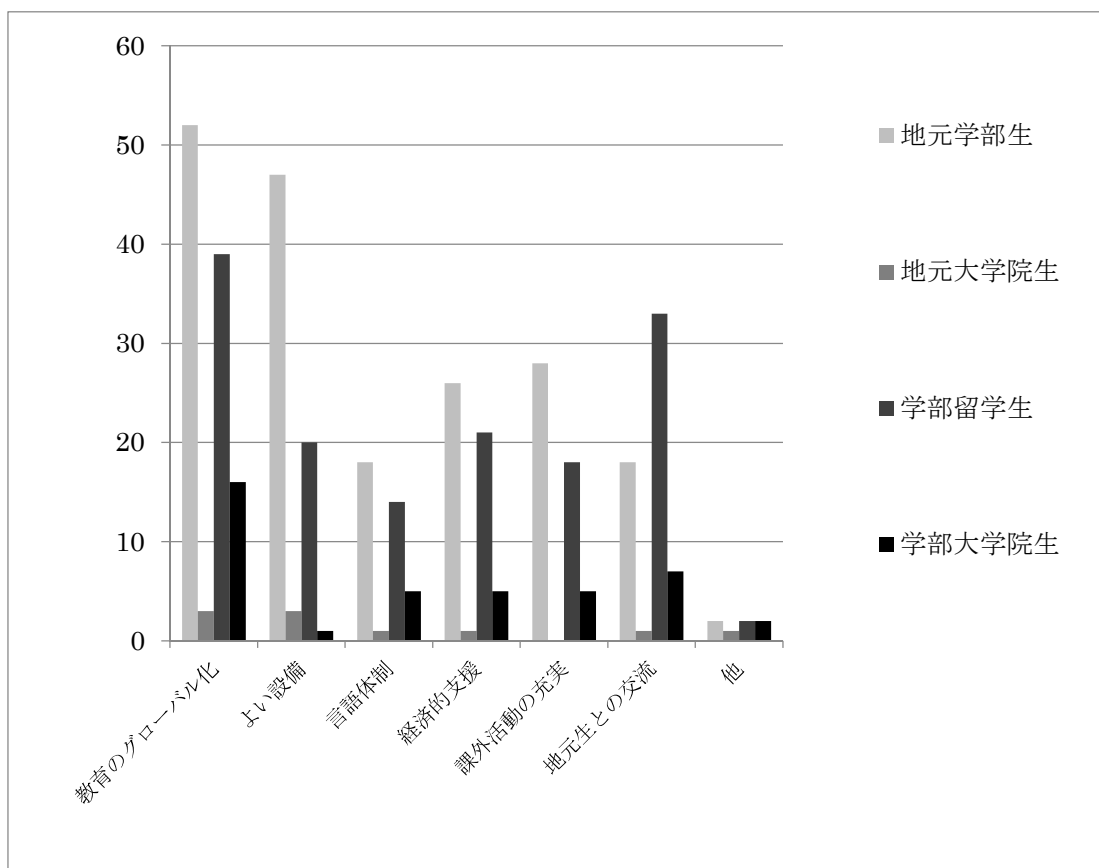
生を中心に比較的地元志向が強い結果となっている。



4. 香港科技大学に求める要素について

ここでは、香港科技大学に求める要素、つまり香港科技大学に在学する学生の不満を掘り下げていく。ここでの質問も複数回答

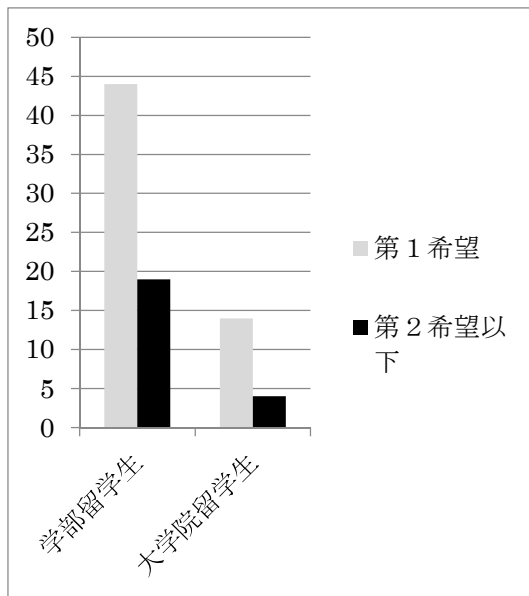
可とした。留学生、地元生ともに「教育のグローバル化」を求める声が多かった。これは、他2大学でも見られる現象であった。ここで、詳細に分析すると、留学学部生は、39人(54.93%)が「教育のグローバル化」を選択し、割合的に最も高く、次に高かったのは33人(46.48%)が回答した「地元学生・住民との交流」であった。他2大学と比較してもこの割合が高かったため、留学生と地元生、ひいては地元住民とのつながりが比較的稀薄であるといえるだろう。留学院生に関しては、16人(69.57%)が「教育のグローバル化」を、7人(30.43%)が「地元学生・住民との交流」を選択した。このことから、上記のことが言えるだろう。次に、地元学部生に関しては、52人(51.49%)が「教育のグローバル化」を、47人(46.53%)が「よい設備」を選択した。香港中心部や最も近い地下鉄の駅である、MTR「坑口駅」までのバスを拡充してほしいとの声が聞こえた。また、香港中文大学の最寄り駅として、MTR「大學駅」が存在しており、香港大学の最寄り駅として2014年にMTR「香港大學駅」が誕生する予定であり、他2大学と比べて交通の便利さという点で劣らないようにしてほしいとの声も多数聞かれた。また地元院生に関しては、3人(42.86%)が「教育のグローバル化」、「よい設備」を回答しており、引き続き上記の面が求められている。ここから香港科技大学全体としては「教育のグローバル化」を求める学生が多数いるということが判明した。次に求めるものとしては、留学生、地元生で二分する結果となった。



5. 香港科技大学の希望順位について

留学生のみを対象にアンケートを実施した。留学学部生に関しては、44人(61.97%)が第一希望を香港科技大学にしており、19人(26.76%)が他大学を希望していた。それらの第1希望としては、具体的な大学名としてケンブリッジ大学、シンガポール国立大学、香港大学、北京大学、コーネル大学などが挙げられた。第一希望を断念した理由には、学力水準を踏まえてや、香港科技大学で満額の奨学金をもらえたからという理由が見受けられた。留学院生に関しては、14人(60.87%)が第一希望を香港科技大学にしており、4人(17.39%)が他大学を希望していた。それらの第一希望先としては、具体的な大学名として、チューリヒ工科大学、シンガポール

国立大学、香港中文大学、ミシガン大学などを、教育の質がさらによい、世界大学ランキングがより高いという理由で志望していたようである。断念した理由は、希望した大学の奨学金を満足な額で支給されないからなどであった。なお、おおよそ半数程度の学生が無回答であった。

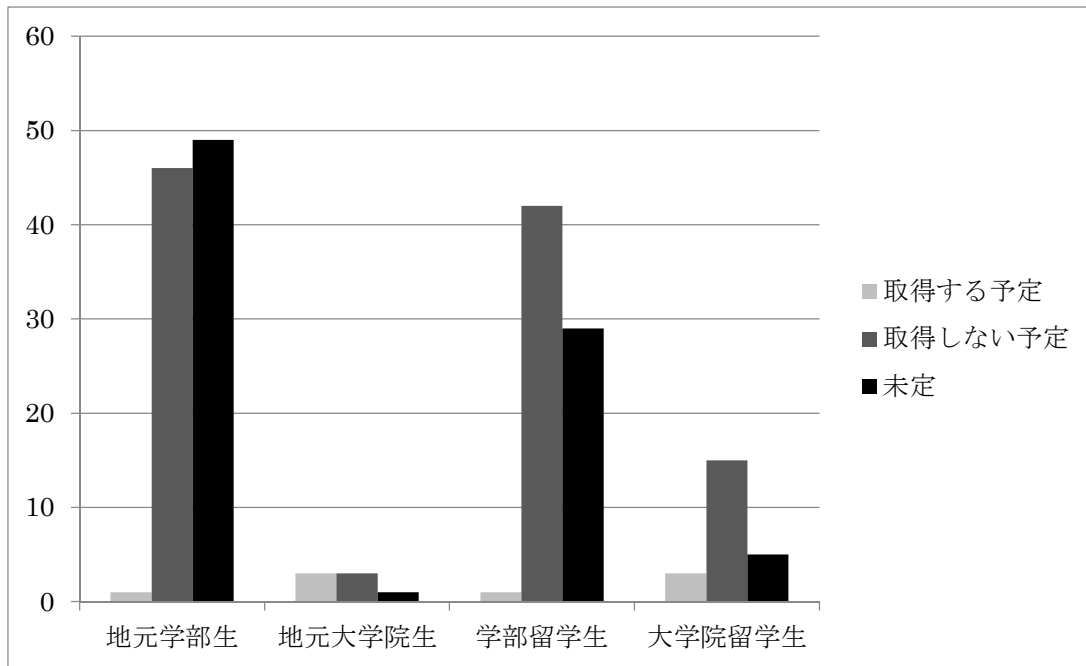


6. 香港科技大学での博士号取得の是非について

世界大学ランキングの順位づけに考慮される博士号の取得について、アンケート調査を実施した。留学学部生に関しては、42人（59.15%）が「取得しない予定」、29人（40.85%）が「未定」としており、1人（1.41%）が「取得する予定」と回答した。大学院に進み博士号を取るケースは他2大学と同様に少ないと考えられ

る。留学院生に関しては、15人（65.22%）が「取得しない予定」と回答し、5人（21.74%）が「未定」と、3人（13.04%）が「取得する予定」と回答した。他2大学と同様に、学部生よりは現実感を持って博士号の取得を検討していることが見受けられる。

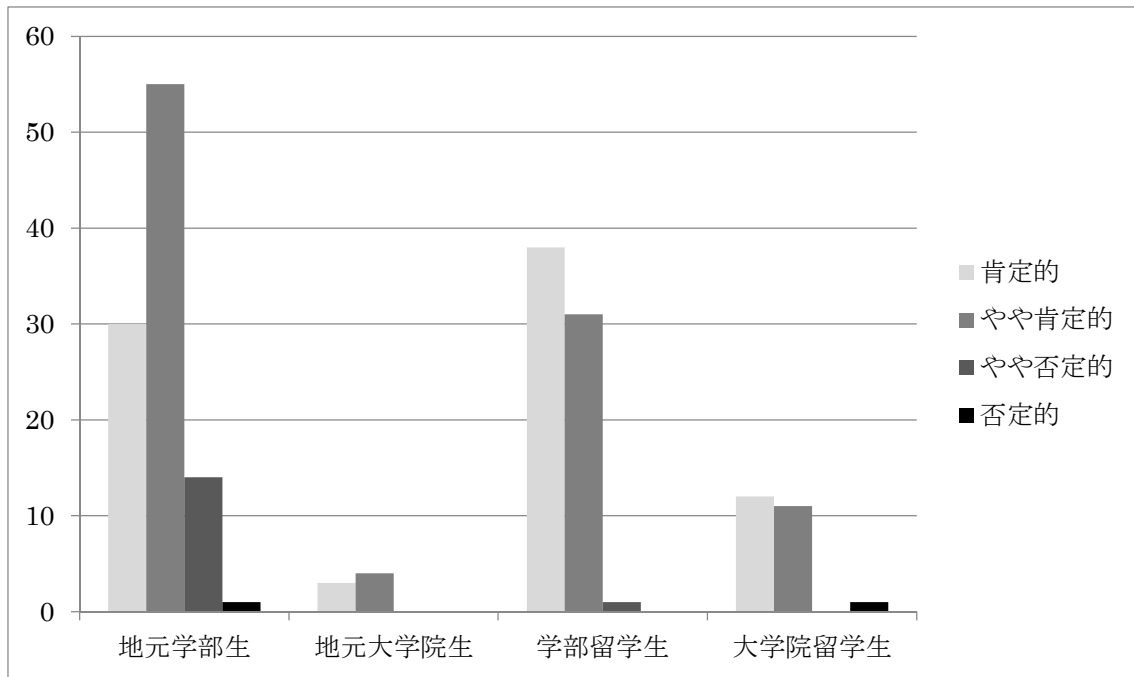
地元学部生に関しては、49人（48.51%）が「未定」を、46人（45.54%）が「取得しない予定」を、1人（0.99%）が「取得する予定」と選択しており、博士号取得には否定的であった。しかしながら、地元院生に関しては、それぞれ、3人（42.86%）が「取得する予定」「取得せず」を、1人（14.29%）が「未定」を回答しており、「取得する予定」の率が高かった。実際、香港中文大学に比べて、全体に占める院生の割合が高い。このことから、全体における博士号取得の率も高いことが見受けられる。ビジネススクールとして、アジアトップレベルに躍り出たこともうなずけるであろう。



7. 香港科技大学に持つイメージについて

留学学部生に関しては、38人(53.52%)が「肯定的」、31人(43.66%)が「やや肯定的」、1人(1.41%)が「やや否定的」ととらえおり、留学院生に関しても、12人(52.17%)が「肯定的」、11人(47.83%)が「やや肯定的」ととらえるなど留学生は香港科技大学に対してポジティブなイメージを持っていることがわかる。地元学部生に関しては、30人(29.70%)が「肯定的」、55人(54.46%)が「やや肯定的」、14人(1

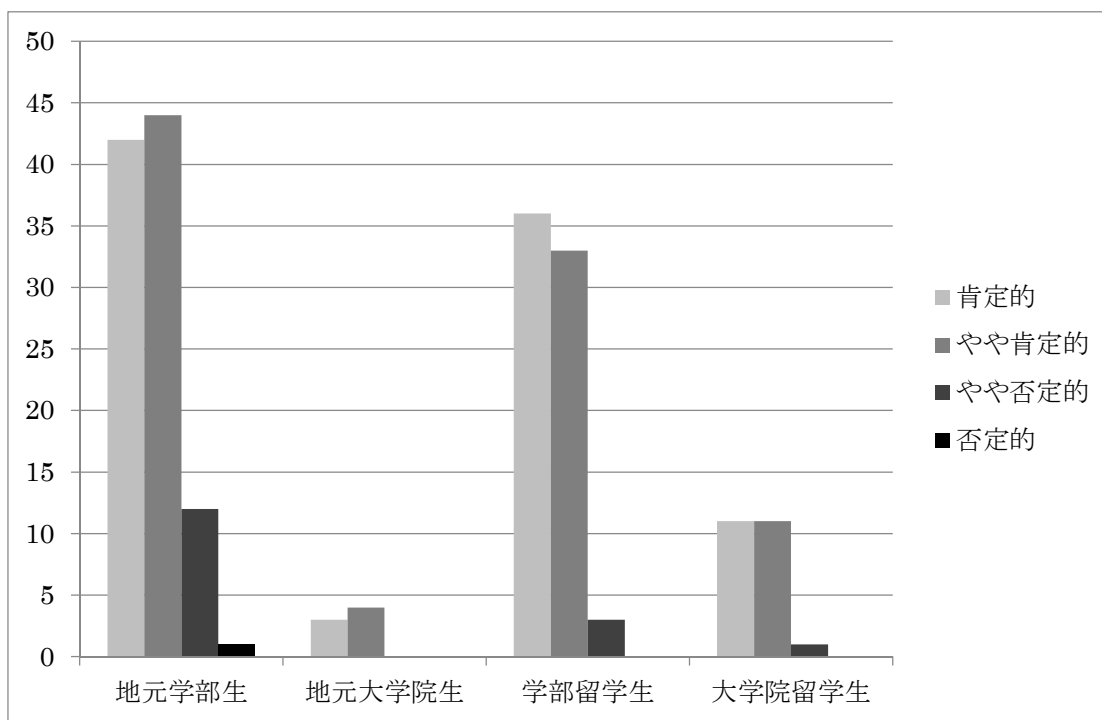
3.86%)が「やや否定的」、1人(0.99%)が「否定的」と回答するなど、留学生と比べて否定的な面も見られ、それほど積極的に香港科技大を「肯定的」にはとらえていないようである。他2大学と比べると、「肯定的」と回答した割合よりも「やや肯定的」と回答した割合が高かった。このことから、上記のことを言えるだろう。地元院生に関しては、3人(42.86%)が「肯定的」、4人(57.14%)が「やや肯定的」と答えるなど、アンケート調査を行った地元院生7人に関してはネガティブなイメージはなかった。



8. 香港という都市について

留学先決定の一助となる都市についてのイメージを分析していく。まず留学学部生に関しては、36人(50.70%)が「肯定的」を、33人(46.48%)が「やや肯定的」を、3人(4.23%)が「やや否定的」を選択するなど香港科技大学のイメージと同様にポジティブなイメージの割合が高い結果となった。留学院生に関しては、11人(47.83%)がそれぞれ「肯定的」、「やや肯定的」を、1人(4.35%)が「やや否定的」を選択した。留学地元生と同様にポジティブなイメージ結果が出ている。44人(43.56%)が「やや肯定的」、42人(41.58%)が「肯定的」、12人

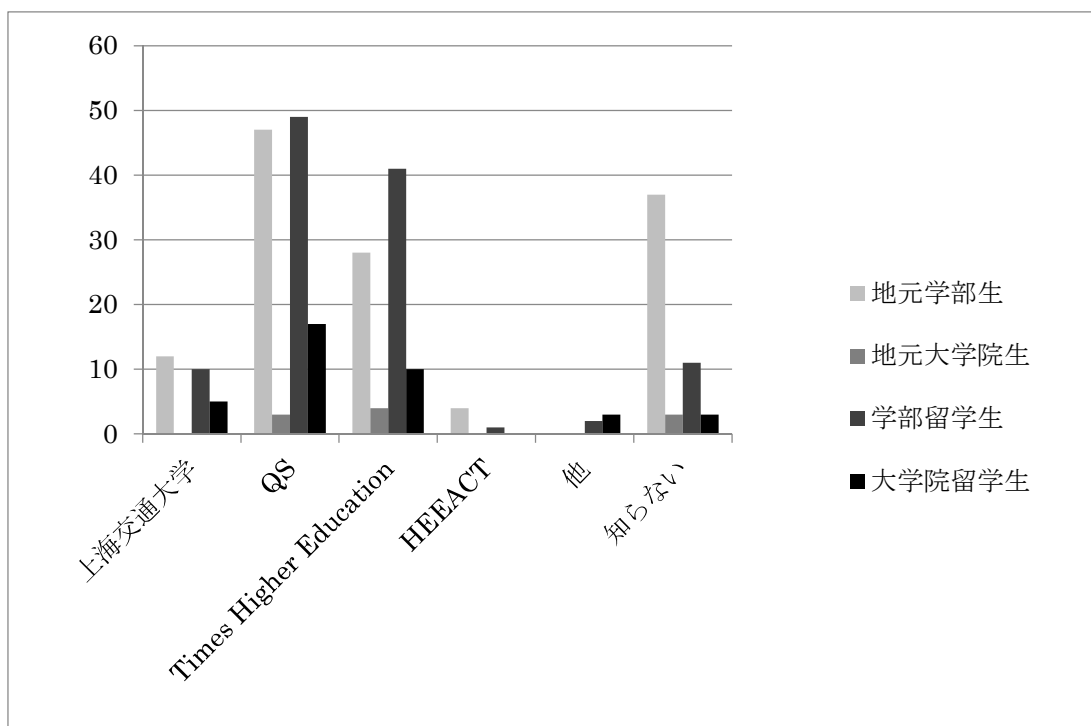
(11.88%)が「やや否定的」、1人(0.99%)が「否定的」と回答している。前問の問いとほぼ同様の結果が出た。地元学部生の一部には、「やや否定的」と回答する割合が他(留学生・地元院生)と比べ高いことが特徴的である。数人にインタビューを実施すると、学習環境や居住環境に対して若干の不満を持っているようである。地元院生に関しては、4人(57.14%)が「やや肯定的」、3人(42.86%)が「肯定的」ととらえている。結果として、多くの学生が香港に愛着を持っていることが見て取れる、しかし、地元学部生に関しては、一部「やや否定的」と回答した学生も見られた。



9. 認知している世界大学ランキングについて

香港科技大学では全体の81.38%が世界大学ランキングについて認知しているという結果となった。これは、3大学の中で最も高い数値である。一概に、香港3大学全体として世界大学ランキングを認知している学生は割合的に高いが、その中でも香港科技大学はその傾向が強いといえる。そのなかでも香港科技大学生の間に最も浸透していたのはQSであり、全体の36.55%を占めていた。QSの次には全体の28.62%を占めているTHEが続いている。留学生において学部生の回答数のうち9.65%、院生の回答数のうち7.89%がランキングについて「知らない」と回答しており、留学生全体では9.21%であった。こ

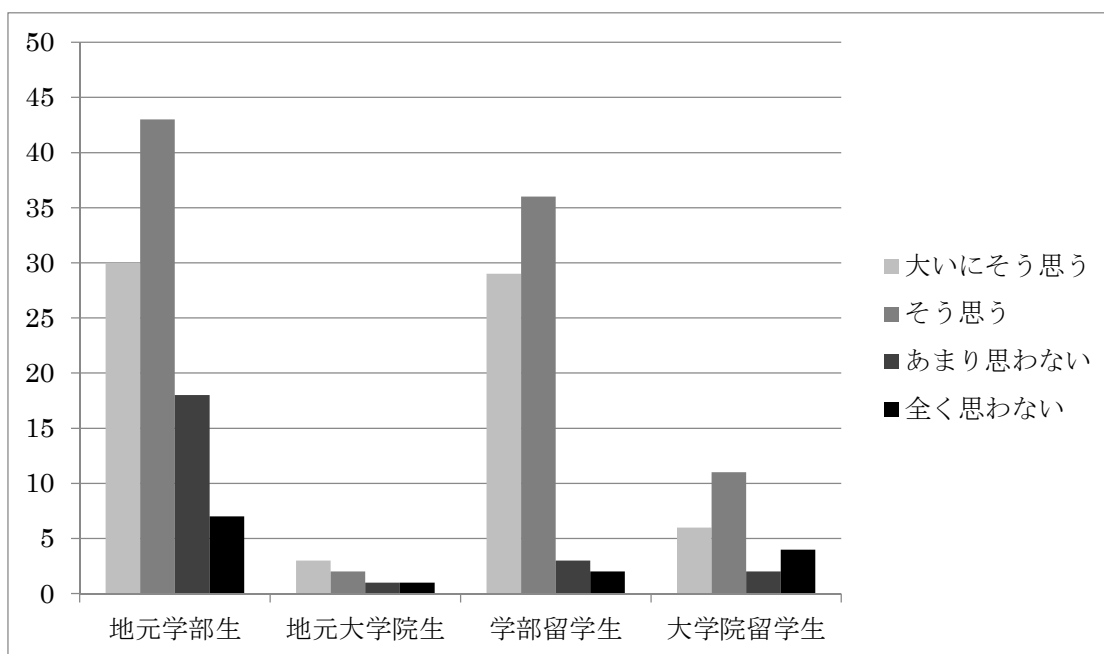
の数値は、1割を切っており、低い数値であると考えられる。それに対し、地元生においては、学部生の回答数のうち28.9%、院生の回答数のうち30%が「知らない」と回答しており、地元生全体では28.99%であった。約3割の地元学生が世界大学ランキングについて認知していないことが明らかになった。やはり留学生においては、海外から進学する際に、世界大学ランキングを考慮する学生が大多数であることが伺える。しかし、地元学生においては、世界大学ランキングを進学するにおいて参考にする学生は多いものの、それよりは大学の知名度を考慮する比重が強い傾向にあることがアンケートの結果からいえる。よって、世界大学ランキングの認識においても、それらの要因が顕わになったと考えられる。



10. 進学に際し世界大学ランキングが考慮される比重について

進学先として世界大学ランキングを重要視する度合いについて、「大いにそう思う」が34.34%、「そう思う」46.46%を占め、両者を足した80.8%の学生が進学の際に、世界大学ランキングを重要と考えることがわかった。この結果から、全体的に香港科技大学の学生は進学先を思案する際に、指標の一つとして考えている傾向にある。留学生全体においては89.13%の学生がランキングを重要視しているが、一方、地元生においては74.24%の学生が世界大学ランキングを考慮している。このことから、地元学生よりも留学生の方がより世界大学ランキングを主要と考えることがわかる。また、学部生全体として、82.14%、院生全体として73.33%

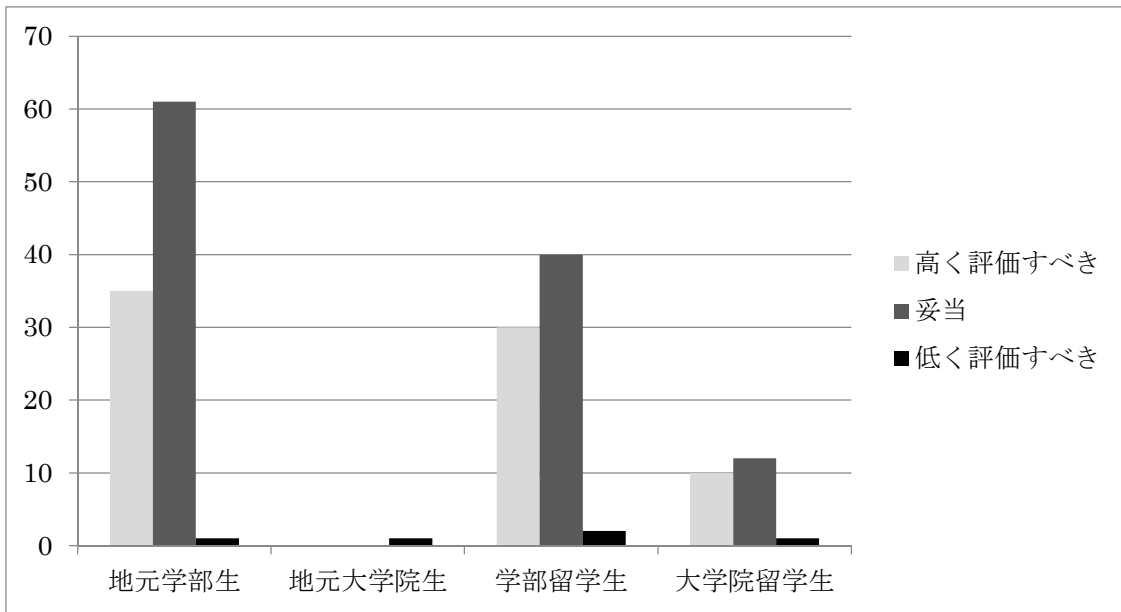
が「大いにそう思う」または「そう思う」のいずれかに回答している。このことから、香港科技大学においては、院生よりも、学部生の方が主要としている。特に、留学生の学部生においてはその傾向が強く、92.86%もの学生が重要視している結果が出ている。さらに、「あまり思わない」、「まったく思わない」を選択した学生において、留学生の院生が26.09%、地元生の学部生が25.51%、地元生の院生が28.57%を占めていたのに対し、留学生の学部生においては7.14%であった。これは、他の学生の3割近くが世界大学ランキングを進学先の決め手として考慮していないのに対し、留学生の学部生に関しては1割を切っており、相対的に低い数値となっている。このことから香港科技大学においては、留学生の学部生が世界大学ランキングを重要と考える傾向が強い。



1 1. 香港科技大学の世界大学ランキングの順位について

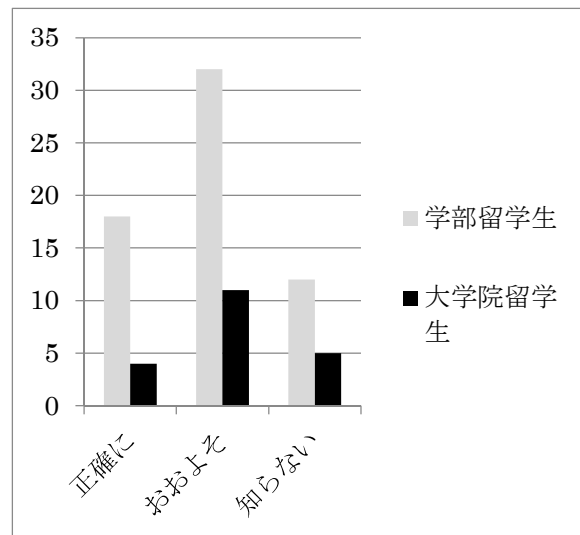
全体的に香港科技大学の学生の58.79%がランキングの順位を「妥当である」と考えており、割合的に最も高かった。このことから学生の過半数以上は大学の世界大学ランキングの順位に充足感を得ていると考えられる。しかし、「もっと高く評価されるべきだ」を選択した学生も少なくはなく、全体では38.69%を満たしていた。これは、特に留学生の院生に顕著であり、留学生院生全体の43.48%を占めている。このことから、進学に際し世界大学ランキングを考慮するか否かにおいて、院生の留学生の73.91%がランキングを重要視する

と回答しており、多数の学生が香港科技大学に留学する以前に科技大学のランキングについて一考している。その結果、香港科技大学のランキングの順位についてより高評価を得るべきと考えている学生が少なくないことから、科技大学の教育水準や環境等について、学生は満足していると考えられる。そして、全体的に言えることとして香港科技大学の場合、「もっと低く評価されるべきだ」を選択した学生が全体の2.51%を占めており、非常に少数であると考えられ、留意しておかなければならない。なぜならこの数値は3大学のなかでも最も低い結果であるからである。この結果からも、香港科技大学学生が自身の大学について高い評価をしていることが伺える。



12. 出身大学のランキング把握について
アンケートに回答した学部の留学生においては、自身の出身校の順位について29.03%が「正確に把握している」、51.61%が「おおよそ把握している」、19.35%が「把握していない」と回答した。また、院生の留学生においては、20%が「正確に把握している」、55%が「おおよそ把握している」、25%が「把握していない」と回答した。留学生全体として91.46%の学生が“把握している”と回答しており、留学生が進学に際し、世界大学ランキングを決めるの一つにしている学生が多数であることを考慮すると圧倒的多数の学生が自身の出身大学と香港科技大学の順位を比較してから留学していることがわかる。しかし、その中でも自身の出身大学の順位について「把握していない」と回答している学生も見受けられ、具体的に学部の留学生では、19.35%、院生の留学生に関しては25%が回答しており、留学生全体では20.73%の学生が「把握していない」と回答し

た。この数値は一見高くないように思われるが、3大学の中で最も高く、相対的に香港科技大学の留学生の中には、自身の出身大学の順位について認知しておらず、出身校と香港科技大学とを比較する際に世界大学ランキングをあまり考慮していない学生もいるということがいえるだろう。

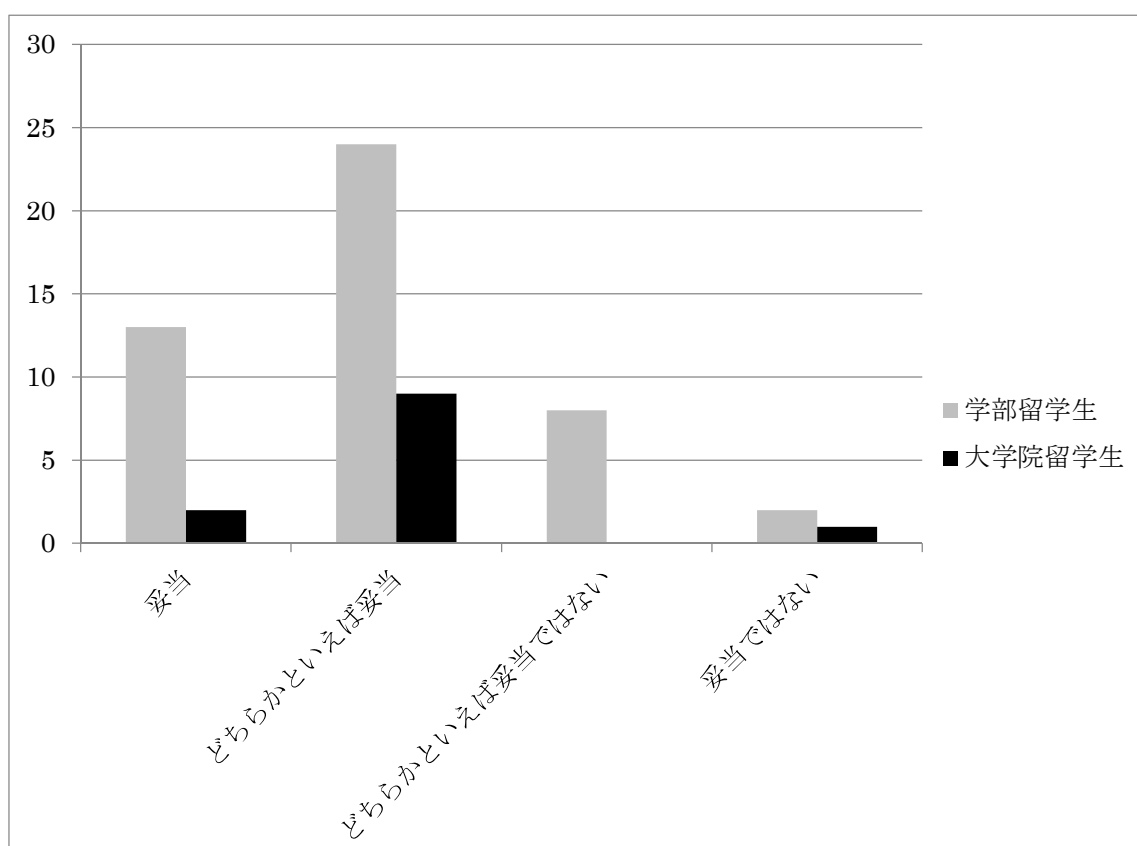


13. 出身大学と香港科技大学とのランキング順位比較における妥当性

香港科技大学に留学した学生は、各々の出身校と科技大学の順位の妥当性について

留学生全体では81.36%の学生が「妥当である」または、「どちらかといえば妥当である」に回答している結果となり、全体的に多数の学生が出身大学と香港科技大学の順位について偏頗でないと感じていると考えられる。しかし、具体的に「妥当である」と回答したのは学部生においては27.66%、院生においては16.66%であり、割合的には高くない。このことから学部生、院生ともに出身大学と香港科技大学の順位

について妥当であると明確に回答した学生は比較的少数であるといえる。また、学部生においては「どちらかといえば妥当ではない」または「妥当ではない」と回答した学生が学部生全体の21.27%を占めており、出身大学と香港科技大学の順位を比較するにあたって、少数ではあるが順位の妥当性について不公平と感じている学生もいることが明らかになった。



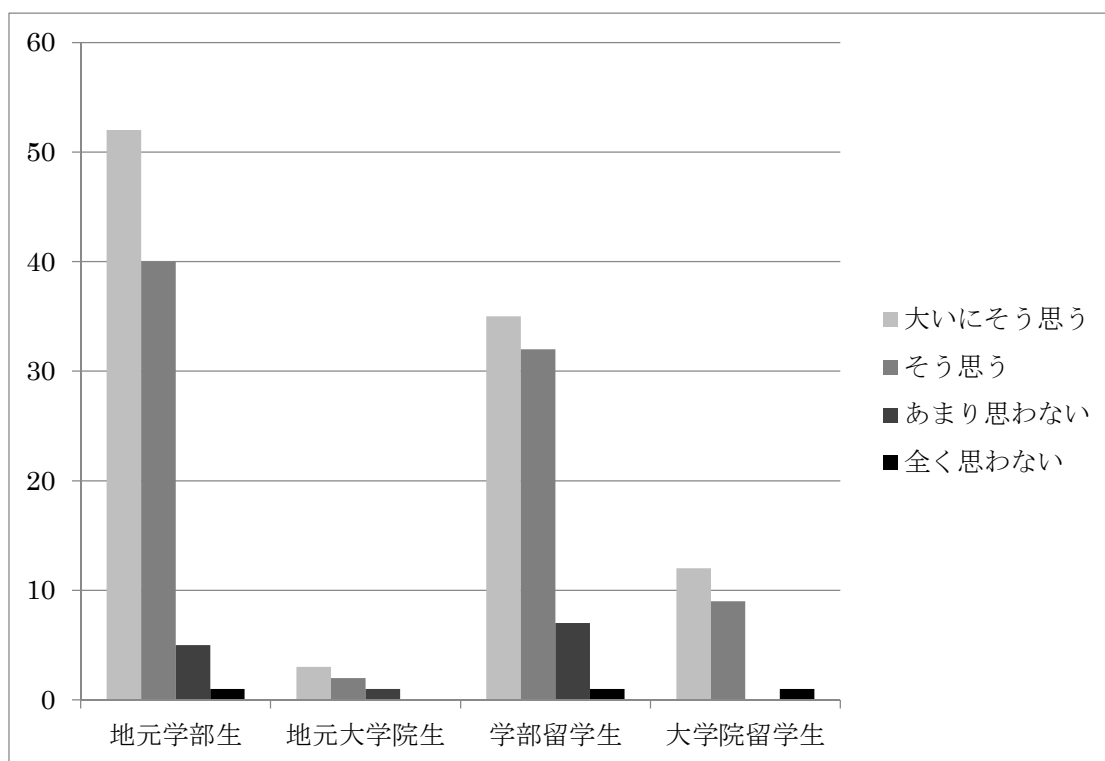
14. 香港科技大学の世界大学ランキングに対する積極さについて

学生の観点で考えてみると、香港科技大学は世界大学ランキング向上に大いに積極的であると考えられる。なぜなら、全体の92.04%の学生が「大いにそう思う」または「そう思う」を選択していたからである。これは3大学のなかでも最も高い数値であ

る。また、科技大学において、「大いにそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「思わない」の4つの項目のなかで留学生、地元学生または学部生、院生の違いに関係なく「大いにそう思う」を回答した割合が最も高かったのは注目すべき点である。なぜなら、香港3大学において一概に世界大学ランキング向上において積極的であると判断した学

生は多数であるといえるが、このような結果は香港科技大学でしか現れなかったからである。具体的には、「大いにそう思う」を選択したのは学部の留学生において46.66%、院生の留学生においては54.55%、学部の地元生においては53.06%、そして院生の地元生においては50%であった。約過半数もの学生が「大いにそう思う」と明確に回答したことは、実際に香港科

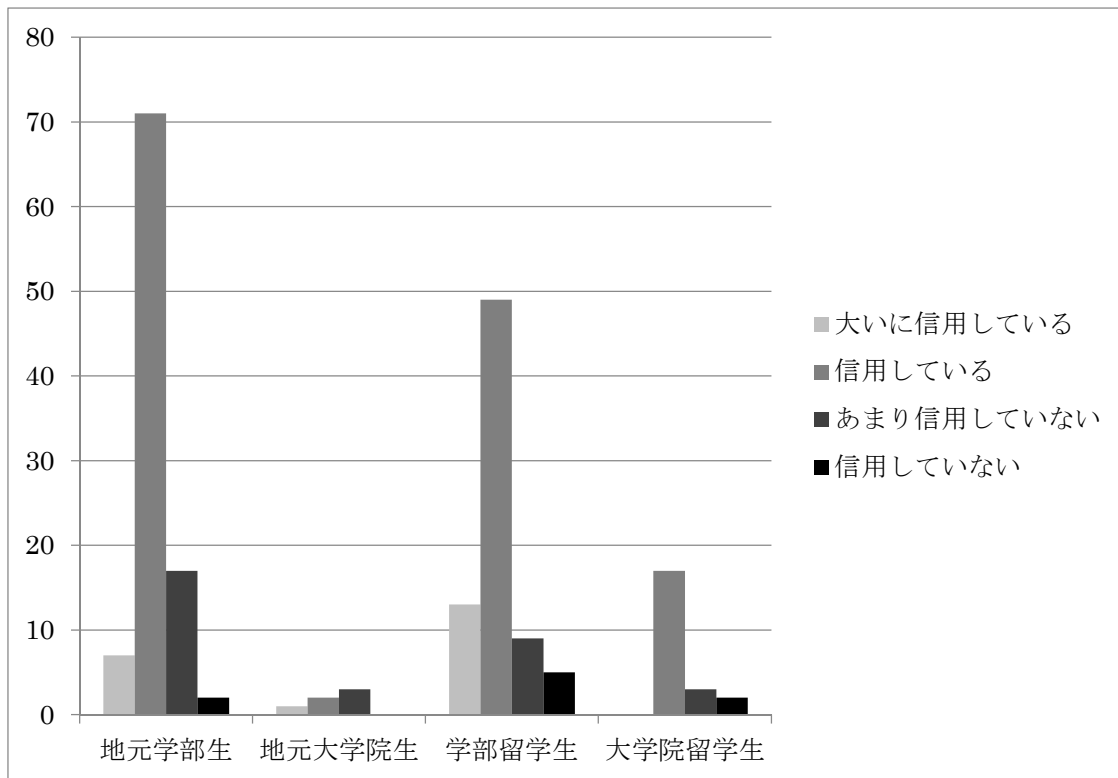
技大学は創立22年と、新しい大学でありながら、QSにおけるアジアの大学ランキングにおいて2011、2012年と2年連続でNo.1になっており、国際的に認められているという現実が反映された結果であると考えられる。これらから、香港科技大学の世界大学ランキング向上における積極性について学生の目にはかなり肯定的に映っていると思われる。



15. 世界大学ランキングの信憑性について

全体的に見れば、世界大学ランキングを「信用している」を選択した学生が最も多く、全体の69.15%を占めていた。さらに「大いに信用している」を選択した10.45%を含めると、79.6%もの学生が世界大学ランキングを信頼していることになり、3大学の中でも比較的高い割合であるといえる。具体的に見ると学部生全体では、

「大いに信用している」または「信用している」のいずれかを選択し、ランキングを信頼していると考えた学生は80.92%という結果となった。一方、院生全体では71.43%が信頼しているという結果が出たので、比較的、学部生の方が信頼している傾向にあると考えられる。また、留学生全体では80.61%、地元生全体では78.64%がランキングに対して、信憑性があると評価したので、両者の差は非常に小さく、あまり違いは無いと考えられる。



③香港中文大学アンケート調査結果

我々は、2013年9月中旬に香港中文大学に赴きアンケート調査を実施した。総計で152枚の有効回答数を得た。2013年度統計によると総学生数は14315人となっており、全学生における1.06%を占めていることになる。総学生数の内訳としては、学部生11255人、院生3060人（2013年度）となっている。学部生は、128枚の有効回答を得て1.14%、院生は24枚の有効回答を得て0.78%を占めていることになる。

1. 香港中文大学に在籍する交換留学生の出身国・地域について

現在、香港中文大学には全体で1450人の交換留学生が在学しており、アメリカからの交換留学生が410人で28.28%を占めて1番多く、次いでシンガポールが211人で14.55%を、日本が125人で8.62%を、そして中国本土は116人で8%を占める結果が表れている。

http://www.iso.cuhk.edu.hk/ebook/index.html#lang=zhtw&page=20&issue_id=1305&ui=zh-tw

（出典：香港中文大学公式ホームページ）
シンガポールや日本などの近隣アジア諸国だけでなく、アメリカやカナダなどの欧米諸国からの留学も目立っている。

2. 香港中文大学から交換留学した学生の渡航国・地域について

次に、香港中文大学の学生が留学先として選択している国々や地域について検証す

る。全体で1323人が留学しており、アメリカが386人で29.18%を、次いで中国が152人で11.49%、オーストラリアが106人で8.01%を占める結果となっている。

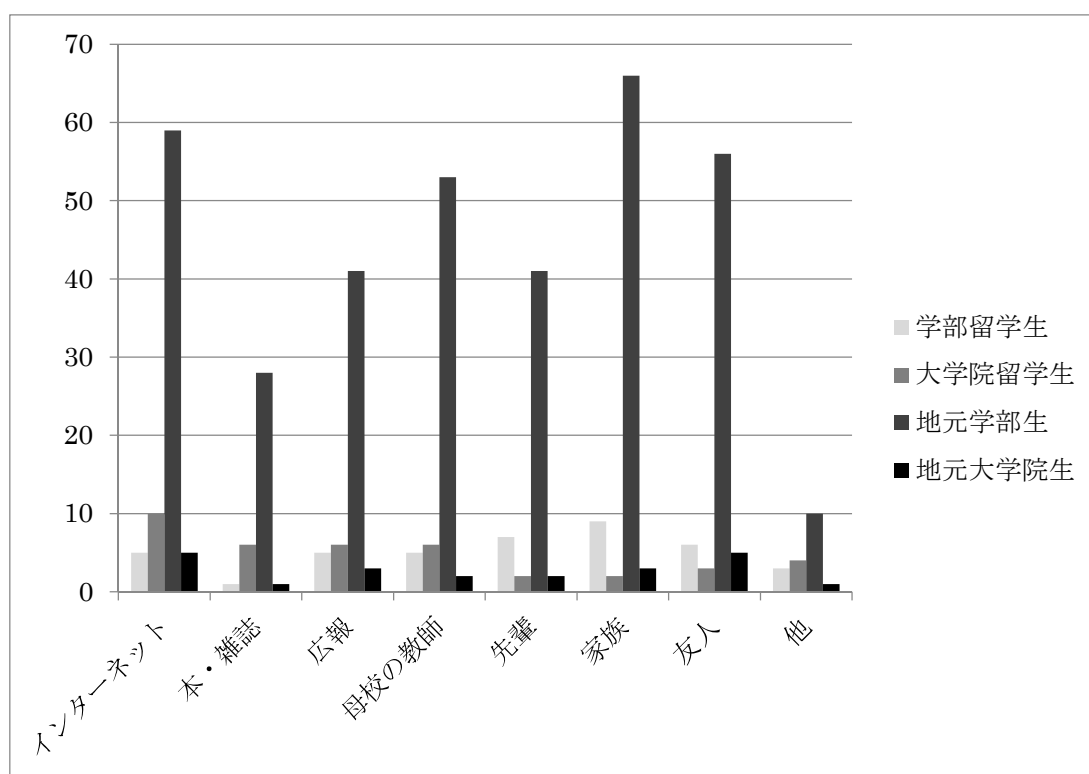
http://www.iso.cuhk.edu.hk/ebook/index.html#ui=zhtw&lang=zhtw&page=18&issue_id=1305

(出典：香港中文大学公式ホームページ)
資料を読み解くと留学先として英語圏、中国語圏が人気を呈していることが判明した。中国が留学先として上位にランクインした背景には大学レベルの向上と経済規模の拡大によるものであろう。オーストラリアが上位にランクインした背景は、アメリカやイギリスと比較した場合には留学費用が安いことが大きな理由として挙げられるだろう。

3. 香港中文大学を知ったツールについて

ここでは、香港中文大学を知った媒体について掘り下げることにする。なお、この質問については複数選択可とした。留学学部生20人にアンケートを実施したところ、9人(45%)が「家族」と答え、次いで7人(35%)が「先輩」、6人(30%)が「友人」と続いた。一方で、「本・雑誌」と答えた学生数はわずか1人(5%)であり、このことから海外の大学を留学雑誌で調べるよりは、周囲の人々からの声によって香港

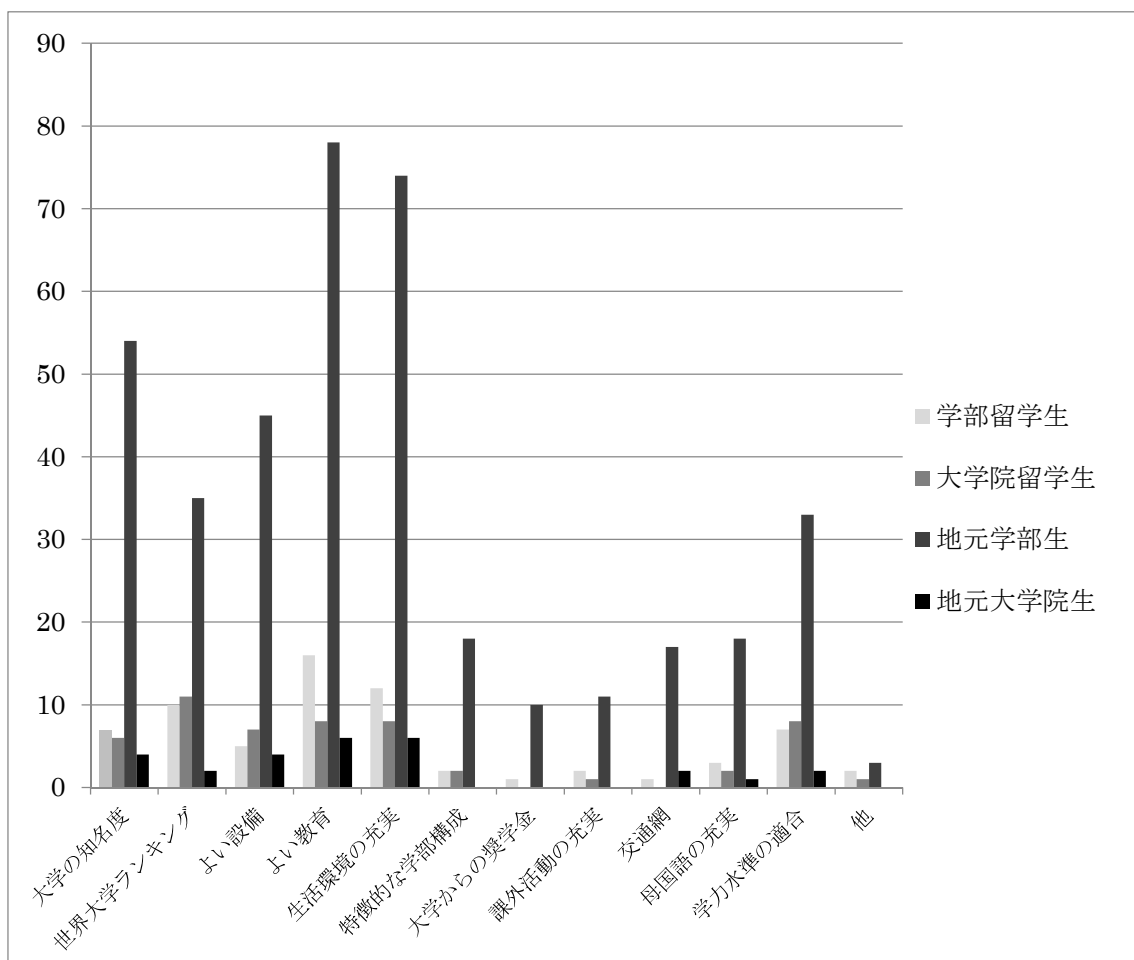
中文大学を知るケースが多いことが判明した。留学院生16人に同様の質問をしてみると10人(62.5%)が「インターネット」、6人(37.5%)でそれぞれ「本・雑誌」「広報・ポスター」「出身校の先生」が続いた。留学学部生と比較してみると自発的に留学先を知ろうという姿勢がみられる。次に地元学部生に焦点を当てよう。地元学部生108人にアンケート実施したところ66人(61.11%)が「家族」と回答しており、留学生学部生の割合以上に大きな割合を占めている。また、59人(54.63%)が「インターネット」を、56人(51.85%)が「友人」を選択するなど、ここまで過半数を超えたことから鑑みると、比較的多様なツールを通して香港中文大学を知ったと考えられる。最後に地元院生に関して。地元院生には8人にアンケートを実施した。そのうち5人(62.5%)が「インターネット」「友人」を選択した。一方で「本・雑誌」はやはり1人(12.5%)しか選択せず低迷している。他2大学(香港大学・香港科技大学)の地元院生と比較してみても「インターネット」の割合が高かった。ホームページなどが、中国語を母国語としていない外国人や、中文大学についてあまり知らない人々にとって、大学の情報を得るのに便利なツールであることがわかり、充実していることがうかがえる。



4. 香港中文大学を進学先に決定した理由について

続いて、実際に進学に際し、決定する要因になったことを掘り下げる。なおこの質問も複数回答可とした。まず、留学学部生に関しては16人(80%)が「よい教育」を、続いて12人(60%)が「生活環境の充実」を挙げた。このことから、海外にも香港中文大学の良質な教育が知れ渡っていることがうかがえる。また、他二大学の留学学部生と比較して「生活環境の充実」が高い割合を示している。香港中文大学は香港の中でも最大のキャンパス面積を所有し、都市の喧騒から離れた緑豊かな地にある。キャンパス内にはスーパーマーケットや本屋、銀行等

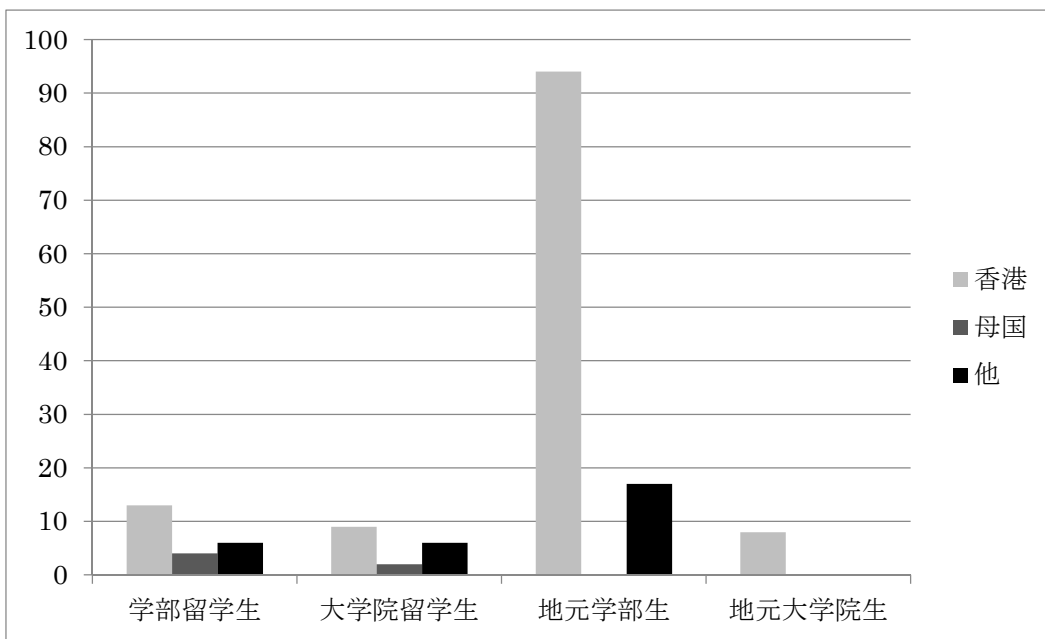
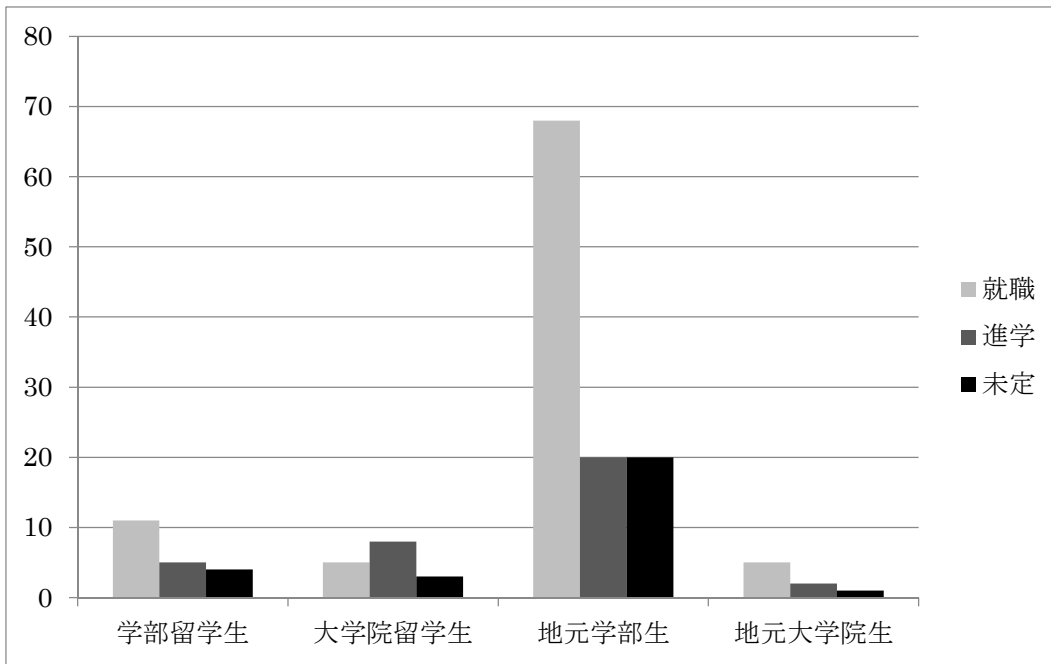
があり生活に不自由することはない。留学院生に関しては、11人(68.75%)が「世界大学ランキング」を、続いて8人(50%)が「よい教育」「生活環境の充実」を挙げている。留学院生は、「世界大学ランキング」に重きを置いて留学先の決定を下している割合が高いことを示す結果になるだろう。地元学生に関しては78人(72.22%)が「よい教育」を、続いて74人(68.52%)が「よい環境」を選択した。この結果から香港内でも、香港中文大学の良質な教育が広く知れ渡っていることが見受けられる。地元院生に関しても、6人(75%)が「よい教育」「生活環境の充実」を選択したことから上記のことが言えるだろう。



5. 香港中文大学に在学する学生の今後の進路、進路先について

留学学部生は11人(55%)が「就職」を、5人(25%)が「進学」を、4人(20%)が「未定」と答えた。また進路先としては「香港」が最も多く、ついで「母国」と続いた。また「アメリカ」や「韓国」という声も聞かれた。「香港」が最も多かったことから、卒業後そのまま「香港」に滞在し続ける割合が高いと見受けられる。留学院生に関しては、8人(50%)が「進学」を、5人(31.25%)が「就職」を、3人(18.75%)が「未定」と回答した。就職先としては香港、「母国」、「アメリカ」、「イギリス」が見受けられた。進学先としては「アメリカ」

が多くを占めた。留学院生が「アメリカ」を中心とする海外に更に進学するという結果が表れていた。香港を踏み台として、アメリカに博士号を取得しに行く学生が多いことは特異的な点である。地元学生に関しては68人(62.96%)が「就職」を、20人(18.52%)がそれぞれ「進学」「未定」と答えた。進路先としては大多数が「香港」を選択したが、一部では「イギリス」、「日本」、「アメリカ」、「カナダ」、「オーストラリア」などの声も聞かれた。地元院生に関しては、5人(62.5%)が「就職」を、2人(25%)が「進学」を、1人(12.5%)が「未定」と選択した。進路先としては、全員が「香港」と答えた。地元院生は、比較的地元志向が強い結果となった。



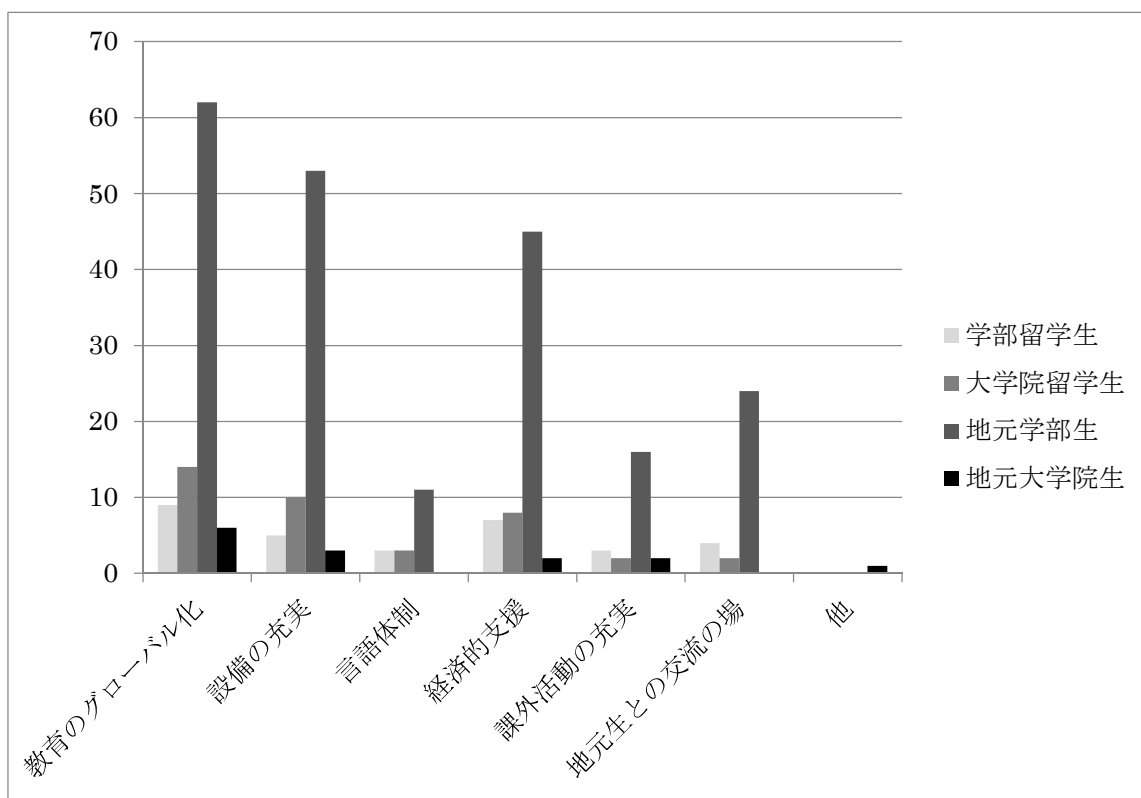
6. 香港中文大学に求める要素について

香港中文大学に求める要素、つまり香港中文大学に在学する学生の不満を掘り下げていく。ここでの質問も複数回答可とした。留学生、地元生ともに「教育のグローバル化」を求める声が多かった。これは、ほか2大学でも見られる現象であった。世界的な

流れに沿って教育に関する改革が求められているようである。ここで、詳細に分析すると、留学学部生は、9人(45%)が「教育のグローバル化」を選択し、割合的に最も高く、次に高かったのは7人(35%)が回答した「経済的支援」であった。留学院生に関しては、14人(87.5%)が「教育のグローバル化」を、10人(62.5%)が「設

備の充実」を選択した。数人にインタビューをしたところ、食堂、校内バスや研究設備の拡充を求める声があった。また、「経済的支援」を、8人（50%）が回答している。これは比較的高い数値であり、ここから留学生全体として経済的支援、奨学金制度を求める声大きいことがうかがえるが、特に院生の留学生においてはその傾向が強いことが明らかになった。地元学部生に関しては、62人（57.41%）が「教育のグローバル化」を、53人（49.07%）が「設備の充実」を選択した。同じく上記の面が求められていることがわかる。また地元院生に関しては、6人（75%）が「教育のグローバル化」を、3人（37.5%）が「設備

の充実」を回答しており、引き続き上記の面が求められている。ここから中文大学全体として「教育のグローバル化」、「設備の充実」を求める学生が多数いるということが判明した。また、「言語体制」に不満を持っている学生が少なかった。実際に、学内掲示板、マップ、講義やホームページなど他2大学と比較しても、多言語での対策を施している結果が表れている。また、中文大学では大学に付属している「新雅中国語文研究所」で、中国語標準語コースと広東語コースの留学生を迎えているため、英語はもとより、言語教育において充実していることが3大学のなかでも際立っていることがうかがえる。

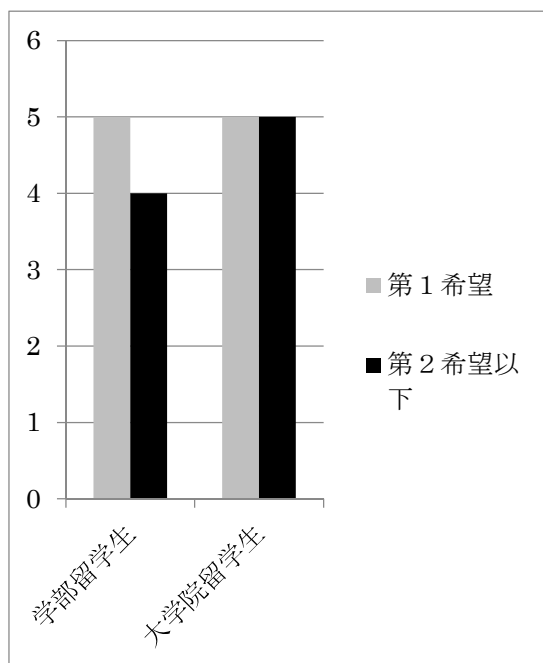


7. 香港中文大学の希望順位について

留学生のみを対象にアンケートを実施した。留医学部生に関しては、5人（25%）

が第一希望を香港中文大学にしており、4人（20%）が他大学を希望していた。それらの第1希望としては、具体的な大学名として香港大学、オックスフォード大学、大阪

大学などが挙げられた。第一希望を断念した理由には、第一希望大学の奨学金を得ることができなかった、という理由が見受けられた。留学院生に関しては、5人（31.25%）が第一希望を香港中文大学にしており、5人（31.25%）が他大学を希望していた。それらの第一希望先としては、具体的な大学名として、スタンフォード大学や香港科技大学を、教育の質がさらによいという理由で志望していたようである。なお、おおよそ半数の学生が無回答であった。

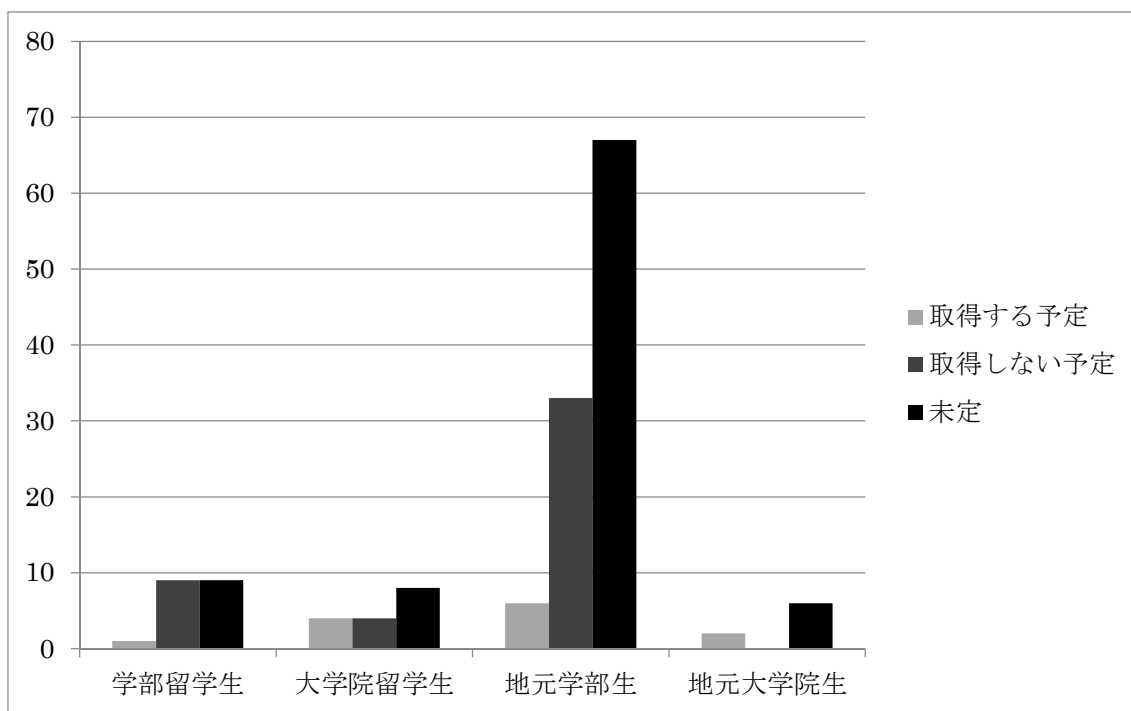


8. 香港中文大学での博士号取得の是非に

ついて

世界大学ランキングの順位づけに考慮される博士号の取得について、アンケート調査を実施した。留文学部生に関しては、9人（45%）が「取得しない予定」、同じく9人（45%）が「未定」としており、1人（5%）が「取得する予定」と回答した。大学院に進み博士号を取るケースは少ないと考えられる。留学院生に関しては、4人（25%）がそれぞれ「取得する予定」「取得しない予定」と回答し、8人（50%）が「未定」と回答しており、学部生よりは現実感を持って博士号の取得を検討していることが見受けられる。

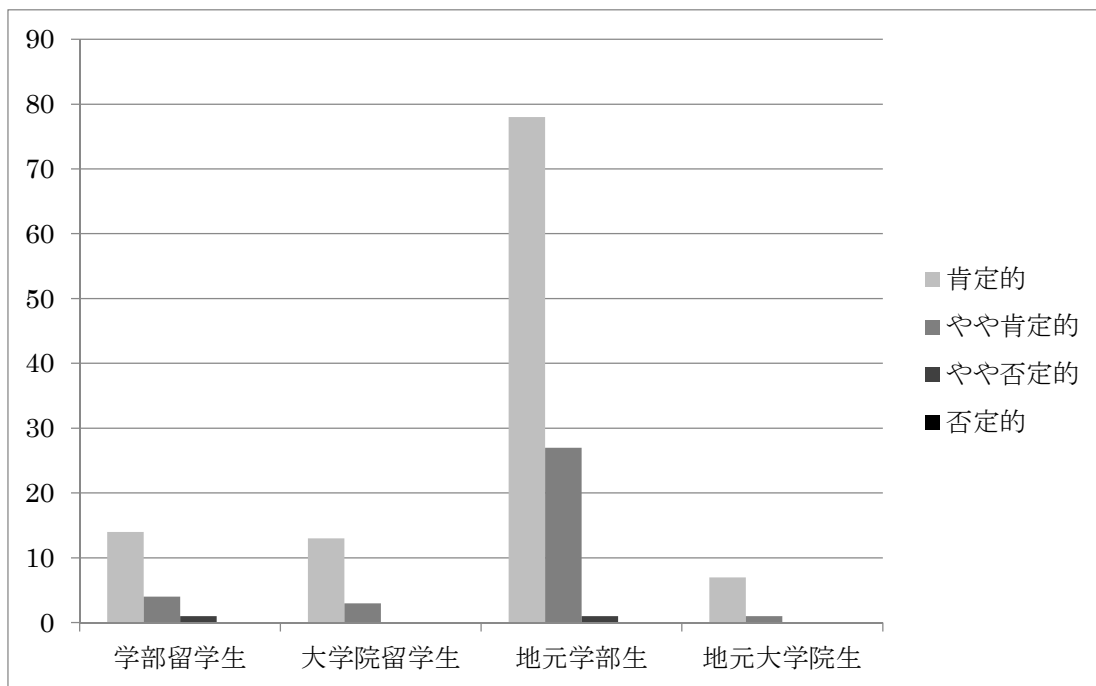
地元学部生に関しては、67人（62.04%）が「未定」を、33人（30.56%）が「取得しない予定」を、6人（5.56%）が「取得する予定」と選択しており、博士号取得には否定的であったが、「未定」が過半数を占めているので、今後人数が伸びる可能性は秘めている。地元院生に関しては、6人（75%）が「未定」を2人（25%）が「取得する予定」を選択しており、大学院に進学しているものの多数が博士号を取るまでに至らないことが判明した。



9. 香港中文大学に持つイメージについて

全体的に他2大学に比べて肯定的にとらえている学生の割合が高いことが判明した。留学学部生に関しては、14人(70%)が「肯定的」、4人(20%)が「やや肯定的」、1人(5%)「やや否定的」ととらえて、大学に対する満足度は高いと見受けられる。留学院生に関しても、13人(81.75%)が「肯定的」、3人(18.75%)が「やや肯定的」ととらえており、学部生以上に香

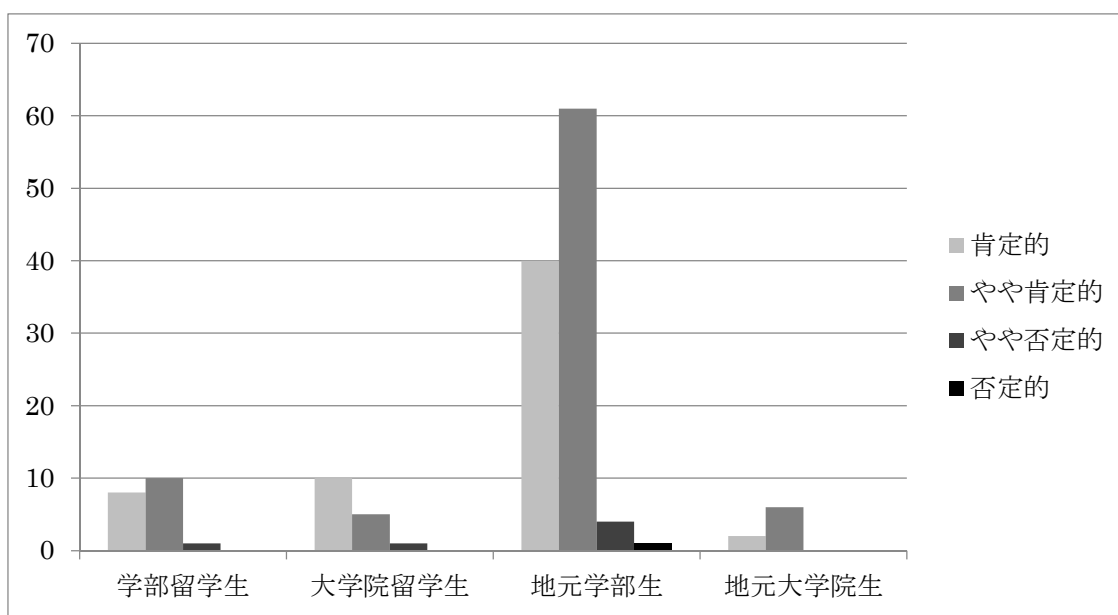
港中文大学に対するポジティブなイメージが目立った。地元学部生に関しては、78人(72.22%)が「肯定的」、27人(25%)が「やや肯定的」、1人(0.93%)が「やや否定的」と答えるなど、上記のイメージがここでもあらわれていることがわかる。地元院生に関しては、7人(87.5%)が「肯定的」を、1人(12.5%)が「やや肯定的」と答えるなど地元院生に関してはネガティブなイメージが皆無であった。



10. 香港という都市について

留学先決定の一助となる都市についてのイメージを分析していく。まず留学学部生に関しては、10人(50%)が「やや肯定的」を、8人(40%)が「肯定的」を、1人(5%)が「やや否定的」を選択するなど香港中文大学のイメージと同様にポジティブなイメージの割合が高い結果となった。留学院生に関しては、10人(62.5%)が「肯定的」を、5人(31.25%)が「やや肯定的」を、1人(6.25%)が「やや否定的」を選択した。院生に関してはより良

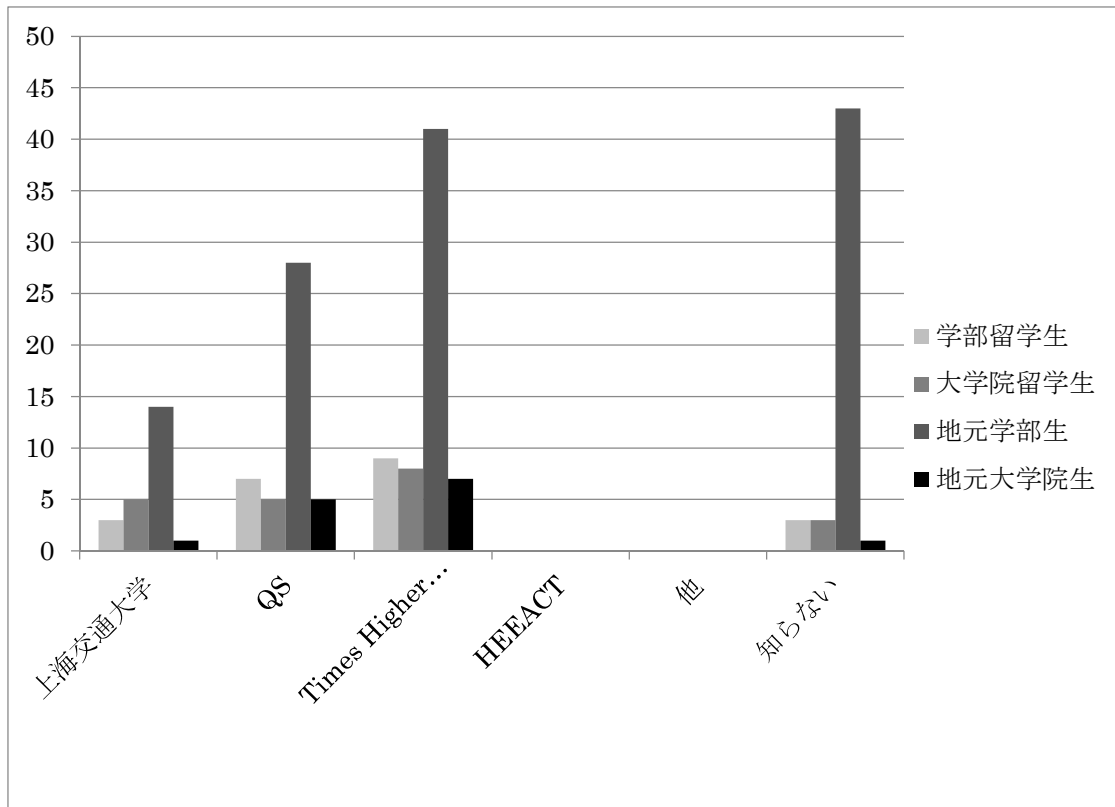
いイメージを持っている割合が高かった。地元学部生に関しては、61人(56.48%)が「やや肯定的」、40人(37.04%)が「肯定的」、4人(7.70%)が「やや否定的」、1人(0.93%)が「否定的」と回答している。9割以上「肯定的」「比較的肯定的」と回答している。地元院生に関しても状況は同様の傾向を示している。6人(75%)が「やや肯定的」を、2人(25%)が「肯定的」ととらえているなど、地元生は香港(地元)に対する強い愛着を持っていることがうかがえる。



1 1. 認知している世界大学ランキングについて

香港中文大学では THE (Times Higher Education) の認知度が全体の 35.71% を占めており最も高かった。香港 3 大学全体では学生の間で QS が最も浸透していたことからこれは、香港中文大学の特徴として注目すべき点である。また、「知らない」と答えた学生が全体の 27.47% を占めておりこれは同項目において香港大学が 19.71%、香港科技大学が 18.62% であることから相対的に高い数値であると考えられる。地元の学部生においては「知らない」と選択した学生が 34.4% であり、こ

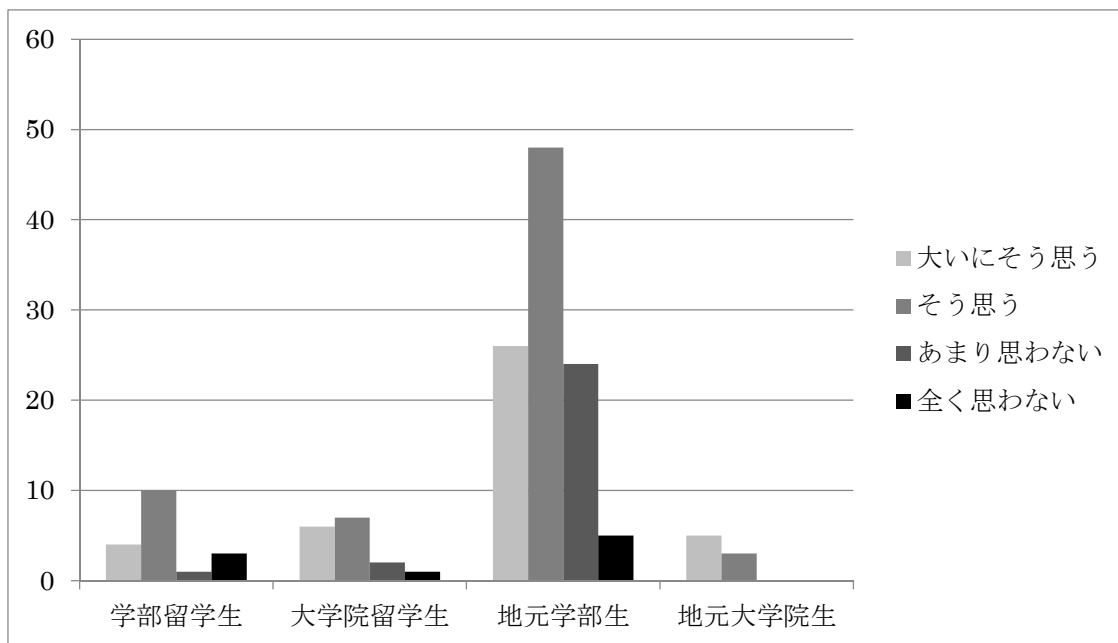
れは THE の 32.8% を超え、地元の学部生の中では最も高い割合となっている。これらのことから、中文大学では、いずれかの世界大学ランキングについて認知している学生が多数いる一方で、ランキングについて全く認知していない学生も少なからずいるということが明らかになった。そしてこれは地元の学部生において顕著である。そもそも友人や家族などの身近な人々の情報を基に“大学の知名度”や“質の良い教育”などを主に考慮して中文大学を進学先として決定したケースが多いと考えられる地元の学部生の場合、世界大学ランキングを知る契機が比較的少なかったと思われる。



12. 進学に際し世界大学ランキングが考慮される比重について

進学先として世界大学ランキングを重要視する度合いについて、「大いにそう思う」が28.27%、「そう思う」が46.90%を占め、両者を足した75.17%の学生が進学に際し世界大学ランキングを重要と考えることが明らかとなった。これより全体的には香港中文大学の学生は世界大学ランキングを重要視する傾向にあるといえる。しかし「大いにそう思う」を選択したのは全体の約30%であり、ここからランキングを相当に重要と考えるのは比較的少数である。留学生全体としては79.41%、地元生全体としては73.87%の学生が進学の際に世界大学ランキングを重要視すると

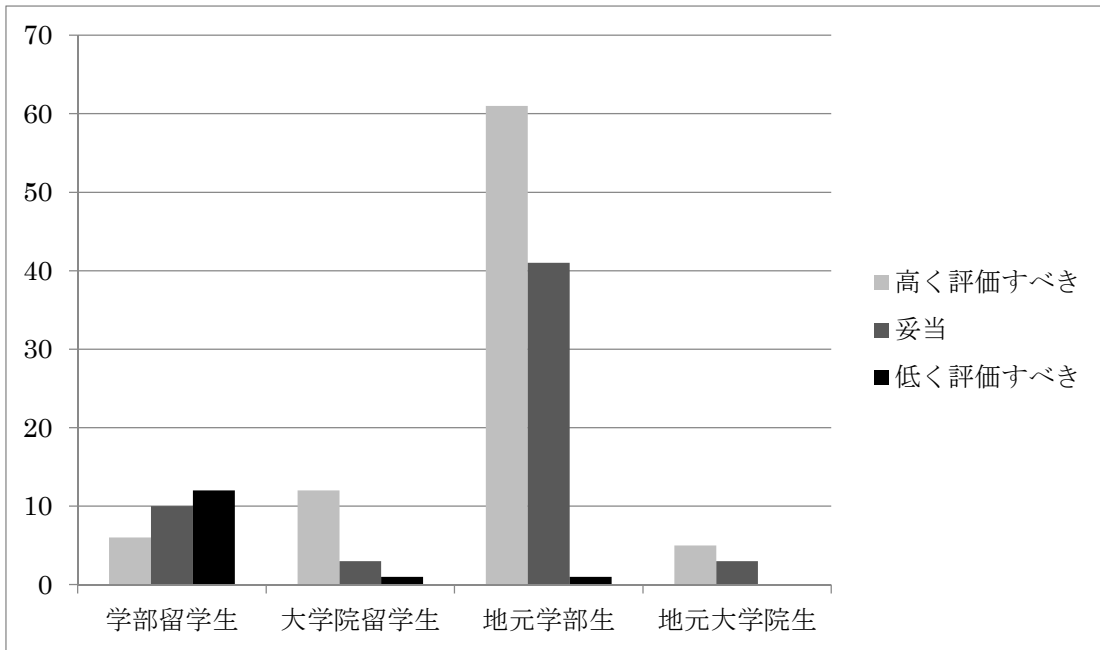
答えており、若干の差ではあるが留学生の方が高い。ここから香港中文大学にきた留学生は実際にランキングを進学の決め手の一つとして考えている場合が多いことがわかる。また、院生全体としては87.5%、学部生全体としては72.73%が重要視すると回答している。学部を経てそこから自らの進路を進学することと定めた院生にとって、各々の研究と照らし合わせ、より高度な学問機関へ進むと決定したとき、やはりランキングが重要視されるのは必然的なことである。実際に、アンケートに回答した院生の地元生においては全員が「大いにそう思う」または「そう思う」を選択しており、また院生の留学生においては80.10%が重要視すると考えており、いずれも割合的に高い結果となっている。



13. 香港中文大学の世界大学ランキングの順位について

香港中文大学の学生の54.19%がランキングの順位を「もっと高く評価されるべきだ」と考えていることがわかった。過半数以上もの学生がこのような評価をしたことは特筆すべきことである。なぜなら過半数以上もの学生が「もっと高く評価すべきだ」を選択したのは3大学の内、香港中文大学だけであるからである。対して、香港大学では、20.83%の学生が「もっと高く評価されるべきだ」を選択していた。割合的に考えれば、この差はかなり大きいといえる。

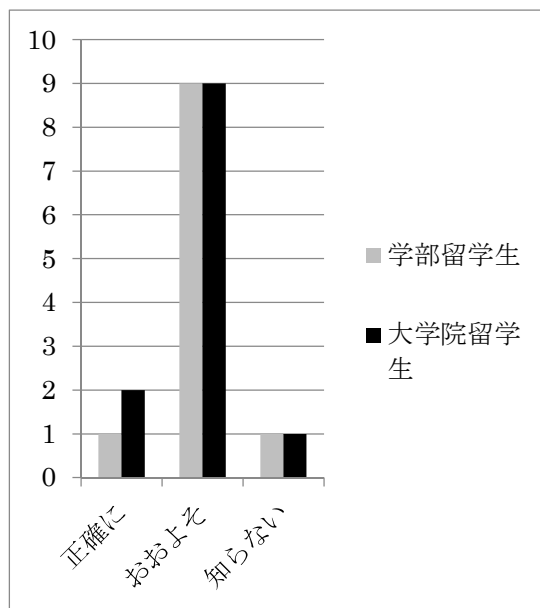
実際に世界大学ランキング (Times Higher Education)において香港中文大学は124位と3大学間の中で最も順位が低く、対して香港大学は35位と最も高かった。この結果は、ランキングの実際での順位を如実に反映していると思われる。しかし、香港中文大学の学部の留学生においては「もっと低く評価されるべきだ」が42.86%を占めていた。このことから、香港中文大学全体では、大学の設備や教育などに肯定的に感じる学生が多いものの、中には特に学部の留学生については否定的に感じているものも多いことがいえる。



14. 出身大学のランキング把握について

アンケートに回答した学部の留学生においては自身の出身校の順位について9.09%が「正確に把握している」81.82%が「おおよそ把握している」9.09%が「把握していない」を選択した。また、院の留学生においては16.67%が「正確に把握している」75%が「おおよそ把握している」8.33%が「把握していない」と回答した。これは、割合的に香港3大学の中でも香港中文大学の留学生が最も多く“把握している”と答えた。この数値から香港中文大学へ留学する多くの学生が出身校と中文大学のランキングを比較して留学して来ていることがわかる。しかし、その中でも正確に把握している学生はほんの少数であることが判明した。このことから、留学先を決める上で世界大学ランキングを正確にかつ、大いに重要視する学生は比較的少なく、留学先を決める上での目安の一つとして“ある程度”考える学生が多数であること考

ることができる。

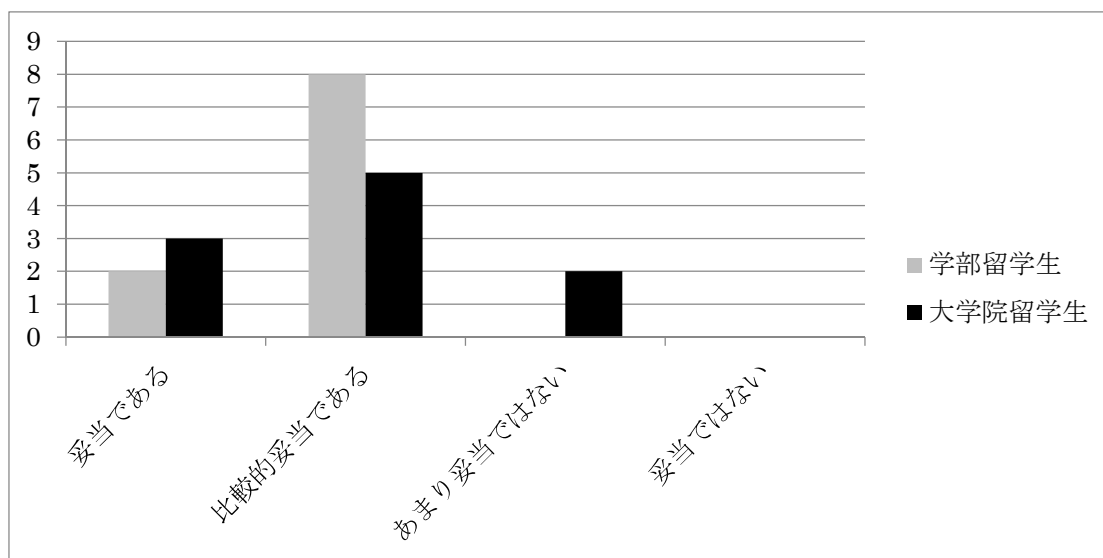


15. 出身大学と香港中文大学とのランキング順位の比較における妥当性

香港中文大学に留学した学生は、各々の出身校と香港中文大学との順位の妥当性について概ね「妥当である」、「比較的妥当である」を選択している。このことは、多くの留学生が進学の際に世界大学ランキングを考慮しているという結果が出たが、そのとき

の出身校と香港中文大学の順位の妥当性が、中文大学へ留学した後にも欠けていないと感じた学生が多数いた結果ではないかと思われる。よって、多くの留学生において、出

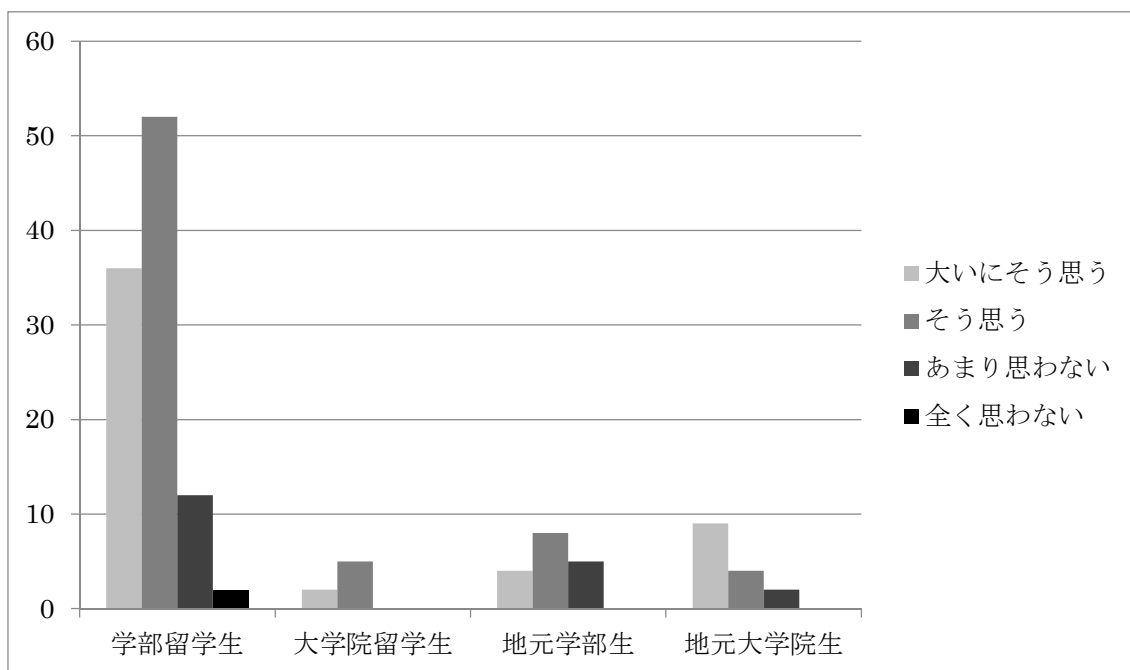
身校と香港中文大学のランキングの順位について不平等であると感じる学生は少ない結果となった。



16. 香港中文大学の世界大学ランキングに対する積極さについて

学生の視点で考慮すれば、香港中文大学は世界大学ランキング向上に大いに積極的であるという結果がでた。これは学生全体の86.52%の学生が「大いにそう思う」または、「そう思う」を選択したからである。しかしこの結果も香港3大学の中では、僅差ではあるが最も低い結果となり、このことから今回調査した香港3大学は、政府主導で世界大学ランキング向上に取り組んでいるため、大学側としても大変積極的に取り組んでいると学生がとらえているのがわかる。中文大学では86.27%の地元の学部生また、アンケートに回答した地元の院生全員が「大いにそう思う」また「そう思う」を選択している。このことから、地元生全体

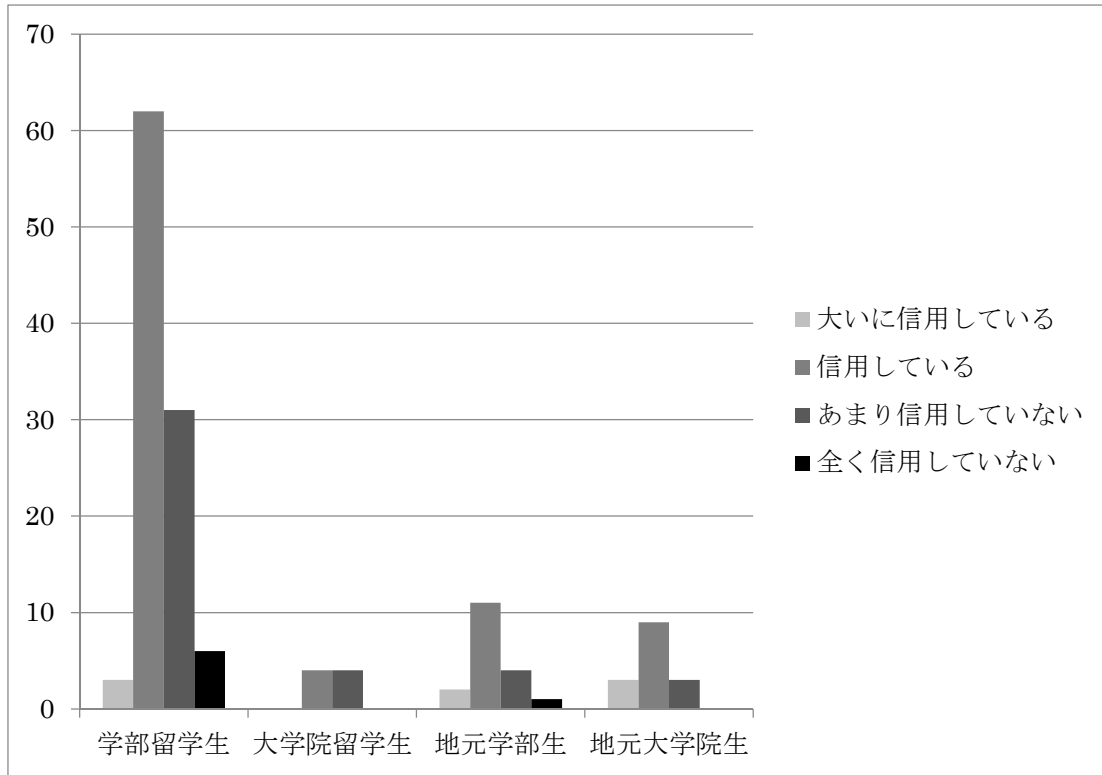
においては大学の世界ランキング向上の取り組みに大多数の学生が肯定的に捉えていることがわかる。これに対し、学部の留学生においては、29.41%の学生が「あまり思わない」を選択していた。この数値は決して高いわけではないが、約30%の学生が大学の世界大学ランキング向上の取り組みについて否定的に捉えているのも事実である。これは海外から香港に来た留学生ならではの“視野の広さ”つまり、留学生は出身校と香港中文大学を比較することが可能であるので、そのことが反映された結果であると考えられる。この点では、地元の学生において特に学部生は香港を出て、海外の大学で学んだ経験を持つものが必然的に、少ないと思われる。故に、この留学生と地元生の根本的な違いが結果に現れたと考えられる。



1.7. 世界大学ランキングの信憑性について

全体的に見ると、世界大学ランキングを「信用している」を選択した学生が最も多く、全体の60.56%を占めていた。「大いに信用している」を選択した5.63%の学生を含めると66.19%の学生がランキングを信用しているという結果となった。このことから香港中文大学の学生は、世界大学ランキングを信用している学生が過半数以上いることが判明したが逆に、約35%もの学生がランキングの信憑性について疑問を抱いていることが明らかとなり、このことも見逃してはいけない点であると考えられる。結果として香港3大学のなかでは、香港中文大学は最も世界大学ランキングを信用していない学生が在籍する大学であることがわかった。実際に香港中文大学は、香港3大学の中で最もランキングが低く、そのことが反映した結果であるとい

えるかもしれない。具体的に見れば、留学生と地元学生を比較したとき、前者の方が世界大学ランキングを信用していることがわかる。地元生全体の57.50%が信用しているのに対し、留学生全体においては75.76%の学生が信用していると答えたからである。また、院生の地元生においては半数の学生が「信用している」と回答しており、残りの半数が「あまり信用していない」と回答していた。このことから院生の地元生においてはランキングを信用していない学生が多数いることが顕著に現れた。それに対し、院生の留学生の80%がランキングを信用しており、20%が信用していないことが明らかとなった。同じ院生でも、留学生と地元生の間では、ランキングに対する評価が大いにことなる結果となり、興味深い結果となった。このことから、特に院生の留学生は“信頼できる”世界大学ランキングを考慮して進学先を香港中文大学に決定したケースが多いと考えることができる。



④大阪大学における

アンケート調査結果

我々は、2013年11月から12月にかけて学内アンケートフォームおよび紙刷りのアンケート調査を実施した。総計で271枚の有効回答数を得た。2013年5月現在時点の統計によると総学生数は23561人となっており、全学生における1.15%を占めていることになる。総学生数の内訳としては、学部生15562人、院生7999人となっている。学部生は、208枚の有効回答を得て1.34%、院生は63枚の有効回答を得て0.79%を占めていることになる。

1. 大阪大学に在籍する交換留学生の出身国・地域について

現在、大阪大学には全体で留学生は3108人が在籍しており、学部生1985人、院生1123人が在籍している。学部生の上位出身国・地域を取り上げると中国が最も多く738人(37.18%)、次に韓国が269人(13.55%)、タイが112人(5.64%)、ベトナムが86人(4.33%)という結果となった。日本全体のそれを取り上げると138075人の留学生が在籍しているが中国が87533人(63.11%)、次いで韓国が17640人(12.78%)、台湾が4571人(3.31%)、ベトナムが4033人(2.92%)という結果になっている。独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)ホームページより

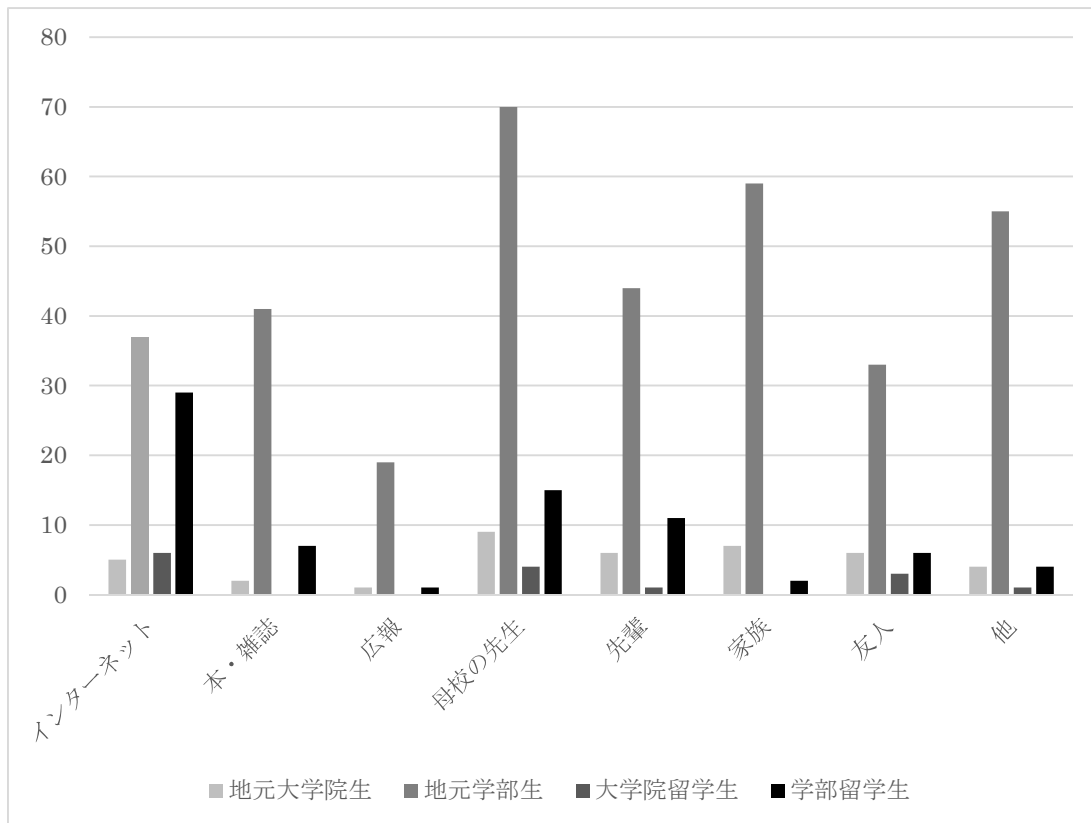
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html

この結果から大阪大学は多様な国々からの留学生を獲得しており、東南アジア特に、タイからの留学生獲得が他の大学と比較しても突出している。これは、大阪大学バンコク教育研究センターがうまく機能している賜物であろう。ただ、他大学と比較すると割合的に最もメジャーである中国人留学生の獲得を十分にしきれていないことがわかる。大阪大学上海教育研究センターが研究員不足など多くの課題を抱えているからだと考えられる。一刻も早く大阪大学上海教育センターを拡充して優秀な中国人留学生を獲得しなければならない。

2. 大阪大学を知ったツールについて

ここでは、大阪大学を知った媒体について掘り下げることにする。なお、この質問については複数選択可とした。留学学部生52人にアンケートを実施したところ、29人(55.77%)が「インターネット」と答え、次いで15人(28.85%)が「母校の先生」を選択した。インターネットをはじめtwitterなどのSNSで大阪大学を知ったなどの意見がみられた。また、母校の先生を選んだ学生も多く、海外の大学教授にも

大阪大学の研究力の高さが知られていることが見受けられるだろう。一方で、「家族」と答えた学生数はわずか2人(3.85%)であり、海外の一般の人には大阪大学の名はそれほど知られていないことが見受けられる。留学院生11人に同様の質問をしてみると6人(54.55%)が「インターネット」、4人(36.37%)が「友人」と回答した。留学学部生と比較してみると、類似した傾向の結果がみられる。次に地元学部生に焦点を当てよう。地元学部生192人にアンケート実施したところ70人(36.45%)が「母校の先生」を、59人(30.73%)が「家族」を選択していた。このことから、大阪大学は一般の人々にもよく知られていることがわかる。大阪大学は1931年の創立の歴史ある大学であり、旧帝国大学の一つとして研究力の高さが高く評価されており、世界大学ランキングでも国内上位を占めていることから上記のことが言えるであろう。最後に地元院生に関して。地元院生には16人にアンケートを実施した。そのうち9人(56.25%)が「母校の先生」を、7人(43.75%)が「家族」を選択しており、地元学部生と同様な傾向がみられる。

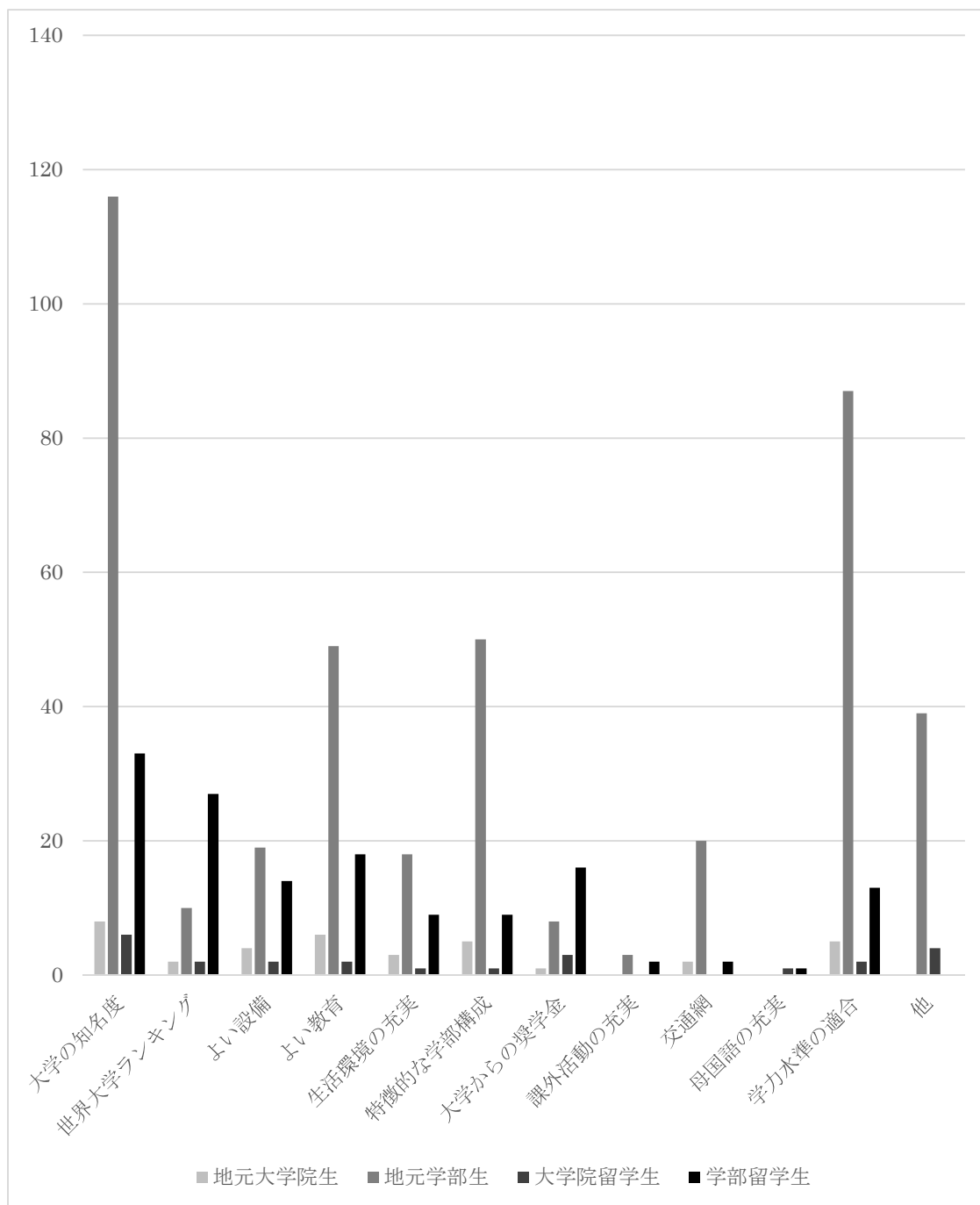


3. 大阪大学を進学先に決定した理由について

続いて、実際に進学に際し、決定する要因になったことを掘り下げる。なおこの質問も複数回答可とした。まず、留学学部生に関しては33人(63.46%)が「大学の知名度」を、続いて27人(51.92%)が「世界大学ランキング」を挙げた。このことから、海外の学生にも大阪大学が知れ渡っていることがうかがえると同時に、2013年現在、日本の中で世界大学ランキングの順位が高い大阪大学に在籍する留学生は留学に際し、「世界大学ランキング」を大いに参考にし、それを指標にして留学先を決定していることがわかる。留学院生に関しては、6人(54.55%)が「大学の知名度」を、続いて3人(27.27%)が「大学からの奨学金」を挙げている。留学院生

も、「世界大学ランキング」に重きを置いて留学先の決定を下している割合が高く、また、国費留学生においては「大学からの奨学金」を選択している学生が多かった。地元学部生に関しては116人(60.42%)が「大学の知名度」を、続いて87人(45.31%)が「学力水準の適合」を選択した。香港3大学と比較して、知名度＝大学のブランド力を重視して大学を選択した学生が多いことが判明した。地元院生に関しても、8人(50%)が「大学の知名度」を、6人(37.5%)が「よい教育」を選択していた。地元院生では、学部よりさらに研究力の高さが求められる院に在籍する学生が「よい教育」を選択したことは以下に大阪大学の院が研究力の高さを有しているかがわかるであろう。ただ、「課外活動の充実」を選択した学生が少なく、部活動、サークルなど

の活動によって少なくとも大阪大学は選択
 されていないという結果が出ている。部活
 動・サークルのより魅力的な取り組みが求
 められる。

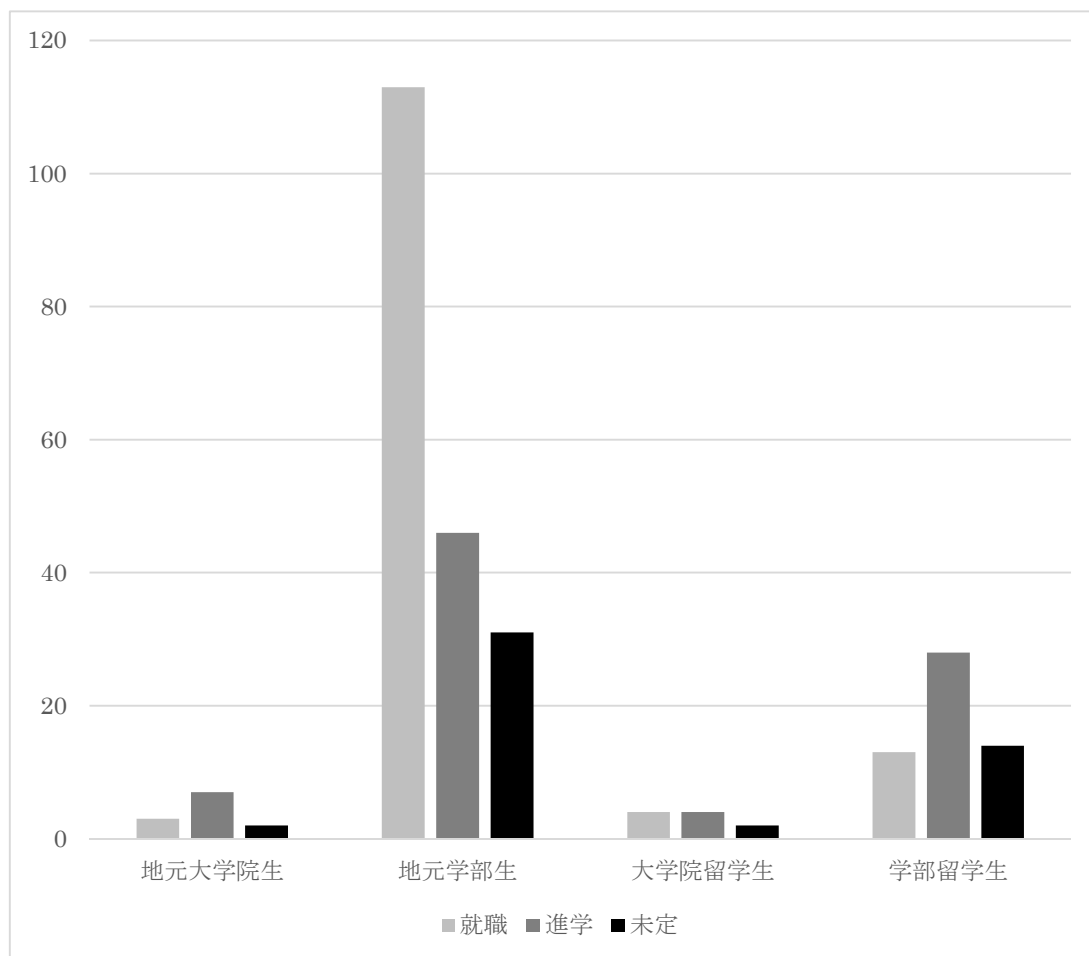


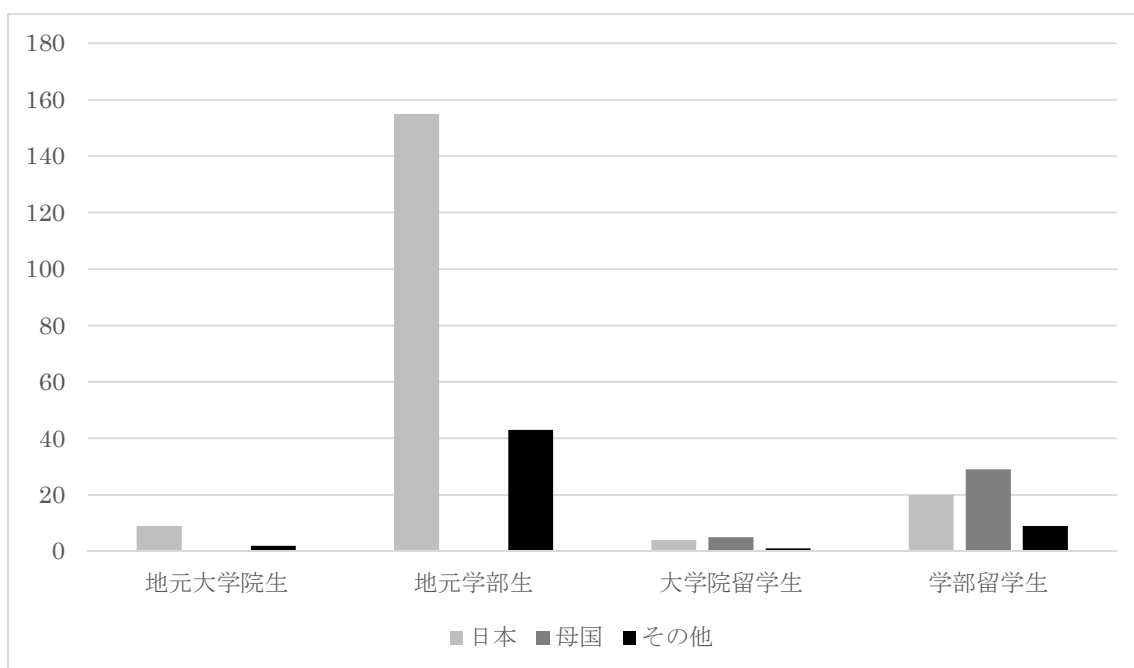
4. 大阪大学に在学する学生の今後の
 進路について
 留学学部生は28人(53.85%)が

「進学」を、14人(26.92%)が「未
 定」、13人(25%)が「就職」と回答し
 た。また進路先としては「母国」が最も多く、
 ついで「日本」、「その他」と続いた。「その

他」には、アメリカや欧米諸国という声が多く聞かれた。「母国」が最も多かったことから、卒業後「母国」に帰国し、就職する学生が多いと見受けられる。尚、進学に関しては、母国よりも欧米諸国を選択した学生が多かった。留学院生に関しては、4人(36.36%)が「就職」「進学」を、2人(18.18%)が「未定」と回答した。就職先としては「母国」、「日本」、「アメリカ」が見受けられた。進学先としては、「アメリカ」や「イギリス」などの欧米が目立つ結果となった。これは、留学学部生にも通じる結果となった。地元学生に関しては113人(58.85%)が「就職」を、46人(23.96%)が「進学」、23人(11.98%)が「未定」

と答えた。進路先としては回答数のうち8割もの学生が「日本」を選択したが、一部では「イギリス」、「アメリカ」など英語圏の国々での就職希望の声が聞かれた。しかしながら、香港3大学と同様に地元学部生の積極的な海外への「就職」、「進学」は見られない結果となった。地元院生に関しては、7人(43.75%)が「進学」を、3人(18.75%)が「就職」を、2人(12.5%)が「未定」と回答した。進路先としては、9人(56.25%)が「日本」と答えるなど地元生は、院生を中心に比較的地元志向が強い結果となっていた。

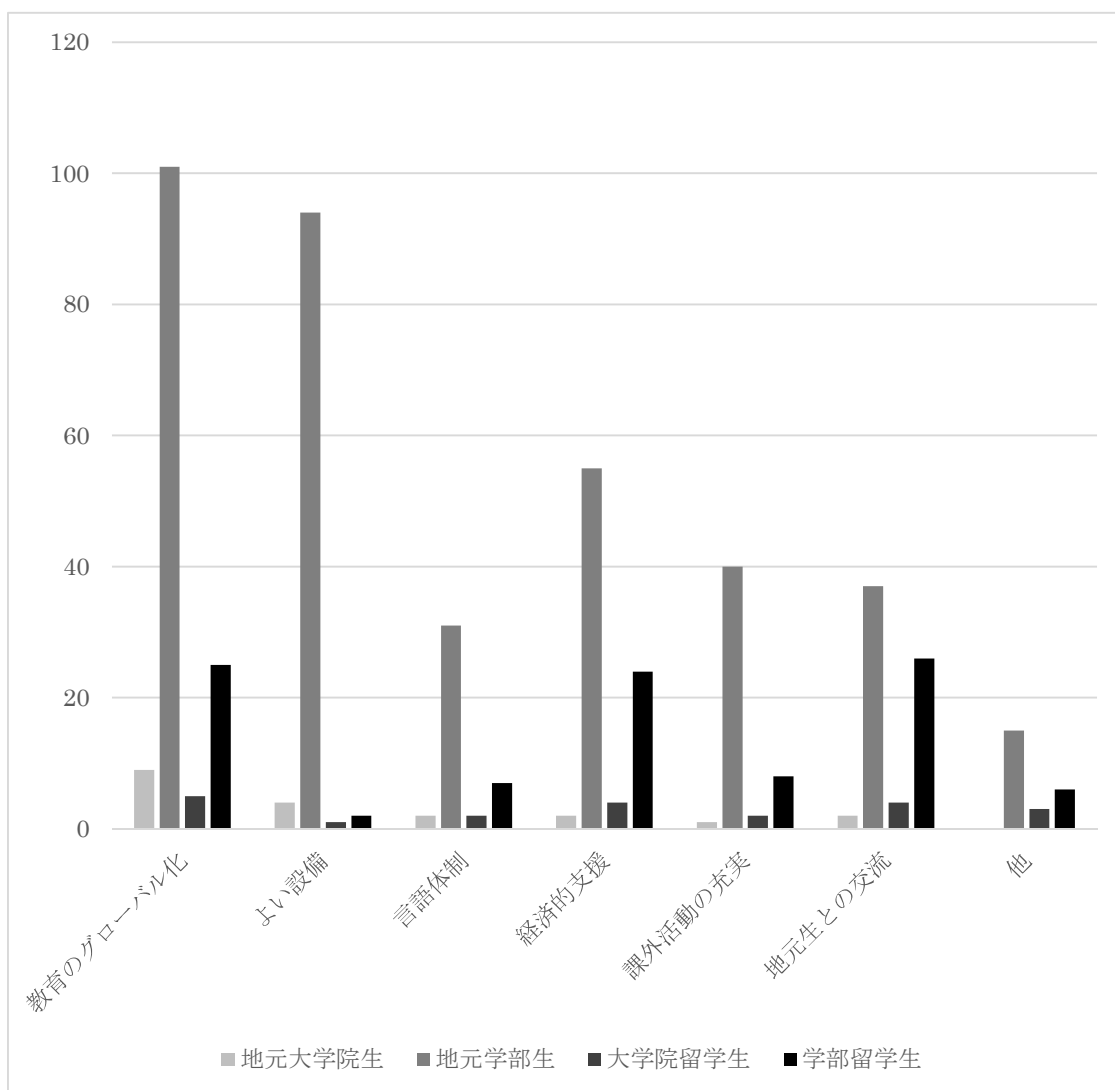




5. 大阪大学に求める要素について

ここでは、大阪大学に求める要素、つまり大阪大学に在学する学生の不満を掘り下げていく。ここでの質問も複数回答可とした。香港3大学でも見られた傾向であるが、留学生、地元生ともに「教育のグローバル化」を求める声が多かった。ここで、詳細に分析すると、留学学部生は、26人(50%)が「地元学生との交流」を選択し、割合的に最も高く、次に高かったのは25人(48.08%)が回答した「教育のグローバル化であった。インタビューをしたところ、同じ国・地域または留学生同士の交流が盛んであるが、日本人学生の交流の場が少ないとの声が多く見受けられた。交流の場を設け、外国人留学生との相互理解を深めるべきであると考え。留学院生に関しては、5人(45.45%)が「教育のグローバル化」を、4人(36.36%)が「経済的支援」「地元生との交流」を選択した。このことから留学院生に関しても、上記のことが言えるだろう。

次に、地元学部生に関しては、101人(52.60%)が「教育のグローバル化」を、94人(48.96%)が「よい設備」を選択した。学生にインタビューを実施すると、豊中・吹田・箕面間の学内バスの強化を求める声や、昼食時の食堂の混雑緩和を求める声が多く挙げられた。また地元院生に関しては、9人(56.25%)が「教育のグローバル化」を、4人(25%)が「よい設備」を回答しており、地元院生に関しては、引き続き上記の面のことが言えるだろう。ここから大阪大学全体としては「教育のグローバル化」を求める学生が多数いるということが判明した。日本の大学でも留学生を多く有している大阪大学でもこのような結果が出ていることから、更なる「国際化」を学生も取り巻いて断行していかなければならないだろう。これは、香港3大学にも言える問題であり、この取り組みは世界的にいかなければならないという表れではないか。

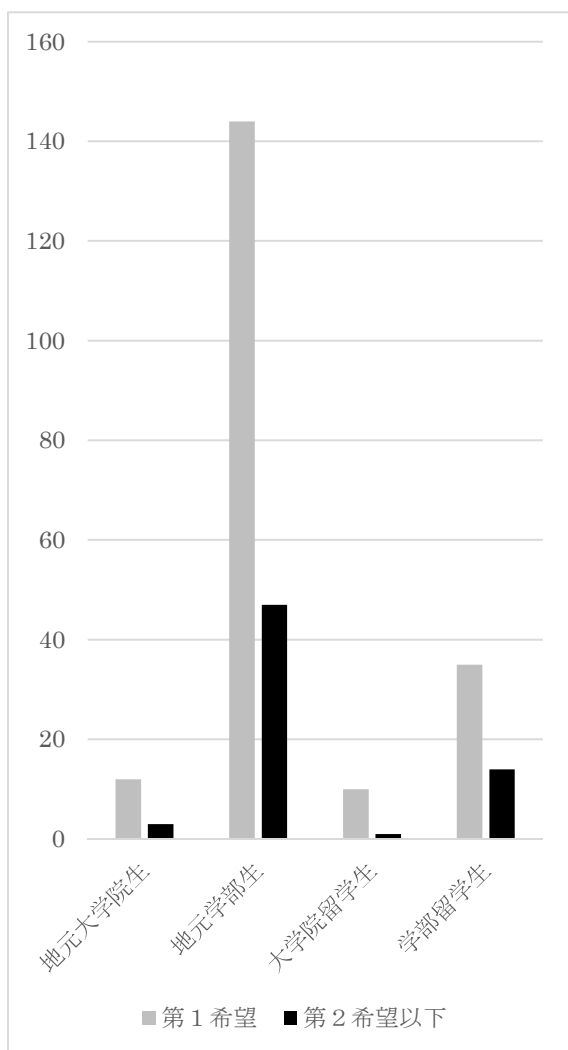


6. 大阪大学の希望順位について

留学学部生に関しては、35人(67.31%)が第一希望を大阪大学にしており、14人(26.92%)が他大学を希望していた。それらの第1希望としては、具体的な大学名として東京大学、早稲田大学など日本大学が目立った。このことが香港3大学と大きく異なっている。香港3大学に在籍している留学生の第1希望は、欧米のトップレベル大学などが大きく挙げられ、香港の他の大学はそれほど多くは取り上げられていなかった。第一希望を断念した理由には、

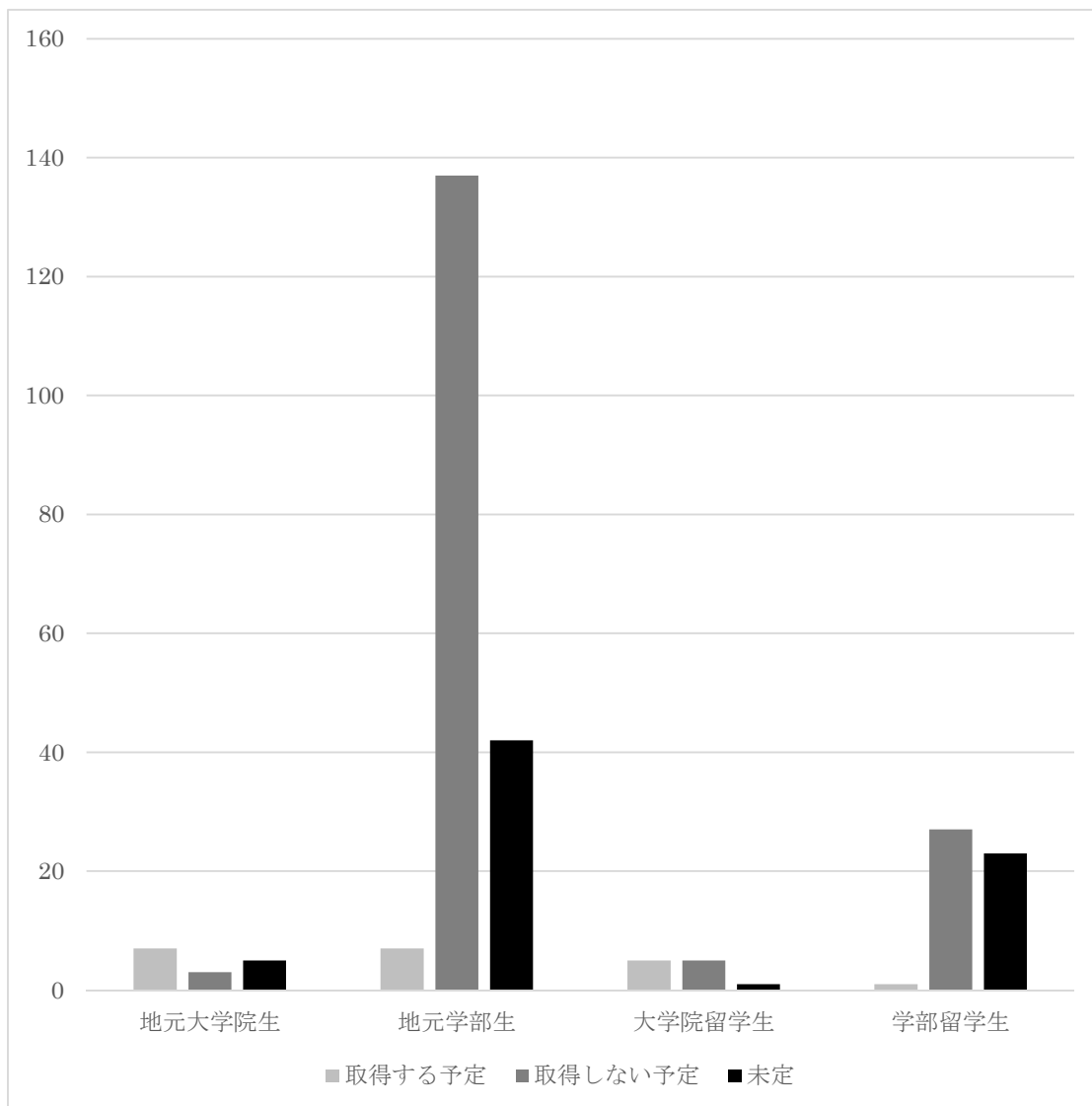
第1希望大学の学力基準に達しなかったという面が目立った。留学院生に関しては、10人(90.91%)が第一希望を大阪大学にしており、1人(9.09%)が他大学を希望していた。留学院生に関しては、大阪大学を希望していた学生は多かった。地元学部生に関しては、144人(75%)が大阪大学を第1希望にしており、47人(24.48%)が第2希望以下としていた。第1希望としては、東京大学、京都大学、一橋大学、早稲田大学などが挙げられた。東京大学、京都大学、一橋大学に関しては前期試験で不合格だったため、後期試験で大阪大学を志

望したという学生がみられた。早稲田大学に関しては、希望する学部があったが金銭的な面で進学を断念したという声があった。地元院生に関しても、12人(75%)が大阪大学を第1希望とし、3人(18.75%)が第2希望以下としており、地元学部生とほぼ同様の傾向がみられた。東京大学、京都大学に関しては大阪大学よりも世界大学ランキングが上であることからこの傾向はうなずけるが、一橋大学は大阪大学よりも世界大学ランキングが低位となっている。このことから、試験科目や偏差値などを踏まえて大学選びをしている学生も多いとみられる。



7. 博士号取得について

博士号取得に関して、留学学部生では、27人(51.92%)が「取得しない予定」、23人(44.23%)が「未定」、1人(1.92%)が「取得する予定」と答えた。多くの留学学部生は、大阪大学での博士号取得には否定的な結果が出た。留学院生では5人(41.67%)がそれぞれ「取得予定」、「取得しない予定」を選択し、1人(8.33%)が「未定」と答え、留学院生は比較的取得予定という回答が多かった。そもそも院生は博士号習得のために院に行く者が多いため当然の結果であろう。続いて地元学生であるが、137人(71.35%)が「取得しない予定」、42人(21.88%)が「未定」、7人(3.65%)が「取得する予定」と答えた。取材をしてみたところ、近年特に、文系の博士号取得率は低いと見受けられる。院生では7人(43.75%)が「取得する予定」、5人(31.25%)が「未定」、3人(18.75%)が「取得しない予定」と答えた。総じて、院生の博士号を「取得する予定」と回答した学生割合は高かった。学部生に焦点を当てると、香港3大学と比較しても「取得する予定」と回答した比率が低かった。

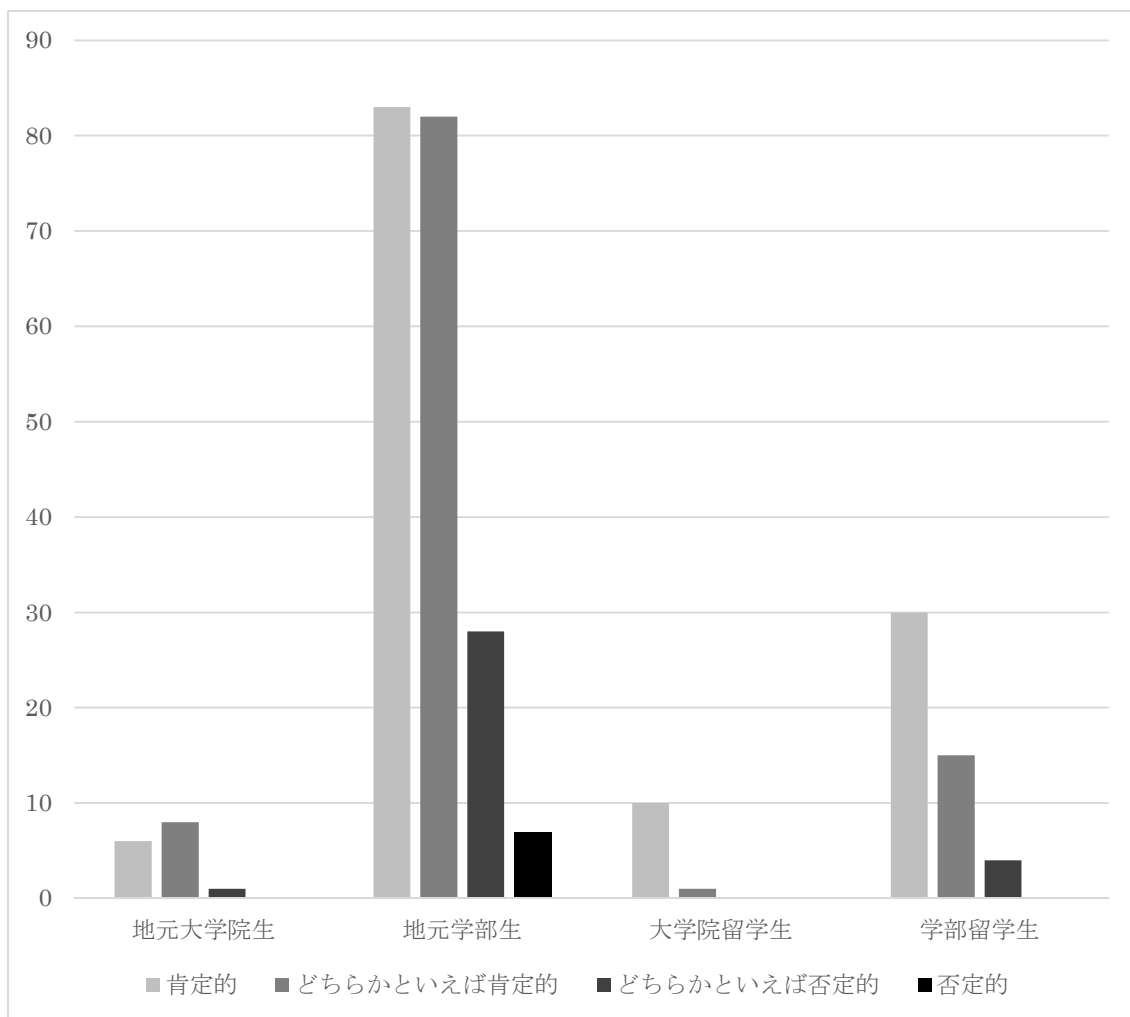


8. 大阪大学に抱くイメージについて

初めに留学学部生に関しては、30人(57.69%)が「肯定的」を、15人(28.85%)が「どちらかといえば肯定的」を、4人(7.69%)が「どちらかといえば否定的」と回答した。比較的大阪大学を肯定的にとらえているといえるだろう。留学院生に関しても、10人(90.91%)が「肯定的」を1人(9.09%)が「どちらかといえば肯定的」と回答しており上記のことが言えるであろう。地元学部生に関しては、

83人(43.23%)が「肯定的」、82人(42.71%)が「どちらかといえば肯定的」、28人(14.58%)が「どちらかといえば否定的」、7人(3.65%)が「否定的」と回答した。おおよそ85%のポジティブな意見があったが、残りの15パーセントは大阪大学に対しネガティブな意見を持っている。1人でもポジティブなイメージを持ってくれるような取り組みが必要であろう。地元院生に関しては、8人(50%)が「どちらかといえば肯定的」を、6人(37.5%)が「肯定的」を、1人(6.

25%)が「どちらかといえば否定的」を選択した。

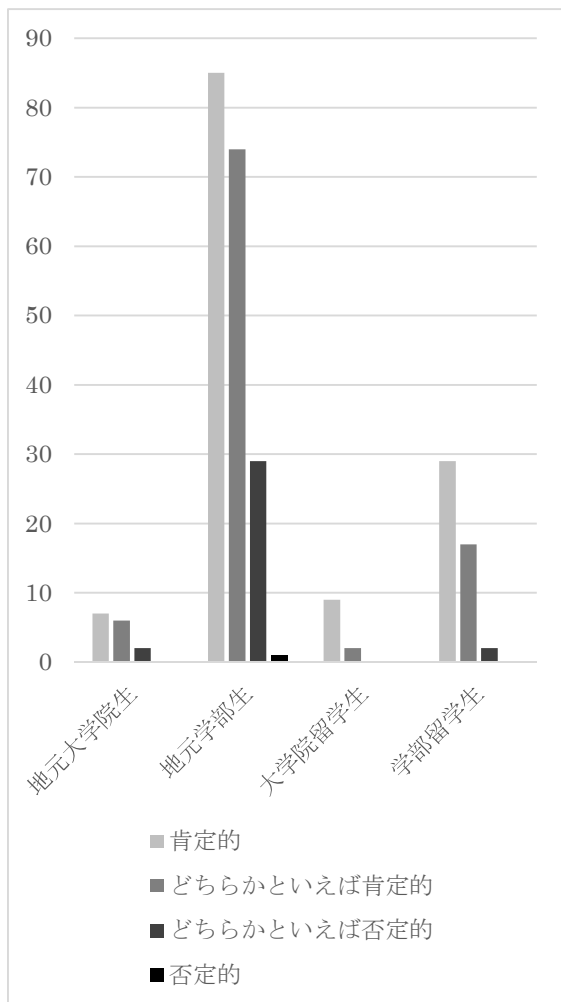


9. 大阪という土地に抱くイメージについて

初めに留学学部生は、29人(55.7%)が「肯定的」を、17人(32.69%)が「どちらかといえば肯定的」を、2人(3.84%)が「どちらかといえば否定的」と回答した。留学院生は、9人(81.82%)が「肯定的」を、2人(18.18%)が「どちらかといえば肯定的」と回答しており、留学生の大阪に対するイメージは良い結果が出ている。地元学部生に関しては、85人(44.27%)が「肯定的」を、74人(3

8.54%)が「どちらかといえば肯定的」を、29人(15.10%)が「どちらかといえば否定的」を、1人(0.52%)が「否定的」ととらえていた。地元院生に関しては、7人(43.75%)が「肯定的」を、6人(37.5%)が「どちらかといえば肯定的」を、2人(12.5%)が「どちらかといえば否定的」と回答した。肯定的な意見が多く、香港大学に抱くイメージと比較したとき全体的に大きな変動はなかった。留学生の場合には、日本の中では方言も強く、文化もやや異なっている大阪という地域・都市を好んで大阪大学に留学しているとい

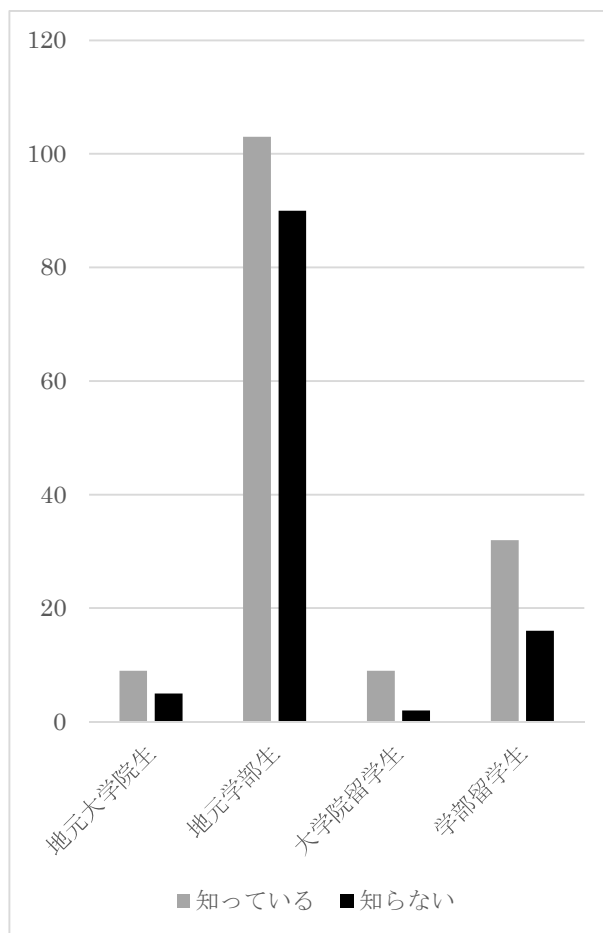
うことであり、地元生の場合には、大阪という地元に着愛を持っていることがわかる。



10. 大学ランキングの認知について

大阪大学の学生に独自に質問した。留学学部生は32人(61.54%)が大学ランキングを「知っている」、16人(30.77%)が「知らない」と回答した。留学院生は、9人(81.82%)が「知っている」を、2人(18.18%)が「知らない」と回答した。留学生に関しては多くの学生が大学ランキングの存在を認知しているようである。地元学生は、103人(53.65%)が「知っている」を、90人(46.88%)が「知らない」を選択。地元院生は、

9人(56.25%)が「知っている」を、5人(31.25%)が「知らない」を選択した。地元の学生の大学ランキングの認知率は半数強にとどまった。

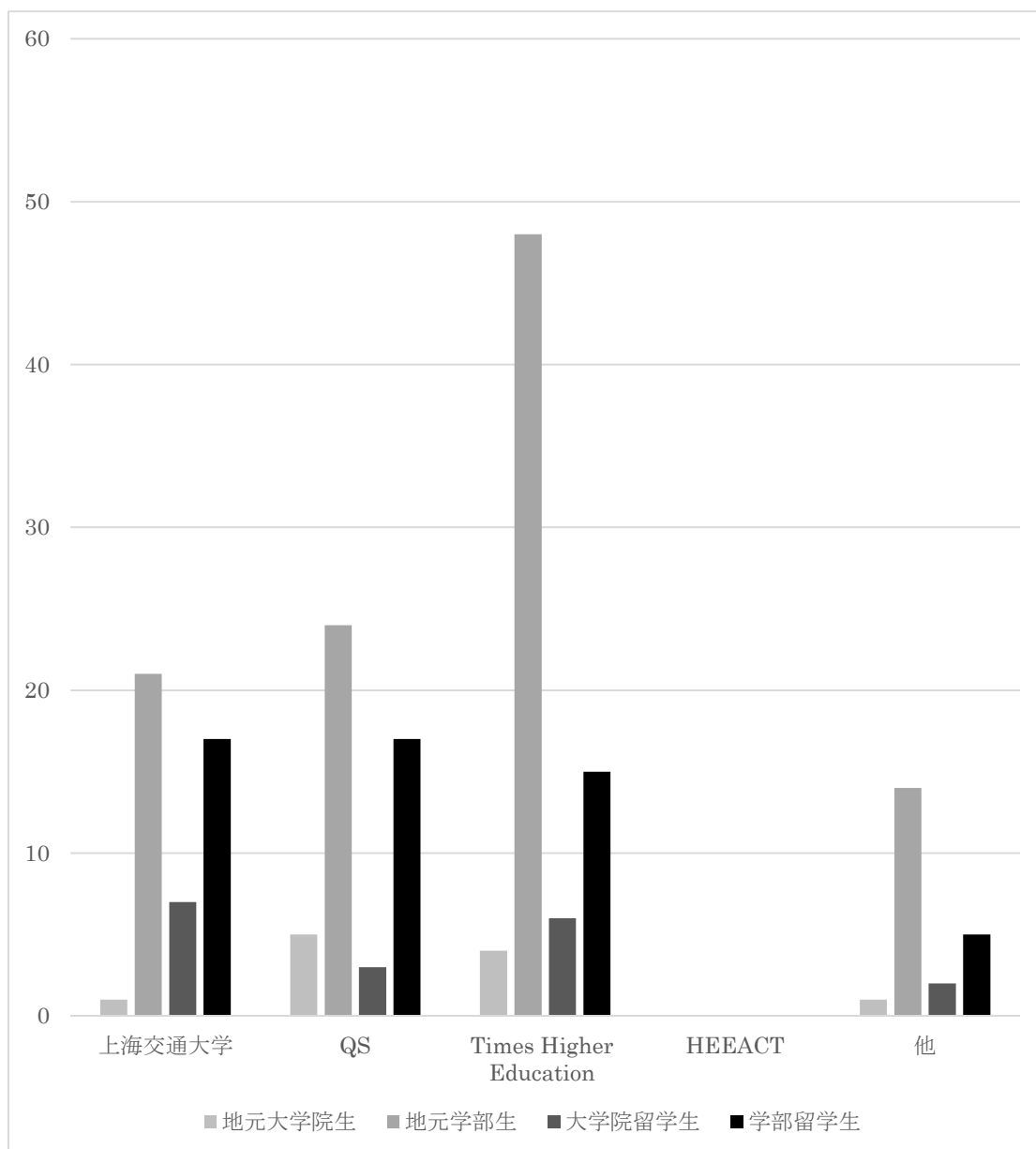


11. 認知している世界大学ランキングについて

大学ランキングを「知っている」と回答した学生を対象に次は、その種類を問うた。この質問に関しては、複数回答可とした。尚パーセンテージの分母は、全体数を取っている。留学学部生に関しては、17人(32.69%)がそれぞれ「上海交通大学」「QS」を、15人(28.85%)が「Times Higher Education (THE)」を選択した。留学院生は、7人(43.75%)が「上海交通大学」を、6人(37.5%)が「THE」を、3

人（18.75%）が「QS」を選択した。留学生には「上海交通大学」「THE」「QS」がほぼ均等に知られていることがデータから読み取れる。地元学部生に関しては、48人（25%）が「THE」を、24人（12.5%）が「QS」を、21人（10.94%）が「上海交通大学」を選択している。地元院

生は5人（31.25%）が「QS」を、4人（25%）が「THE」を1人（6.25%）が「上海交通大学」を選択していた。総じて、地元生は新聞やTVなどのマスメディアで比較的多く取り上げられる「THE」をよく認知しており次に「QS」、「上海交通大学」という認知度になっている。

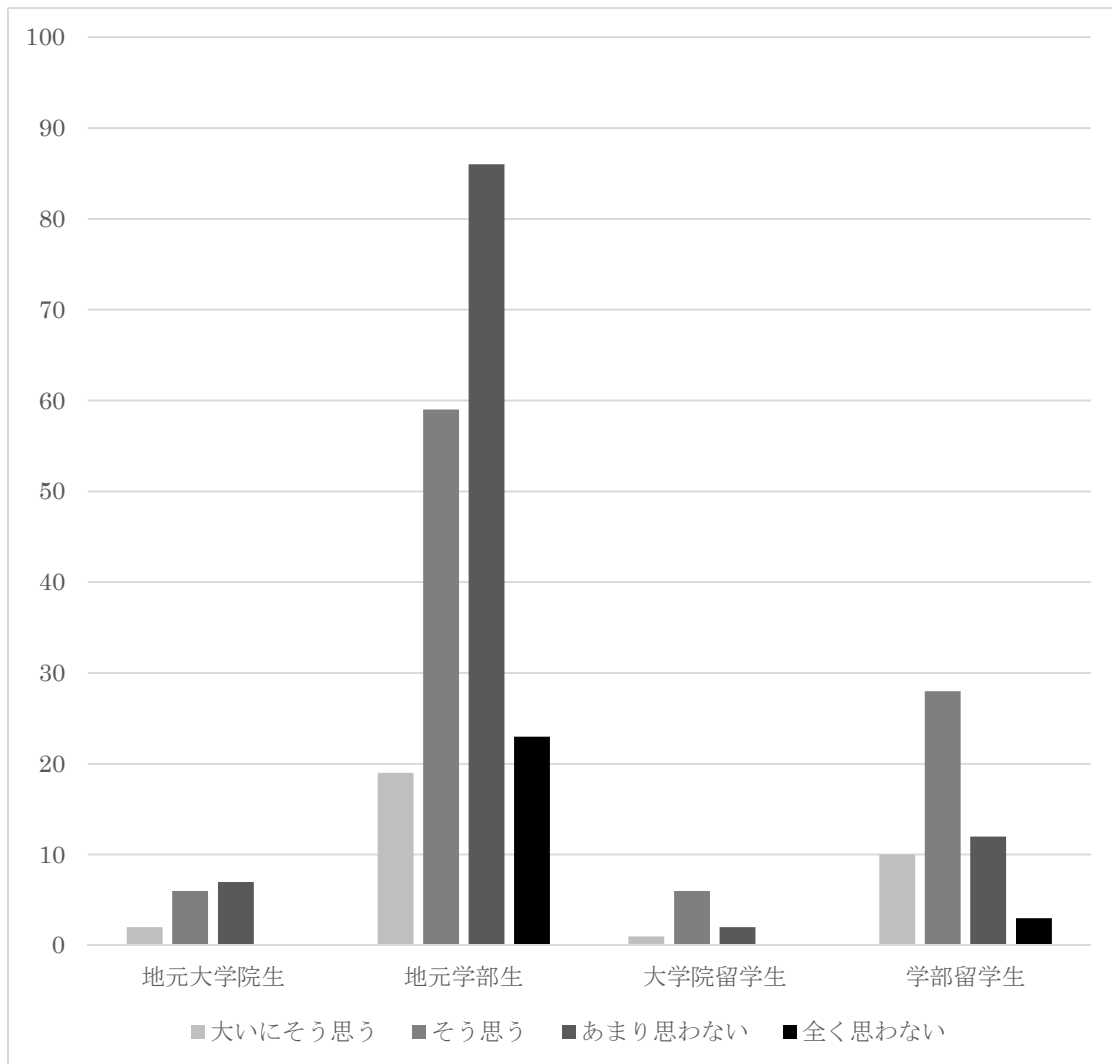


12. 進学に際し世界大学ランキングが考慮される比重について

次に、実際世界大学ランキングが進学に際し、どれほど考慮＝重要視されるのかを分析する。留学学部生に関しては、28人

(53.85%)が「そう思う」、12人(23.08%)が「あまりそう思わない」を、10人(19.23%)が「大いにそう思う」を、3人(5.77%)が「全くそう思わない」を選択した。留学院生に関しては、6人(54.55%)が「そう思う」を、2人(18.18%)が「あまり思わない」を、1人(9.09%)が「大いにそう思う」と回答した。総じて、留学生に関しては、大学ランキングを参考にしていることがわかる。これは、海外に進学する留学生にとって世界大学ランキングが志望校を決定するにおいて、重要な指標になっていることが如実に現れている。このことは、香港3大学でも同様な傾向を示していることから、今後も世界大学ランキングに大きな期待が寄せられるだろう。次に、地元学部生に関しては、86人(44.79%)が「あまり思わない」を、59人(30.73%)が「そう思う」を、23人(11.98%)が「全くそう思

わない」を、19人(9.90%)が「大いにそう思う」を選択していた。地元院生に関しては、7人(43.75%)が「あまり思わない」を、6人(37.5%)が「そう思う」を、2人(12.5%)が「大いにそう思う」を選択した。総じて地元生は、留学・進学に際し、大学ランキングを参考にしないという結果が出た。これは、留学生と真逆の結果が出た。前の問いにおいても日本人学生は、大学ランキングよりも大学の知名度を重視していることが明確に出た。この傾向は香港3大学には見られなかったことから日本人学生独自の考えであるだろう。また、留学に際しても大学ランキングを重視しないことから、日本人学生は大学ランキングに対する高い信用度を持っていないようである。やはり、日本人学生にとっては試験の科目や偏差値の方が受験校選びに影響しているのかもしれない。



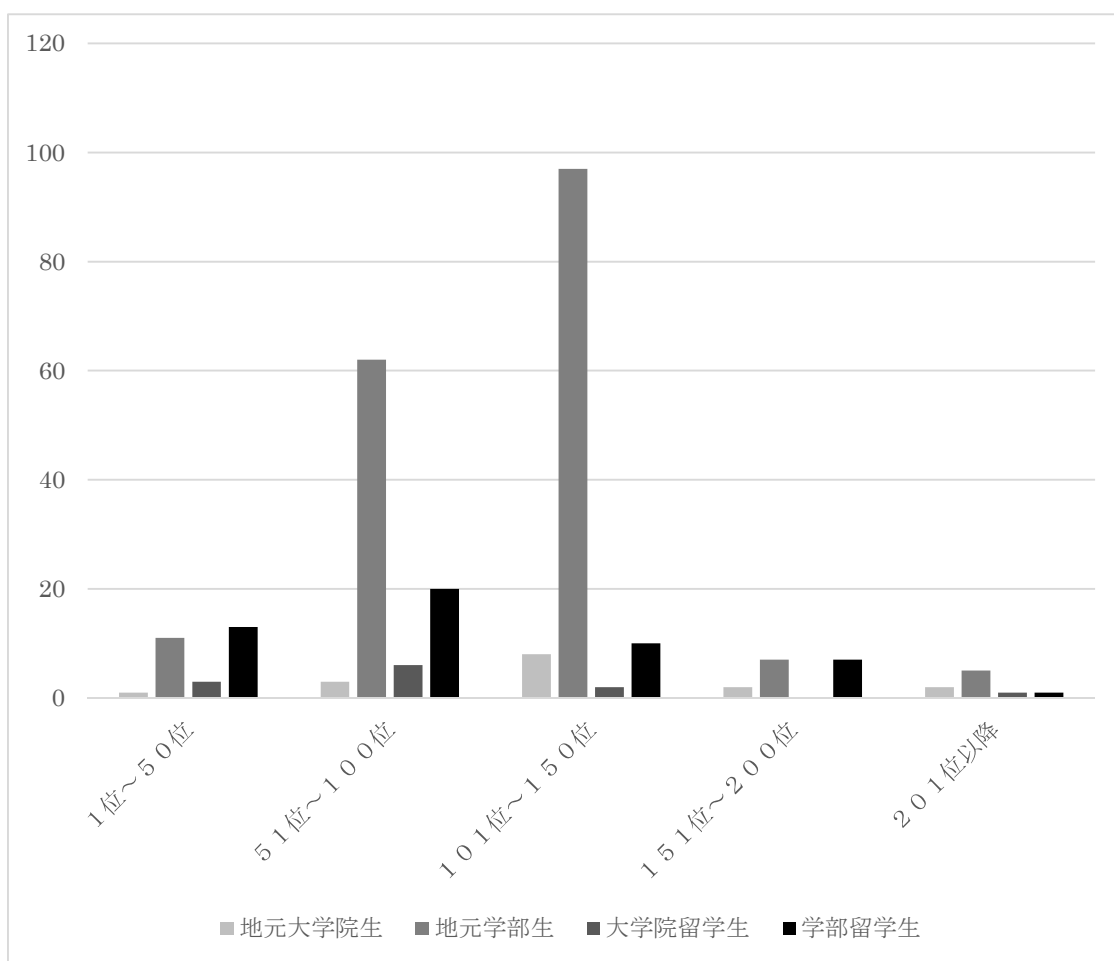
1.3. 大阪大学の世界大学ランキングの順位について

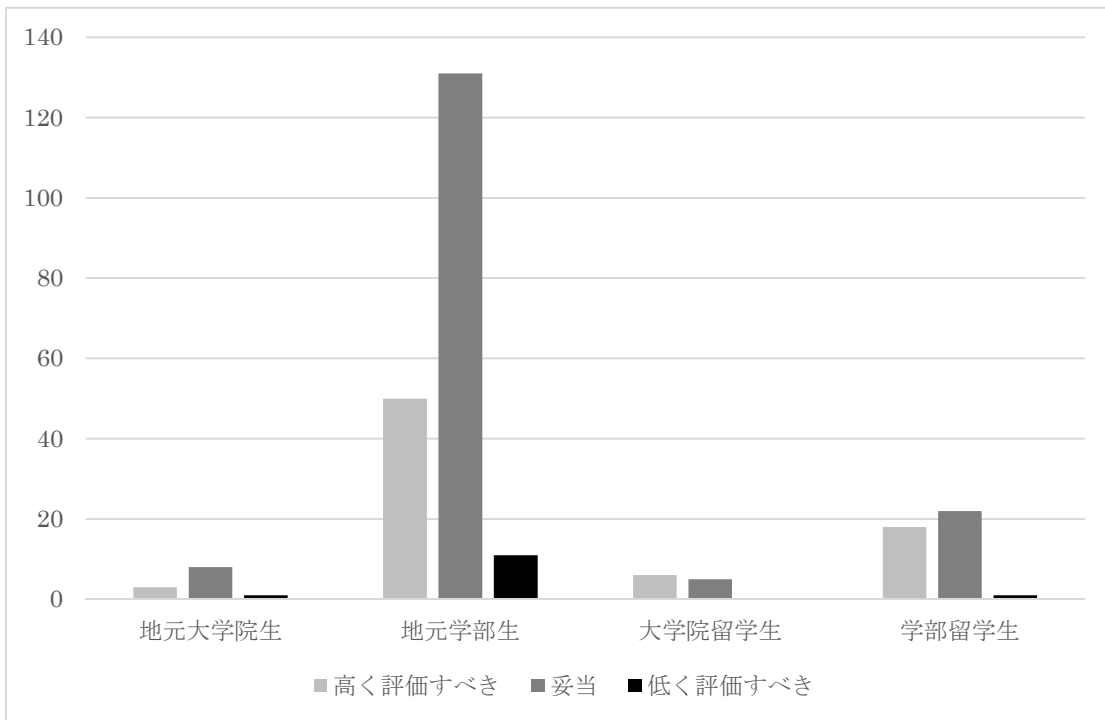
大阪大学の学生のみを対象に大阪大学の世界大学ランキングのおおよその順位予想を問うた。留学学部生に関しては、20人（38.46%）が「51位～100位」、13人（25%）が「1位～50位」という回答をし、大阪大学の世界大学ランキングを高いものとして予測している。留学院生に関しても、6人（37.5%）が「51位～100位」を、3人（18.75%）が「1～50位」を選択した。国内で最も重視され

ている Times Higher Education (THE) の2013年の大阪大学の順位が144位であることから高順位の予想をしていたとわかる。尚、この順位を踏まえてどう思うかを質問した。留学学部生は、22人（42.31%）が「妥当」、18人（34.62%）が「高く評価すべき」を選択した。留学院生は、6人（54.55%）が「高く評価すべき」を、5人（45.45%）が「妥当」と回答した。留学生に関しては、「高く評価すべき」「妥当」の二分状態になった。留学生は、大阪大学の低い順位に多少の不満を持っているだろう。一方で、地元生に焦点を当

てる。地元学部生は、97人(50.52%)が「101位～150位」を、62人(32.29%)が「51位～100位」を選択するなど留学生と比較すると低い順位予想が目立った。地元院生は、8人(50%)が「101位～150位」を、3人(18.75%)が「51位～100位」を選択した。地元学部生とほぼ同様な傾向が出た。次に、この順位についてどう思うかを質問した。地元学部生は、131人(68.23%)が「妥当」

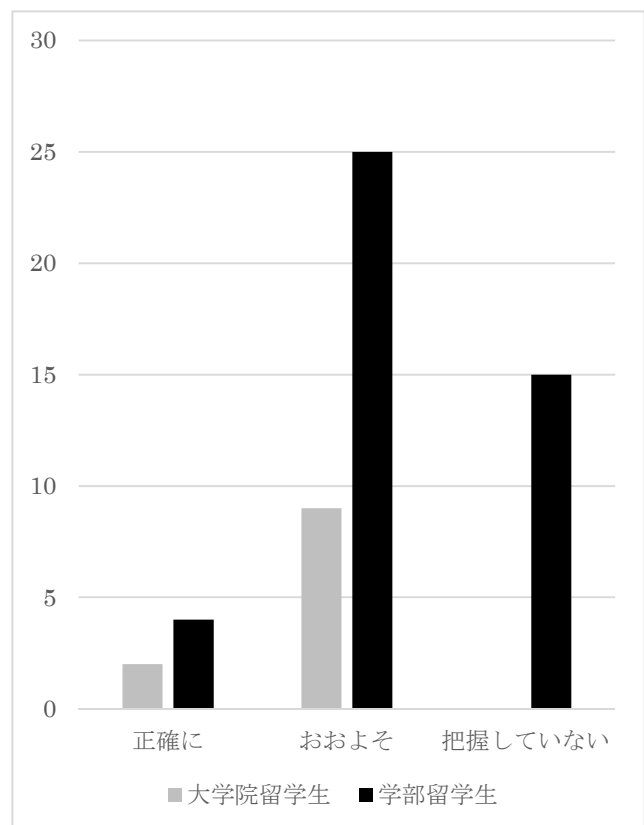
を、50人(26.04%)が「高く評価すべき」を選択した。地元院生は、8人(50%)が「妥当」を、3人(18.75%)が「高く評価すべき」を選択した。「101位～150位」と答えた地元生が多く、144位というTHEの実際の順位に対して「妥当」と答えた率が高かったことから、大阪大学では多くの地元生が世界大学ランキングの順位について受け入れている傾向が強い。





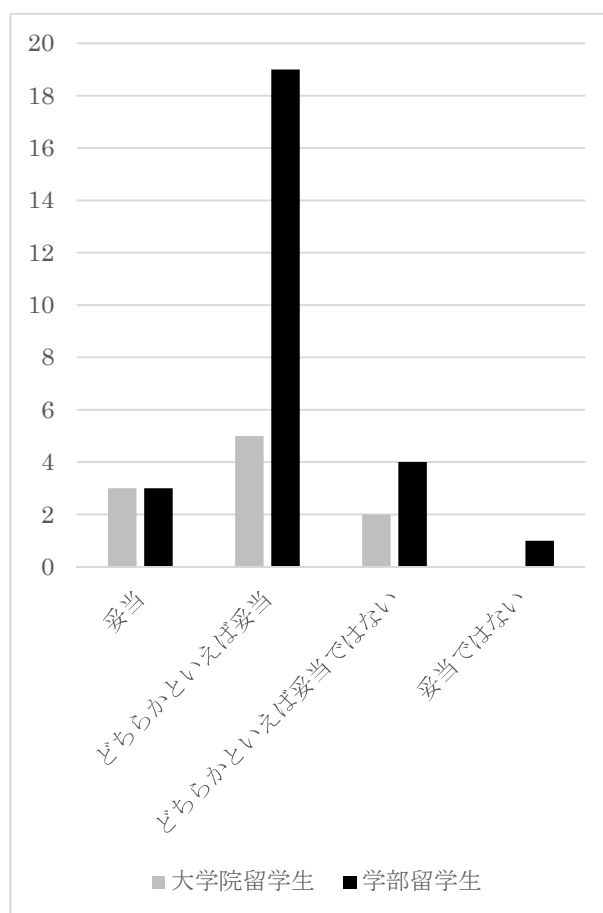
1 4. 出身大学のランキング把握について

この質問は留学生限定で実施した。アンケートに回答した留学学部生において自身の出身校の順位について、25人(48.08%)が「おおよそ把握している」、15人(28.85%)が「把握していない」、4人(7.69%)が「正確に把握している」と回答した。香港3大学と比較すると、出身大学の順位を正確に及びおおよそ把握している学生の割合が低い結果となっていることからおおよそ半数もの学生は自身の出身校のランキングの順位について明確に認識していないことがわかる。出身大学のランキング順位よりも留学先の大学のランキング順位を重視して把握しているのであろう。留学院生に関しては、9人(81.82%)が「おおよそ把握している」を、2人(18.18%)が「正確に把握している」を選択した。香港3大学と比較しても把握している率が高く、留学学部生と反対の結果が表れた。



15. 出身大学と大阪大学とのランキング順位の比較における妥当性

大阪大学に留学した学生は、各々の出身大学と大阪大学との順位の妥当性について留学学部生は19人(36.54%)が「どちらかといえば妥当」、4人(7.69%)が「どちらかといえば妥当ではない」、3人(5.77%)が「妥当ではない」を選択している。留学院生に関しては、5人(45.45%)が「どちらかといえば妥当」を、3人(27.27%)が「妥当」を、2人(18.18%)が「どちらかといえば妥当ではない」を選択した。大阪大学に進学した留学生は出身大学と大阪大学の順位の妥当性に疑問を投げかけている学生は比較的少数であることがいえる。大阪大学の留学生は地元生と比較して、世界大学ランキングを信用している学生が多いことから、大学ランキングの順位づけに不満はないようである。

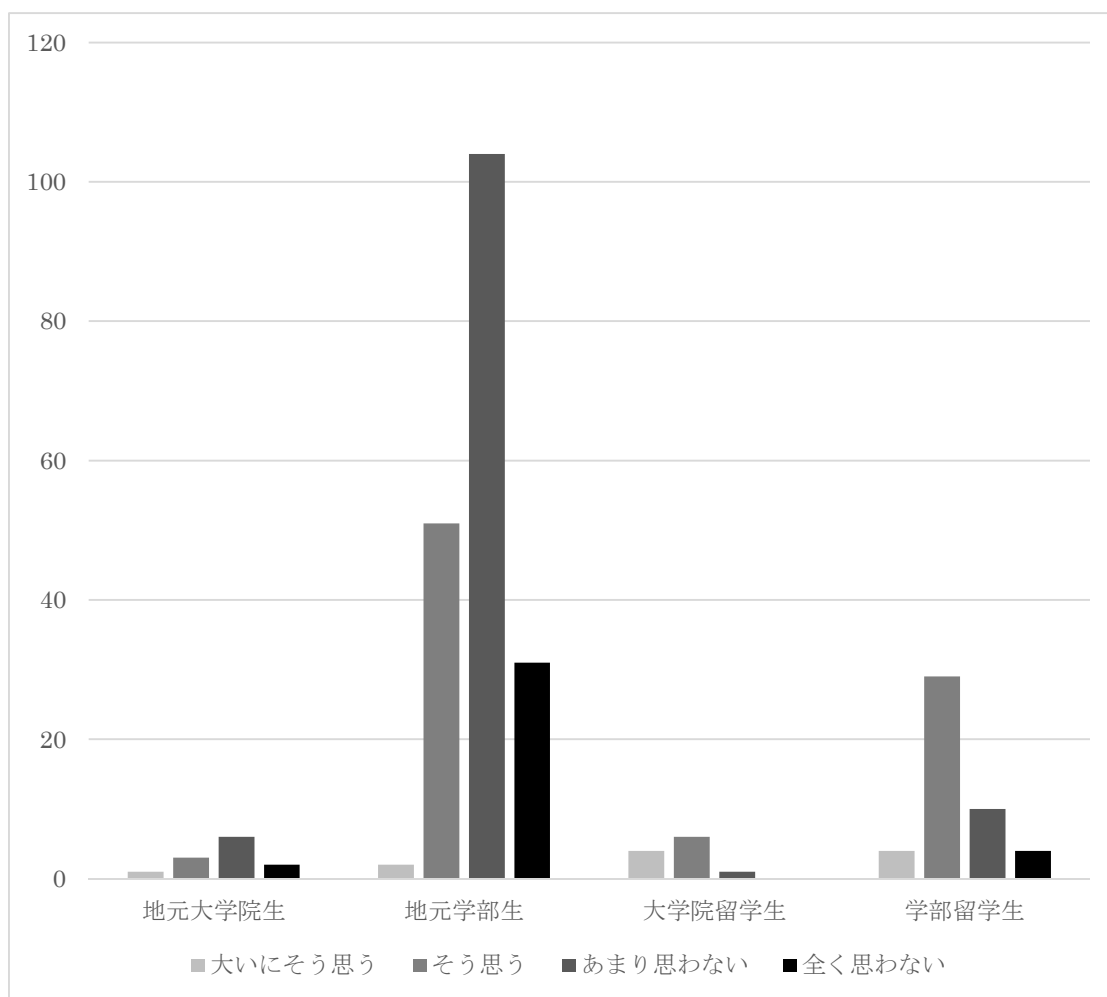


16. 世界大学ランキングにおける積極度について

実際に大学は世界大学ランキングに対し積極的に取り組んでいると思うかを学生に問うた質問である。留学学部生に関しては、29人(55.77%)が「そう思う」を、10人(19.23%)が「あまり思わない」を選択し、留学院生は、6人(54.55%)が「そう思う」を、4人(36.36%)が「大いにそう思う」を選択した。留学生には、大阪大学が世界大学ランキング向上に向けて積極的に取り組んでいると映っている。留学生が大学情報を収集するために用いる大阪大学ホームページに、その取り組みを大きく掲載していることが功を奏している

のだろう。次に、地元学生に焦点を当てる。地元学部生に関しては、104人（54.17%）が「あまり思わない」を、51人（26.56%）が「そう思う」を、31人（16.15%）が「全く思わない」を選択した。地元院生は、6人（37.5%）が「あまり思わない」を、3人（18.75%）が「そう思う」を選択した。これらのことから、地元生は大阪大学が積極的に大学ランキングに関する諸問題に対して取り組んでいないという結果が出た。「あまり思わない」とい

う値が最も高かったのは、大阪大学のみであり、香港3大学では、「そう思う」が最も高かったことから、学生目線からは大阪大学は香港3大学と比較して、真剣に取り組んでいないという厳しい評価が出ている。ただ、大学ランキング向上に関する活動自体が地元生に認知されていない可能性も大いにある。広報活動や一般教養の授業などを通して、活動の詳細な内容を広め、地元生の世界大学ランキングに関する認知・興味を増大させる環境づくりが必要であろう。

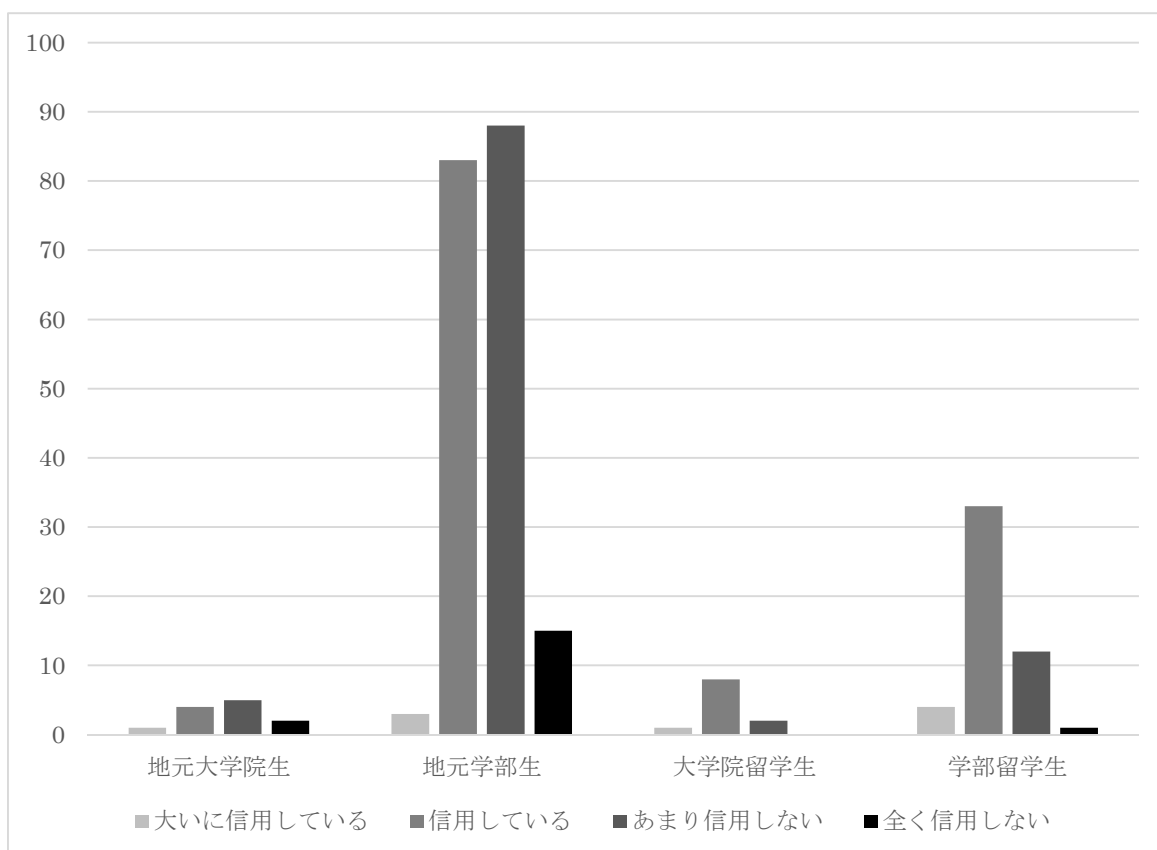


17. 世界大学ランキングの信憑性について
引き続き、世界大学ランキングの信憑性

について問うた。留学学部生に関しては、33人（63.46%）が「信用している」を、12人（23.08%）が「あまり信用しない」を選択した。次に留学院生は、8人（7

2.73%)が「信用している」を、2人(18.18%)が「あまり信用しない」を選択した。割合を踏まえると留学生は比較的
世界大学ランキングを信用しているようである。やはり、留学する際の大きな指標になったことからであろう。インタビューをしてみたところ、THEやQSなどは大学とは別の機関が実施しているため、1つの大学を持ち上げるなどの不公平なことはしないだろうから信用できるといった意見があった。地元学生に関しては、88人(45.83%)が「あまり信用しない」を、83人(43.23%)が「信用している」を選択した。地元院生は、5人(31.25%)が「あまり信用しない」を、4人(25%)が「信用し

ている」を選択し、地元生は一般的に世界大学ランキングに対して懐疑的であるということがわかった。これは、香港3大学で見られなかった傾向であり、やはり日本の学生というよりも日本全体が世界大学ランキングの在り方に問題を投げかけている。年度によって多少の変動はあるが、英米優位型は揺るがない結果に幻滅している人が多いだろう。これは、欧州諸国でも一部で見られることであり、U-Multirankという新設の大学ランキングが欧州委員から提唱されたのもうなずける。



第三章

～世界大学ランキング に対する他大学のとり くみ～

①香港大学文学部准教授 中野 嘉子先生 (文責 平松・小川)

今回の香港訪問で我々は香港大学文学部准教授の中野嘉子先生からお話を伺うことができた。教授は日本研究学科に所属しておられることもあり、日本の大学関係者と接する機会も多く、日本・香港の大学事情に精通しておられる。今回のインタビューでは香港大学の現状と海外から見た大阪大学について伺った。以下の文章は中野先生へのインタビューをもとに平松・小川が再構成したものである。

1. 香港大学と世界大学 学ランキング

「なぜ香港大学は(留学生達に)人気なのか。」これは実に単純で素朴な疑問だが、一方で香港大学における我々の調査は全てこ

こに終始するといっても過言ではないほど重要で、そして包括的な問いである。この疑問の答えとしてまず挙げられるのが「QS」や「Times Higher Education」に代表される「世界大学ランキング」において、香港大学が高く評価されていることであるだろう。例えば QS のランキングでは 26 位 Times のランキングにおいても 43 位と大阪大学 (QS51 位、TIMES144 位) のそれよりもかなり高く評価されている。世界中の学生が世界中の大学から自分の行きたい大学を一つだけ選ぶ時、様々な面でより水準の高い大学に行こうとするのは至極当然である。その際の判断基準の一つとして世界大学ランキングというものは非常に大きなウエイトを占めており、これは我々が現地で実施したアンケートの結果を見ても明らかである。学生にとって、世界大学ランキングは世界中の大学を相互比較する、もっとも手早い方策なのである。

さて、日本でも「一流」と呼ばれる大学はみなそうであるが、香港大学もまた世界で最も大学ランキングの順位を強く意識している大学の一つである。「ランキングの発表日には大学広報がパソコンの画面に張り付いて、学長室もピリピリしている」というのだから、大学組織全体が大学ランキングというものを非常に強く意識していると言えるだろう。というのも「香港大学は大学ランキングがあったからこそ、グローバル化がより進んだ大学であるといっても過言ではない」からだという。

大学ランキングが発表される以前、2000年頃の香港大学は「教員が昼間から学内の

バーで飲んでいるような」のんびりした大学で、学生はほとんど地元の香港人であった。その後、大学は教員の査定などを導入し、雰囲気は変わりつつあったが、それでも2004年に初めて大学ランキングが発表されたとき、「うちの大学のランクがこんなに高いわけではない」というのが当時の中野先生や同僚の感想だったそうだ。しかし、大学ランキングにおける予想外の高評価は香港大学に学生と教員の大幅な質の向上をもたらした。

中国本土では毎年夏に「全国大学統一入試」、通称「高考」と呼ばれる試験が行われる。これは日本でいうところのセンター試験のようなものである。元来、香港での入試制度は中国本土とは異なるため、香港で高考が実施されることは無い。それでも本土からの学生を受けるときには、まずその高考の成績を見て、面接をしてから合否を判断する。香港大学では本土から進学してくる学生を留学生として扱っており、全学生に占める中国本土からの留学生割合・その他諸外国からの留学生割合をそれぞれ10%（計20%）と定めている。本土からやってくる学生からすれば極めて狭き門。倍率は40倍近い。

世界大学ランキングがアジアでも定着してくるにつれて、本土から香港大学を志願する中国人留学生の数は急増し、もともと本土の北京大学や清華大学へ行っていた高考トップ層の学生たちでさえも、香港大に流れてくるようになったのだという。端的に言えば、ランキングの上昇により、高考トップ層を含む中国のスーパーエリートがこぞって香港大学への進学を目指すようにな

った、ということである。もちろん、中国のエリートが香港を目指すのには他にも理由がある。それは在住7年で香港という特別行政区の「永住権」を得られるということである。香港域内の大卒は、就業ビザがほぼ確実に取得できるのだ。

勿論、彼らにとって北京大学、清華大学へ進むことも大きなメリットがある。だが、中国本土よりも「自由」であり、また世界的な金融都市である香港の大学に進学し、その永住権を得ることは非常に大きな魅力なのである。しかし、中国人留学生が香港の大学を選ぶ傾向が大きくなってきたのは比較的最近であることを考えると、やはり大学ランキングが中国人留学生に与えるインパクトは非常に大きなものであるのではないかと考えるのが妥当であろう。

そしてもう一つ、香港大学が大学ランキングから恩恵を受けたのが、教員の大幅な質の向上である。

先述したように、1990年代の香港大学は非常に「のんびりした」大学であり、教員の意識もまちまちで、また教員も香港人以外は欧米人が多かった。その後大学の政策で雰囲気は次第に変わりつつあった。しかし **Times Higher Education** のランキングが発表され始めた21世紀初頭ごろ顕著に、それまでの「のんびりした」教員が定年退職で大学を去る一方、新しく公募に応募してくる人材のレベルが格段に上がったのだという。言い換えれば、香港大学はランキングにおいて「過大評価」されたことでそれまで香港大学への就職を考えなかったよう

な各国の秀才、具体的にいえば Harvard や Oxbridge で PhD を修得したような研究者からの応募数が増えてくるようになったのである。

さらにいえば、これは、各国の研究者が最も生産的な時期に香港大学という場所で研究を行うようになったことを意味する。また 21 世紀に入り研究を奨励する香港政庁の政策、そして大学の昇進・昇級の制度改革が後押しして、研究が活発に行われるようになった。もともと香港大学の教員が書く論文は英文が主で、論文が引用されやすい。しかし、こうして大学のランクが上がることで、教員の質が向上、それによってまた研究者の質が上昇、そして引用が増加するというモデルを香港大学は創り上げたのである。これは、特に理系分野では遥かに規模が小さい香港大学が大阪大学よりもランキングで高く評価されている一因であろう。

2 国際性と教員

国際性という面だけで見ても、香港大学の取り組みは大阪大学のそれとは比べ物にならないものがある。

教員だと 50 カ国以上、生徒は 80 カ国以上から集まっている。

全世界から集まった教員の中には過去に英語で授業を受けていた者が圧倒的に多く、彼らは英語での授業の展開の仕方を良く知っている。どうしても英語で授業をする際には母語で授業をするよりもハードルが上がってしまうが、どうやれば外国語でもしっかりした授業をすることができるのかと

いうことをよくわかっているということだ。また、過去に留学経験のある教員たちは「国境の越え方」、言い換えれば異国で学ぶ留学生の気持ちも知っている。彼ら自身がかつては 1 人の留学生だったのであるから。だからこそ彼らは留学生特有の問題にも柔軟に対応できるし、教育指導上の配慮もできる。彼らの存在は大学全体がグローバル化を推進する上で大きな力となっているのである。

ではどうすればそういった教員を集めることができるのだろうか。理由の一つは大学ランキングであることは先ほど述べた。しかし、大学ランキングの順位が高いだけで優秀な教員が集まるとは限らない。東大は香港大よりも上位にあるが教員の多くは日本人である。

大きな理由のひとつは給与面だろう。香港では政府が UGC（香港政府大学教育援助委員会）を通じて香港大学を含む香港の 9 つの大学に、とりわけ中でも香港大学には大量の公的資金を注入している。また寄付文化もある。こうした潤沢な資金を背景に、香港大学の給与水準は世界トップ水準にあるといわれている。日本の国立大学のように俸給表に基づいた給与システムではなく、いわゆる年俸制であるため一概にいくらとは言えないものの、「日本の大学へ移れば減給になる」というのは中野先生ご自身の言葉でもある。

もう一つの大きなポイントは外国人教員が大学経営に参加し、大学にコミットできるという点である。日本の大学ではごく一部の大学を除き、学長はもとより、学部レベルでも外国人教員が何らかの役職に就くこ

とはほとんどない。ところが、香港大学では「次の学長でさえ、これまで香港はおろか、アジアに縁もゆかりもない英国人が選ばれたのだという。かくいう中野先生も文学部で副学部長をしていらっしやっただのである。さらに、中野先生が副学部長をされている間は5人いる副学部長全員の国籍が違っていたというのだから、どれだけ日本の大学と香港大学との間に大学経営に対する認識の違いがあるのかがよくわかる。大学経営に参加するということは学部や学科の方向性を決められるということであり、これは教員がより一層の成果をあげようとするインセンティブになりうるし、「外国人」として大学で教えるにしても重要な役割を任せられる環境はそうでない環境よりも明らかに望ましく、大学に愛着を持ってコミットすることになる。

これまでの話を顧みると、香港大学とそこに勤める教授たちの間にはしっかりとした Give-Give の関係が成り立っていることがわかる。給与面だけを見ればどこの大学でも同じようにその関係が成立していると言えるであろうが、しかし香港大学は彼らの教員としての立場だけでなく、それと同時に研究者としての立場、大学を担う立場も尊重し、日本の大学よりも様々なチャンスを与え続けている。これらが世界中の研究者たちを惹きつける理由なのであろう。

3 香港という都市

大学の立地というのはその大学の価値を

語る上で非常に重要な要素である。大学は都市とともに成長するといった側面がある。香港という土地に立地していることから生じるメリットはなんだろうか。

そもそも、香港はかなり小さな島と中国大陸につながる半島の一部である。だが、その中に交通・物資が集中しており、中国経済発展の中心地であるとともに、大陸と世界とをつなぐゲートウェイである。就職に有利なのはもちろんのこと、教育の上でも「Experiential Learning (体験学習)」にもってこいの土地となっている。

大学での学びというのは必ずしも講義室の中だけで行われるべきではない。教室の外に出て、経済が動く現場や様々な職場に実際に赴き、教科書を読むだけでは分からない社会の実情、また激動の時代を生き抜くすべを学んでゆくことも必要である。そういった教育を実践するには、世界からヒト・モノ・カネが集まる香港はこれ以上ない場所である。世界中の大企業が香港に事務所を構え、街中に高層ビルがひしめきあい、香港大学から 20 分もいけばすぐに世界有数のオフィス街がある。百聞は一見に如かずというが、香港はこの「一见」に非常に適しており、それが行きやすい土地だといえよう。そして、そのような環境に惹かれて香港へ来る学生も非常に多い。

中野先生によれば、本土からくる学生は志が高く将来のビジョンがしっかりしており、貪欲に知識を求める学生が多いそうだ。彼らにすれば、自分のキャリアだけではなく、家族の生活もかかっているのだ。大学卒業には少しでも給与の高い仕事に就きたいと考えるのは当然である。(ちなみに、中国本土からの学生は圧倒的に経済・経営学部

を志望する学生が多く、特に上海では9割近いそうである) そのような学生たちが「Experiential Learning」に魅力を感じるか否かは考えるまでもない。英米一流大学への交換留学に香港大学の学位、一流企業でのインターン家経験があれば世界中のジョブマーケットで引っ張りダコになるのは想像に難くない。香港の大学は欧米に比べて留学費用が安いというのも、加えて魅力の一つなのであろう。

4 阪大へのメッセージ

では阪大は何をすればよいのだろうか。我々は当初、香港大学のランキング上位たる所以を学び、それをベンチマークとすることで大阪大学のランクを上昇させる術を見出そうとしていた。中野教授に対して「大阪大学がランキングを上げるために何をすればいいか。香港大学の模倣で順位は上がるのか。」ということ率直に尋ねたところ、「香港大学の模倣で多少順位は上がるかもしれないが、一方で失うものも大きいことをよく考えてほしい。」とのお答えが返ってきた。

「香港大学は、元植民地でグローバルにならざるをえなかった大学。一方、大阪大学は、地元根ざしてうまく機能している大学。大阪大が香港大をまねて英語を中心とした授業を展開すると、日本語で表現されていた繊細なニュアンスが消えてしまう。教員にしても学生にしても日本語でしか表現できないことで、阪大らしい授業なり、研究な

りを生んで来たはず」

要するに、大阪大学が、どんなに授業を英語で行い、教員に英語で論文を書かせる「国際化」を実施したところで、結局は「相手の土俵」勝負していることになり、それでは、英国風の「国際化」で一步も二歩も先を行く香港大学を追いかけることになる。それよりも大阪大学にとってふさわしい国際化とは何かという議論からはじめる必要があるだろう。

授業の英語化にしても、香港大学が、英語が日常的に話されている香港という土地の中にあるからこそ、英語での授業は意味を持つのだ。日本語が母語として話されている日本において英語使用を推進すること、教授はこれを「部分的引用」と表現されている。つまり、香港大学のマネをするなら「日常的に英語が話される言語環境、しいては元植民地の風土環境そのものまで模倣しますか?」ということであり、そうしなければ先述のような弊害が生まれてしまう。しかし、大阪大学は日本語が話される日本という国の大阪という都市にある地元根ざした大学なのである。

本格的な国際化を実施しようとするれば、外国人教員たちに昇進のチャンスや研究のための時間など、教員・研究者として成長できる十分な時間を与えねばならないし、外国人教員にそれを保証するという事はつまり大阪大学の経営に外国人が入ってくることを許すこと、しいては国立大学の経営方針を外国人が決定することを許すことに繋がる。また根本的な問題として、会議が日本語で行われる以上、英語話者の外国人教員たちが議論にきちんと参加し、大学にコ

ミットできるのかどうかということもある。これらの問題を解決しない限りは、外国人教員を多く迎え入れ、真の意味でのグローバル化を果たすことは難しいだろう。

外国人教員の受け入れと同じように議論される、日本人教員に英語で論文を書かせるという議論も大きな問題があると中野先生は指摘されている。

中野先生はアメリカのジョージタウン大学で PhD を取得されているが「アメリカで学位をとった私でさえ、英語で論文を書くのは血のにじむような苦しい作業」とおっしゃっているが、授業負担の多い日本人教員に英語論文を書かせたとき、時間的に彼らが同時に教員として良い仕事ができるのかということである。論文は引用されてこそそのものであり、より多く引用されるためには英語で書かなければならないというのが通論。本当に順位を上げたいなら、授業負担を減らせということである。また日本人教員に無理やり英語で授業をさせると、母国語で授業を行っていた時よりも先生ごとの授業の面白さはなくなってしまう可能性もあるという指摘もあった。「予備校などでもカリスマ講師がいるが、彼らが英語縛りで授業をしたとしたら、果たして授業は面白いだろうか？ 内容が専門的になる大学なら尚更のこと。母語でやるからこそ生き生きした授業ができるのではないかと。

これまでの話を鑑みると、香港大学をベンチマークとする事には必ず何らかの弊害が付きまってくるということが分かる。では、一体何がベストな方策であるのか。中

野先生は次のようにおっしゃっている。

「率直に言うと、ランキングを上げて 10 位以内に入ることが果たして大阪大学にとってよいことか、もう一度考えてみてほしい。確かに香港大学のランキングは高いが、一方で香港の学生には日本人学生が持つような、教養が無いように思える。たとえ日本人にとって中国の基本的な歴史に思えることでも、それを専攻する人しか知らない。それもそのはずで、広東語を母語とする彼らにとって、大学入学までに英語とマンダリン（中国語の標準語）の二つの「外国語」を身につけねばならない。二つの言葉を身につけるために『どこか』がすっぽりと抜け落ちてしまうのだ。他方で、文系であつても高度な数学をせねばならず、理系でも歴史を勉強せねばならない日本人学生には教養がある。また、芸術や繊細さなど日本にしかないものも多数ある。それらの総合力は資源であり、無駄にするべきではない。そもそも日本と香港で教員たちのタイプが異なり、いわゆる『スタートライン』が違う今、香港大学やその他ランキング上位の大学と同じことをしてもそれらの大学を超えることは出来ないだろう。古臭く聞こえるかもしれないが、日本人らしさ、しいては大阪大学らしさと向き合い、それを高めていくのが大切だろう。」と。

阪大がランキングを上げることが絶対の「目的」であるのならば、教授のこのお話はあまり役に立たないだろう。しかしランキングを上げることが、例えば優秀な留学生や教員たちの獲得・招致のための単なる「手段」であるなら、教授がおっしゃったようなことを一種の代替手段として実行することには大きな意味があるのではないかと。

別の言い方をすれば、ランキングの本質を目的から手段へ移行させることにより香港大学やその他のランキング上位の大学に追随することが可能になるのではないかと思う。これは決してランキングが上昇するという意味ではなく、むしろランキングに無関係の追随である。

「地域に生き、世界へ伸びる」“Local University”として、地域や教員間の結びつきを強くし、教員の大学や地域へのコミットの機会を増やすことによって、大学の質を向上させることは必要であろう。最後に、「大阪大学に行かなければ（大阪大学でしか）することのできない何か」を創出することも重要であると中野先生はおっしゃっている。それが大阪大学らしさの源に、すなわち海外の優れた学生・教員にとっての魅力になる。ランキング上昇を狙って国際化・英語化を率先して進めるのではなく、まずは大阪大学を Local な範囲で変えるところから始めようというわけだ。国内外から見ても、いい意味でエキゾチックな大阪大学を目指していくことが重要なのだ。

②香港科技大学・香港中文大学

各大学職員の方々

(文責 鈴木・小川)

我々は九月の香港滞在中に Natalie Chang さん、Samantha So さん(香港科技大学) Joey So さん、Jasmine Wong さん(香港中文大学)からお話を伺い、各大学が世界大学ランキングについてどのように考えているかなどについてお話を伺った。以下は両大学の回答をまとめたものである。

1. 世界大学ランキングについて

近年、様々な学術・商業機関が独自の基準を設け世界規模の大学ランキングを発表している。今回我々が取材を行った香港科技大学および香港中文大学はこの大学世界ランキングにおいて毎年高い評価を受けており、例えば2013年に発表された QS World University Rankings では香港科技大学は世界34位、香港中文大学は世界39位で、アジア部門において香港科技大学は1位、香港中文大学は7位であった。また、Times Higher Education World University Rankings において香港科技大学は世界57位、香港中文大学は世界109位、アジア部門において香港科技大学は9位、香港中文大学は12位と大阪大学を上回る順位であ

った。このようにランキングにおいて高評価を受けている香港科技大学・香港中文大学であるが、やはりランキングにおける順位やその変動については両大学とも非常に意識をしているようだ。すでに高い順位にあるにもかかわらず、なぜランキングを強く意識するのか。香港科技大学の Samantha So さんは「香港のマスメディアが大学ランキングにおける順位を強調し、この情報を元に地元学生が受験校を決める」ことをその理由の一つとして挙げる。当然、マスメディアからの情報、つまりその大学のイメージは香港の地元受験校を決める大きな決め手となる。地元学生がこのような情報を重視するようになった結果、大学ランキングでの順位が高いほど優秀な学生が集まることになり、優秀な学生たちを獲得するためには学生たちが意識する知名度の高い大学ランキングを大学側も意識せざるをえないという。(Samantha So さん) 両大学が特に意識をしていると名前を挙げたランキングは世界的にも知名度の高い Times Higher Education World University Rankings であった。その他にも、香港科技大学では SCI-mago Institutions Rankings や、Financial Times の発表する世界ビジネススクールランキングが意識している大学ランキングとして挙げられ、香港中文大学では QS World University Rankings や上海交通大学高等教育研究所の発表する Academic Ranking of World University が挙げられた。こういった大学世界ランキングに対する分析や対策のみを行う特別な部署はどちらの大学にも設置されていないものの、毎年大学ランキングが発表されるたびにどちらの大学に

おいても複数名の職員によって、綿密なデータ分析が行われ、対策が講じられているという。

2. 中国本土からの留学生について

Natalie Chang さん、Samantha So さん曰く、香港科技大学には中国本土の学生の上位 5%に入り、大学の課す面接試験を潜り抜けた香港現地の学生よりも「優秀で学業熱心な」中国本土からの留学生が集まっているという。こういった学生たちがわざわざ中国本土から香港科技大学へと集まってくることには理由があり、お二人はそのうちのいくつかの理由を教えてくださいました。一つ目の理由としては奨学金制度が充実していることが挙げられた。香港科技大学をはじめとし、香港の大学には政府からの補助や産業界からの寄付によって構成される中国本土からの留学生のための奨学金制度があり、成績優秀者ほどこの奨学金は受けやすいのだという。(Samantha So さん) こういった奨学金制度が充実しているおかげで中国本土よりも物価の高い香港に留学することができる学生もいるのだろう。二つ目には香港の大学を卒業すると中国本土出身であっても香港で職を得やすくなるという理由が挙げられた。(Samantha So さん) 実際、香港科技大学で卒業した中国本土生のうち 30~40%の学生が中国本土へは帰国せずに香港で就職している(2012 年)。中国経済の中心地の一つである香港で就職し、中国本土で就職するよりも高い給与を得る。香港で成功して金持ちになる。こうい

った野望を抱いて香港の大学を目指す学生も少なくないのだという。さらには就職活動のために卒業後も一年間分のビザが中国本土からの留学生のために発行されるというから驚きだ。こういった政府ぐるみの留学生に対する支援も中国本土から留学生を惹きつける理由の一つなのかもしれない。三つ目には香港の土地柄があげられた。香港は国際都市であり、地理的にも中国本土と近く文化的な差異が少ない。このことも中国本土からの留学生が集まる理由になっているという。国際都市である香港では中国本土よりも海外留学や、海外での就職が容易になる。海外進出をねらう学生にとって香港は格好の進学先となるといえよう。

3. 教員について

香港科技大学や香港中文大学にはアジアをはじめとし、北米、ヨーロッパなど世界各地から優秀な教員が集まっているが、彼らを香港へと惹きつける魅力は大きく分けて3つある。香港中文大学の Joey So さんは教員の給与が高いこと、言語面での不自由のなさを挙げ、香港科技大学の Samantha So さんは学問の自由をその理由として挙げた。まず教員の給与に関してだが、香港中文大学に限らず香港の大学は香港政府から十分な資金援助を受けているため、教員に高給を払うことができる。二つ目に言語面における不自由のなさについてであるが、香港では中国語の他に英語が公用語として用いられており、教員が英語を話すことができれば生活に不自由を感じるものが少ない。英国領であった過去を持つ香港の英語教育はかなりしっかりと行われるものであ

り、大学の授業では英語が使用されている。都市部や中規模以上の商業施設であれば大学外の人間にも英語が通じ、英語話者にとっては大学においても日常生活においても言語面に不便を感じることはほぼない。このように国際共通語である英語が通じる環境が整っているため、教員たちは赴任先として香港を選ぶことができるのである。最後に学問の自由についてであるが、香港の大学においては学問の自由が認められており、教員が行いたいと思う研究を極めて自由に行うことができるそうだ。加えて、前述したとおり香港の大学は香港政府より十分な資金援助を受けているため、研究に使用する機器等の供給などその研究に対する全面的なサポートを大学から得ることができる。こういった研究に対する理解とサポートを求めて香港の大学に来る教員も少なくないという。また、博士や TA (teaching assistant) は香港の大学でキャリアを積むことによって中国本土の大学の研究機関へと進むことができる。つまり、香港の大学が博士や TA の中国本土の大学への橋渡しを担っているのである。そのため、香港の大学に在籍することは将来中国本土の大学において研究を行いたいと考える博士や TA にとって大きな魅力となる。将来中国本土の大学へ勤務することを目的に香港の大学に博士や TA も集まるのである。

4. 博士課程の学生について

Times Higher Education World University Rankings のように、学士号取

得者数に対する博士号取得者数や職員数に対する博士号取得者数を評価する大学ランキングがある。この評価基準では学士号取得者数に対する博士号取得者数や職員数に対する博士号取得者数が多いと評価がよくなる。そのため、日本では文部科学省が主体となって博士号取得者数を増やそうとする動きがあるのだが、香港科技大学や香港中文大学にも同じような動きはあるのだろうか。Times Higher Education World University Rankings を非常に意識しているというからには大学側が主体となって博士課程の学生数を増やそうとしているのではないかと思われたが、どちらの大学においてもそのような取り組みは行っていないという。というのも、香港においては香港政府が博士課程の学生を増やす取り組みを行っているため、大学が主体となった博士課程の学生数を増やす取り組みは行う必要がないからだという。具体的には、香港政府は学生に学士号から博士号までのすべての学位を香港の大学で取得してもらうために奨学金の提供を行っている。この取り組みの結果、博士課程への進学率は年々上昇しており、香港科技大学においては学部卒業後の大学院へ進学率は60%（留学含む）となった。

③京都大学工学研究科 榎木哲夫教授(理事補)

(文責 小川・鈴木)

数ある日本の国立大学の中でも、京都大学はその取り組みが(良くも悪くも)最も注目されている大学である。「自由の校風」と呼ばれる独特な校風の中で、松本紘京大総長はトップダウンであらゆる改革を実行しようとしている。中でも一般教養教育を「国際高等教育院」に一元化し、外国人教員を大量採用したうえで、一般教養の授業ほぼすべてを英語で実施しようとする計画は学外でも大きな話題となり、学内でも賛否両論が渦巻いているようだ。

今回は、京都大学の理事補で、京都大学で世界大学ランキングの分析をされている榎木哲夫工学研究科教授からお話を伺うことができた。

1. 京都大学の大学 世界ランキングに対 する見解 —伝統に 見合う順位を—

「長い歴史と輝かしい伝統を持つ京都大学がなぜ世界ランキングのようなものを気にする必要があるのか」(中野嘉子香港大准教授)という声がある。

榎木先生は「そのような評価を頂いてい

るのは非常にありがたい」と前置きしたうえで、京都大学の見解を次のように述べられている。「確かに、京都大学は校風上、大学は学問や研究を行うところであるので世界大学ランキングなどの外部からの評価に頭を悩ませる必要はなく、研究結果は自分の研究領域で認められさえすればよい、と考える教員は多い。ましてや、大学ランキングというのは、全く異なる歴史や伝統、政治的・経済的・文化的バックグラウンドを持つ大学を同じ指標で比べようとしており、それ自体にかなり無理があるのは言うまでもない。

しかしながら、一昔前であれば外部からの評価など気にする必要のなかった京都大学であっても、大学の研究成果が何らかの形で社会に貢献することを強く望まれている。時代の流れと言っても差支えないであろう。そういった流れの中で、京都大学にとっても、大学ランキングというのも到底無視できなくなりつつある。社会から見て大学がどんな研究をしているのかがわかりにくい現状においては、大学ランキングは一般の人々にとって大学がどういった価値を持つのかを判断する非常に重要な基準の一つとなっている。そういった基準を京都大学としてそれを無下に扱うことはできない、ということなのである。世界の大学の見方においても同様の傾向が見られ、留学先や職場としての大学を世界大学ランキングの順位を基準として考える外国人も増加している。言い換えれば、いかに良い研究を行っていても世界大学ランキングでの順位が低ければ、赴任先や留学先として京都大学を選んでもらえないというケースが出始めているということだ。現在のままでは世界大学ラ

ンキングでの順位の低さが補助金の確保や優秀な留学生・教授の獲得に悪影響を及ぼし、それが京都大学の発展を妨げ、これまで培ってきた輝かしい伝統を傷つける恐れがある。世界大学ランキングには問題点も多いが、これに大学として対策を行うことが必要である」

これは京都大学の大学ランキングに対する見解とみていいだろう。榎木先生の語り口からは京都大学が **Times Higher Education** のランキングで 50 位程度に甘んじていることに対するはつきりとした危機感が感じられた。榎木先生が直接おっしゃったわけではないが、京都大学の理事補が大学ランキングをここまで考えているのは安倍総理が「トップ 100 に 10 校」を宣言したことと無関係ではないだろう。一国の首相がこのようなことを成長戦略の一つとして掲げている以上は大学の予算などにもランキングの順位が当然反映されてくると予想するのはそう難しいことではない。勿論、京都大学は少なくとも **Times Higher Education** のランキングではトップ 100 に入っているわけではあるが、「ランキングともきちっと向かいあってゆかねばならない」というきっちりした意識が京都大学にはあるのではないかと思われる。たとえば、京都大学の学生が「大学ランキング対策として阪大がどんなことをしているのか伺いたい」と問い合わせがあったとき、それにきちんと応対できる幹部が大阪大学にいたのだろうか。

2. 綿密な分析を基 に世界トップ 10 の

大学を目指す —ト ップ 10 を目指せる 大学だけがトップ 1 0 を目指す—

榎木先生のインタビューにおいて、最も印象に残ったのは、「トップ 10 を目指せる大学だけがトップ 10 を目指す」という言葉であった。松本紘総長が記者会見でおっしゃった言葉のようだ。

京都大学が「2x by2020」と呼ばれる国際戦略を発表し、「世界トップ 10」を目指すと発表したのは昨年（2013 年）6 月のことである。（ちなみに東京工業大学の三島学長は 10 月に同じく「世界トップ 10」入りを目指すことを発表した）つまり、京都大学が「世界トップ 10」を目指すことを発表した時点で、大阪大学が「世界トップ 10」を公言していることは知っていたということである。その上で「トップ 10 を目指せる大学だけがトップ 10 を目指す」という言葉があったのだ。京都大学がここまで自信を持つ理由は何なのだろうか。

京都大学が世界大学ランキング対策として最初に行ったことは「世界大学ランキングデータの徹底的な分析」であったそう。ランキングの順位を上げるといってもただ漫然と対策らしいことを進めればいいのではない。どのようなランキングにおいてどの指標のどの項目の点数を上げるかということ意識していなければ、なかなか順位はあがらない。そこで、大学の現状を知るために、「全学部の評価に関するデータを

綿密に分析し、どの学部がどういった評価基準でどのように評価されているのかということ」を調べ、さらにどの程度、「京都大学のアクティビティが評価に結びついているのか」、「どのようにすればそのアクティビティが更なる評価に結びつくのか」、「どの程度のアクティビティが評価に結びつけばどれほど順位が上昇するのか」を詳細に、様々な角度からシミュレーションを行ったそうである。そのシミュレーションは「お見せできない」とのことだったが、その結果によれば、京都大学は研究の「見せ方」がうまくできていないために、現在の順位にとどまっているだけであり、現時点で世界トップ10にランクインする実力を持っているという結果が出ているようだ。(具体的にいう研究の「見せ方」については次節で示す) 京都大学が自らを世界トップ10と評価される実力を持った大学であると確信しているのは、榎木教授の口調からも明らかであったし、「トップ10を目指せる大学だけがトップ10を目指す」という松本総長の言葉にもその自信がにじみ出ている。

エビデンスベースの議論があったからこそ、京都大学はここまで大胆に「世界トップ10」を宣言し、あらゆる批判にひるむことなく改革を実行しようとしていると考えるべきだろう。

3. 世界トップ10 へ向けて

では京都大学は「トップ10を狙える」という状態から、「トップ10に入る」というところまでどうやって引き上げようと考えているのか。もちろん、「国際化」というの

は重要なキーワードであろう。しかし、榎木先生は「近年順位を上げてきている香港・シンガポールの大学としてのあり方や歴史は京都大学のそれとは全く異なる。それゆえ、香港やシンガポールの大学が順位をめざましく上げてきているからといって、これらの大学のありかたを京都大学のベンチマークとするのは適切ではない」とおっしゃっている。例えば、ランキングにおいて低い国際性の点数をあげようと、授業をすべて英語で行ったとしても、日本人の教授が無理やり英語で話すことになり、授業の質を下げ、学生の学力向上には役立たないということである。ましてや「自由の校風」を謳う京都大学においてそのようなことは現実的な議論ではない。

そこで、京都大学は京都大学にあった対策を模索した上でその対策をとってゆく必要がある。京都大学が現在ランキング対策としてとっているのは、以下三つの対策であるという。

①継続的な大学ランキングの分析

当たり前のことだが、大学ランキングが京都大学に下す評価は毎年変化する。毎年データ分析を行い、京都大学の研究成果がどのように評価が結びついているか、どの目標順位まであとどの程度評価を結びつければ良いのかを把握している、とのことである。取材した私たちがあくまでも他大学の学生ということもあつてか、あまり詳しいことは教えていただけなかった。

②教授・研究員の意識改革

前述したとおり京都大学には世界大学ランキングなどの評価にあまり気をかけない教員の方もいらっしゃるようだ。榎木先生は「世界大学ランキングの評価に関心が低

い教員の意識改革を行い、全学的に対策を進めていくことが必要」とおっしゃっている。具体的な例としては、同じ論文を投稿するにしてもどのジャーナルに載せるのか、といったことに大学本部が口を挟む可能性もあるということであろう。特定のランキングは特定の論文データベースと結びついている（Times Higher Education のランキングはトムソン・ロイターのデータベースが、QS のランキングにおいてはエルゼビア社のデータベースが用いられている）ため、そういった一見小さいことでも大学全体としては非常に大きな問題となりうるのである。

③外国人教員への対応

どの大学もそうであろうが、この点においては京都大学もかなり苦勞しているようである。というのも、ランキングの順位を上げるためだけでなく、大学の教育・研究の質を高めるためには、カリフォルニア工科大学やハーバード大学、オックスフォード大学など文字通り「世界トップ10」の大学から研究者を招聘することも必要だ。しかし、一流の教員を招聘する際には、(学問分野にもよるが) 海外の他大学のように多額の俸給を彼らに提示しなければならない。とはいえ、現在の国立大学教員の給与システムは俸給制が採用されており、どんなに優秀な研究者でも俸給表以上の給料を与えることはかなり難しい。この点について、榎木先生は「京都大学がこれまで培ってきた伝統や名声を活用したい」という答えが返ってきた。要するに「京都大学教授」という社会的ステータスを薄給の穴埋めにするということだろうか。

加えて、榎木先生がおっしゃったのは、外

国人研究者に対する給与面以外でのサポートの充実である。日本で生活する際の不安を考慮して、教員本人はもちろん、その家族も快適に京都で生活できるよう、言語面のサポートや、場合によっては教員の子どもの学校にまでサポートの幅を広げることも検討しているという。

4. 外国人教員の大量採用について—キャンパスの雰囲気と学生の意識を高める—

京都大学では現在、外国人教員を大量採用し、一般教養の授業に関しては、原則として授業を英語で行うことが検討されている。これについては京都大学内部だけにとどまらず、学外でも波紋を呼んだ。これに対しては批判的な意見もかなり多く、「京大は何をやっているんだ」といったような意見まで見られた。ランキング対策のためにそこまでやる必要があるのか、と。

このような意見に対して、榎木先生は「これは入学時には高い学生の英語力が卒業時には低下していることへの対策として立てられた計画であり、世界大学ランキング対策となることを意図されて立てられたものではない。」という回答であった。もちろんすべての授業を英語で行うという意味ではなく、繊細な議論や思考力を養う授業は従来通り日本語を使用する、ということだ。また、外国人教員を採用し英語を用いた授業を導入することで、授業中に生徒と教

授のやり取りがほとんどない現在の授業から、欧米のように対話のある授業スタイル—例えば教授がちょっとしたことであっても生徒に質問を投げかけ、生徒がその質問に答えられるような授業—へとより容易に移行することができる、ということも授業の英語化が検討される一因となっているようだ。英語で受けることのできる授業が増え、さらに授業形式も国際標準的なものと

なれば、海外の学生が京都大学を留学先としてより選びやすくなるというのもあるだろう。加えて外国人教員が増えることで、必然的に大学で英語の議論が交わされることが多くなることが予想される。この計画に関しては大学ランキング対策というよりは、京都大学の「グローバルキャンパス」構築へ向けた一手というべきだろう。

第四章 提言

(文責 小川)

大阪大学は平野俊夫総長の就任以来、「22世紀に輝く」そして「(創立100周年を迎える)2031年までに世界10指入り」を掲げ、数々の改革を実施してきた。改革の範囲は部局を横断する博士課程プログラムの設置や国際化推進にまで広くおよび、中でも世界水準の研究を行う研究者に特別手当を支給する「特別教授」制度は他大学からも「本学でも参考にしたい」(樫木哲夫京大理事補)といった声上がるなど、日本の大学の中でも先進的な取り組みであるといえよう。つい最近でも一部教員の年俸制導入を発表するなど立て続けに改革案が放たれている。

しかし現状では、まだ一連の改革の成果が顕著に表れているとまでは言えないのではなかろうか。我々が取材した香港でも「(日本に行きたいという学生に)大阪大学を勧める理由がない」(中野嘉子香港大准教授)といった厳しい声も聞かれた。海外から見ると、日本の大学の中でも、首都に位置し、世界ランキングでも一定の評価を得ている東京大学や世界有数の文化都市に位置し、独特の学風を有する京都大学と比して、大阪大学の個性というのは埋もれがちであるようだ。

現在、大阪大学が行っている一連の改革に目を向けても、東北大学が公表している「井上プラン・里見ビジョン」および京都大学の「2x by2020」と似たりよったりなところがあり、少なくとも文部科学省の意向に

沿って実施されているように見える。

我々は学生という立場を大いに利用し、国内外の教員、学生から率直な意見を聞くことができた。紙面の都合上そのすべてを掲載することはできないが、大阪大学が「22世紀に輝く」ために、一学生の立場からではあるが以下の提言をしたい。

まず、第一項では大学ランキングという切り口から大阪大学が「22世紀に輝く」ための提言を行う。大学ランキングは文部科学省が先日発表した「国立大学改革プラン」においても触れられていることを鑑みても、その重要性は近年ますます高まりつつある。大学ランキングという切り口から、大阪大学が「世界へ伸びる」ために何が必要かを提言する。

第二項では、大学ランキングを通じて得られた知見に基づいて、グローバル時代において「地域に生きる」ことの重要性を提言したい。「世界に伸びる」ためには「地域に生きる」ことが必要であるということだ。

最後に第三項では大阪大学が「22世紀に輝く」ための個性について述べる。

1 大学ランキングについて

～「世界へ伸びる」ために～

まず、「大学ランキング」に関して述べたい。大阪大学が「唯一無二の個性を生み出さねばならない」ということを香港大学の中野先生に話を伺ったページに書いた。しかし、どんなに素晴らしい唯一無二の魅力が大阪大学にあっても、それを世界に発信できなければ意味がない。そしてまさに「発信力の弱さ」が現在の大阪大

学の弱点でもあるのだ。

平野俊夫総長は現在、大阪大学を世界 10 指の大学にすることを目標に掲げているが、すでに大阪大学が世界 10 指、ないし世界 5 指に入っている分野がすでにある。その一つが免疫学だ。戦後、大阪大学に微生物研究所が創設されて以来、大阪大学の免疫学研究は日本のみならず世界の最先端を走り続けてきた。平野総長自身も国際日本賞をはじめとして多くの賞を受賞されている、免疫学の世界的権威だ。しかし、「大阪大学が免疫学の分野で世界最先端を走っている」という事実を大阪大学の学生や、日本国内外の人も含め、いったいどれだけの人が知っているであろうか。

関西地域では京都大学と並んで大変大きなプレゼンスを持つ大阪大学も、世界的にみれば「一地方都市に所在する一国立大学」にすぎなかったのではなかろうか。香港大学の中野先生が大阪大学を”Local University”と呼んだのはそのわかりやすい例である。そして、これを書いている私自身、香港大学では留学生のパーティーに参加し、中国をはじめとする世界中の学生と話をすることができたが“Osaka University”の名を知っている学生はほとんどいなかった。

とはいえ、研究水準は高くとも東大や京大のようにノーベル賞も出ていない大学が世界へその魅力を発信するにはどうすればよいのか。その答えの一つとして挙げられるのが、大学ランキングである。Times Higher Education や QS 社が発表しているランキングを見てもわかるように、大学ランキングというものは大学と

いうそもそも横一線で比べるのが非常に難しい組織に無理矢理、得点を与えて、順番付けしたものに過ぎない。しかし、その影響力は決して小さいものではない。

我々が香港で行った調査（第 2 章参照）をみても、海外の学生にとって大学ランキングはその進路選びに多大な影響を与えている。これはつまり、どんなに大阪大学の研究教育水準が高くとも、ランキングの順位が低ければ、進路先として大阪大学を選んでもらえる可能性が減少するということだ。

加えて、文部科学省が「国立大学改革プラン」の中で、世界大学ランキングにおいて「トップ 100 に 10 校」という目標掲げた以上、いくら大阪大学といえども、その順位が芳しくなければ予算の配分にも影響が出る可能性が大きい。大学ランキングがどんなにくだらないものであったとしても、これから大阪大学が飛躍していくためには、その存在を無視することはできないのだ。

そして Times Higher Education のランキングは Oxbridge や Harvard などの英米名門大学が上位になるように設計されたものともいわれる。ランキングにおいて評価されるのは英語で書かれた論文だけであるし、Reputation（世評）の項目においてもやはり世界的に知名度の高い英米の名門大学は高評価を得ている。これはつまり、大阪大学をはじめとする日本の大学には大変不利な指標であるということだ。とはいえこれは裏を返せば「1 ランキングの癖」というものさえ見抜き、それに対応さえできれば、順位を上昇させることは可能である。今回インタビ

ューにご協力いただいた大学教員の先生の中にも「計量書誌学的に見て、阪大のランクとしては 40~50 位が妥当ではないか」（京都大学依田高典教授）といった声を頂いたが、まず大阪大学が目指すべきは Times Higher Education のランキングにおいて、「妥当な」ランクが得られるように努力することであろう。

1-1 大学ランキング分析の徹底

「敵を知り己を知れば百戦危うからず」という有名な言葉があるが、大学ランキングという観点から見ると大阪大学は「敵を知る」ことも「己を知る」こともできていないのではなかろうか。

現在、大阪大学で大学ランキングの分析に関わっている部署は、私の知る限りでは基本的に国際交流オフィスのみである。大学ランキングとは、大学における研究が様々な観点から評価されるものであり、シミュレーション分析まで含めた様々な観点からの分析が必要である。特に文部科学省の「国立大学改革プラン」でも参照されている Times Higher Education のランキングにおいては、香港やシンガポールといった英語圏の大学ならいざ知らず、大阪大学のように黙っていれば過小評価されてしまうような大学はランキングにおいて存在感を示すためにはそれなりの対策がまずは必要となるであろう。

大学ランキングは大学を様々な数字の中で評価している。一つの大学をその歴

史や伝統を無視して、数字だけで評価することは確かに馬鹿げたことではあるが、逆にいえば、大学ランキングはその大学の長所・短所を目に見える数字という形で提供している。これらをうまく利用したのが香港大学である。香港大学は当初大学ランキングにおいて「過大評価」されたが、その大学ランキングを分析して、その順位に見合うように、人事評価制度を改革したり、中国大陸の大学との差別化等を実施することで現在のプレゼンスを手に入れたのである。

大学ランキングにおける数字をしっかりとした体制の下で分析し、それに基づいて大学改革を実施していくことは今後、大阪大学が世界における競争を生き抜き、「世界 10 指」に入るための道標となるであろう。そのためにもまず、各ランキングを分析するために専門家を集めて、学内でしっかりとした分析をするべきである。京都大学総長が「世界トップ 10 を目指せる大学だけがトップ 10 を目指す」（=京都大学は世界トップ 10 になれる）とまで言い切ったのは、明らかに今回の調査で私が取材した榎木教授をはじめとする京都大学の先生方がしっかりとした大学ランキングに対する調査を学内で行っていたからであろう。大阪大学が「22 世紀に輝く」ための指標として大学ランキングを活用するためにも、その分析にさらに力を入れるべきだ。

1-2 学内交流及び海外拠点の強化

2009年、大阪大学は大阪外国語大学を吸収し、外国語学部を新設した。これは大阪大学にとって、新たな「世界との窓口」を手に入れたことになる。

少なくとも **Times Higher Education** の大学ランキングという観点で見れば大阪大学が外国語学部を手に入れたことは **Reputation** の上昇という面で価値あるものでなくてはならない。

というのも同ランキングや、**QS** 社のランキングにおいては **Reputation** つまり「世界からどう見られているのか」ということが極めて重要になる。第1章「大阪大学の **Times Higher Education** における現状」において指摘したように、大阪大学が非常に低い評価しか得られていない **International Outlook** の項目よりも **Reputation** の項目の方がランキング内における比重が高く、この項目で高得点を得ることがランクの飛躍的な上昇をもたらす。言い換えれば、**Reputation** の項目で高得点をとることなしに大学ランキングで高い順位をとることは難しい。**QS** 社が発表するランキングにおいても評価項目のうちの 50%が **Reputation** に置かれており、**Reputation** の重要性は変わらない。

そして、現在外国語学部には非常に多くの国の言語が研究・教育されているが、これはつまり、大阪大学がそれらの国々と関係を持っているということである。「大阪大学がいかに素晴らしい大学であるのか」を世界に発信するためには、こういった外国語学部が持つコネクションを利用することが非常に有効なのではなからうか。そのため、現在箕面キャンパス

にある外国語学部を豊中キャンパスあるいは吹田キャンパスに移転することまで含めて検討し、外国語学部と他学部の交流を強化して、大阪大学の魅力を世界へ発信しようとする努力が必要である。

そして、もう一つ大阪大学の魅力を世界へ発信できる核となりうるのは海外拠点である。現在、大阪大学はグローニンゲン（オランダ）・サンフランシスコ（アメリカ）・バンコク（タイ）そして上海（中国）に海外拠点を持っているが、海外拠点は質的にも量的にも更なる拡大が必要だと考えられる。

海外拠点は現地で学生を集めるのはもちろんのこと、現地で大阪大学をアピールできる最前線の基地である。言うまでもなく、大学ランキングにおける **Reputation** は知名度のある大学の方が有利であり、長期的な視野に立って海外で大阪大学の存在感を示すためにも、現在縮小傾向にあるといわれる海外拠点は大幅に強化すべきである。特に、大阪大学が研究型大学（**Research University**）として飛躍するためには博士課程の学生を今まで以上に獲得せねばならないが、その過程で中国人の優秀な学生を確保することが必要不可欠である。中国人学生を留学生として迎えることはランキングにも良い影響があり、四つある拠点の中でも上海の拠点を強化することが重要になってくるのではないかと思われる。外国語学部を通じて大阪大学の魅力を世界へ発信すること、そして海外拠点の強化が、今後の大阪大学に **Reputation** のパートでの高得点をもたらし、大学ランキングにおける順位の向上、さらには、大阪大学

が世界へ飛躍するための一助となるだろう。

2. 「地域に生きる」こと

「大学ランキング分析」の項でも示したように、特に Times Higher Education が発表しているランキングは英米の歴史ある大学に極めて有利な指標である。また大学そのものの構造も評価の対象とされており、もし大阪大学が本気で 2031 年までに大学ランキングにおいて、世界で 10 指をめざそうとするのであれば、学部の定員を大幅に削減するといったことも検討せねばならない。

だが、それは極めて非現実的な議論であるし、社会が大阪大学に望んでいることではないであろう。また大阪大学がどれだけ国際化を推進しても、大阪という都市が香港・シンガポールと並ぶ国際都市であるとはいえない以上、香港大学やシンガポール国立大学に比べて、国際化の面でどうしても遅れをとってしまうのはある程度はどうしようもない部分があるのではないかと思われる。今、大阪大学が考えるべきは東大にも京大にも Ivy league にも Oxbridge にもない唯一無二の大阪大学の個性を生み出し、それを世界に発信することである。

目指すべきは世界大学ランキングという「相手の土俵」で世界トップクラスの大学を目指すことではなく、22 世紀の研究者・学生に「大阪大学に行きたい」と言わせることだ。もちろん、その過程で、大学ランキングにおいてなるべく良い順位をとることも必要になってくることになるが、それはあくまでも「22 世紀に輝く」ための過程とす

るべきである。

そして、私は大阪大学が「世界 10 指に入る」つまり「世界へ伸びる」ために必要な個性は「地域に生きる」ことにあるのではないかと考えた。大阪大学が「世界へ伸びよう」とするとき、それを大阪大学の力だけで実現するのは不可能である。大阪大学の飛躍を可能にするのはまさに「地域に生きる」こと、言い換えれば社会との積極的な交流ではなかろうか。地域に根差すことで、大阪大学の個性を創出し、それをもって世界と勝負する。これこそが大阪大学としてのあるべき姿ではなかろうか。

このような認識を踏まえて、この項では、以下の提言をしたい。

2-1 外部資金の受け入れ

あまり良い言葉ではないが「地獄の沙汰も金次第」という言葉がある。要するに資金がなくては何もできないということだ。国際化の推進にしても、世界トップクラスの研究者を招へいするにしてもまずは資金がなければはじまらない。

私たちが香港の大学を訪問したとき、まず目に留まったのはキャンパス内の建物にいちいち「人名」がつけられていることであった。例えば我々が今回訪問した香港大学の中野嘉子先生の研究室は Run Run Shaw Tower というところにある。これは香港の経済界で財をなした富豪からの寄付によって建造されたものであるそうだ。これは何も香港大学に限ったことではなく、香港

科技大学、香港中文大学においても同じことが見られた。

そして、香港の大学と同じことは、大阪大学の原点とでもいうべき中之島においても見られる。「淀屋橋」は江戸時代コメの取引で莫大な財を成した豪商「淀屋」がその橋を建造したことを名前の由来にしている。

もちろん大阪大学は国立大学であるから、図書館や校舎の名前に人名が入るなどというと学内外で議論を呼ぶ可能性はある。

しかし、今後大阪大学が国内外の大学と差別化を図り、「22世紀」に輝くためにはどうしても自由に使える資金が必要となる。

特に、これは大学ランキングにおいても、非常に重要なことであるが、優秀な研究者を集めることは大学として必要不可欠である。そして、優秀な研究者を集めるためには現在の俸給表に基づく大阪大学（日本の国立大学の）教員の給与は「低すぎる」というのが現実ではなかろうか。実際、私は多くの大学関係者からお話を伺う中でそのような話を何度も何度も聞いた。現実的には、世界的に活躍する研究者を招へいするためには、現在の特別教授の報酬、年収にして2000万円程度は最低ラインとして必要となるであろう。そのためにはきっちりとした人事評価制度とともにそれだけの資金をコンスタントに捻出できるだけの財政的基盤が必要となるのは

明らかだ。

昨年の待兼祭においては「ワンコイン募金」と称して、100億円を目標に500円の募金を学生や来場者の方から集めるといったことがなされていたが、学内での募金だけで果たして十分な財源を集めることが可能であろうか。確かに大阪大学がさまざまな改革を実施していく上で文部科学省からの予算以外で100億円規模の基金があれば、理想的であるが、それをすべて学内からの寄付で賄うことは極めて難しいというべきであろう。それよりも、香港大学のように学内の建造物のネーミングライツを個人（もしくは企業）に販売することで資金を得たり、あるいは学内へ民間企業の研究所の誘致を促進する、特許料収入をさらにのばすといった形の方がより確実に多くの資金を獲得できるのではなかろうか。また、寄付を呼びかけるという形をとるにしても、大阪府や豊中市・吹田市・箕面市といった行政機関にも協力を依頼し、行政機関の広報誌やホームページ等で寄付を呼びかける方がより多くの資金を集めることができるであろう。

2-2 地元自治体との連携

近年、大学ランキングにおいて目覚ましい成長を見せているのは、中国や韓国の比較的歴史の浅い大学が多い。その中でも群を抜いているの

は香港およびシンガポールの大学であろう。今回我々が訪問した大学の一つである香港科技大学などは創立が1992年であり、適塾・懐徳堂以来の伝統を持つ大阪大学から見れば赤子のような存在だ。しかし、それでもFinancial Timesが発表するMBAのランキングでは、香港科技大学の経営大学院がマサチューセッツ工科大学のスローン経営大学院を抑えて第9位にランクインしている。

この背景にはもちろん香港政府による強力な資金的バックアップもあるのだが、それとともに挙げられるのは香港の都市としての成長ではなからうか。

今回我々が訪問した香港の大学はそれぞれが国際性というものを、大学の特色の一つとして取り入れているが、それは香港という都市の特色でもある。香港という都市が国際金融都市として成長していくにつれて、それに伴って香港の大学も成長できたのではあるまいか。香港大学・香港科技大学・香港中文大学のビジネススクールがFinancial Timesのランキングでどれもトップ10していることはその一例である。

残念ながら近年では関西の有力企業がその本社機能を東京へ移すなど、大阪経済圏の地盤沈下が叫ばれつつある。こういった環境の中で、大阪大学は”Live Locally”を実践する形として、地元自治体や大阪府との連携をさらに進めるべきではなからうか。橋下徹大阪市長（2014年2月現在）

は大阪の復権を掲げて大阪都構想を打ち出している。誰が大阪のリーダーであっても在阪の大学として、大阪の更なる発展のために大阪大学ができることはもっと多いはずである。具体的には、大阪という都市のありかたについて、大阪大学の教員あるいは学生から積極的に提言を行ったりすることが考えられるだろう。

大阪という都市は、近年日本にとってますます経済的に重要な位置を占めるようになってきた東アジアと至近する位置にある。この地の利を生かすことを大阪大学としても、また大阪という都市としても考えていくべきである。いずれにせよ、もっと緊密に自治体と連携をとっていくことが必要なのではなからうか。そして自治体と積極的に交流を行っていき、新たな大阪大学の在り方を模索することも大阪大学の新たな強みを生み出す契機となるであろう。

3 唯一無二の個性

この章のまとめとして、大阪大学が目指すべき方向性に関して論じたい。

大阪大学が世界10指の大学になるために必要なこと、それは優秀な研究者、あるいは学生に「どうしても大阪大学にいきたい」と思わせられるような魅力である。個性とも言えるだろう。

ヒト・モノ・カネが国境を越えて激しく移動する大きなうねりの中で、いったいどんな個性が必要なのか。私は、いま大阪大学が考えるべきは、端的にい

えば、“Live Locally, Grow Globally”の実践であろう。

日本の行政を支える最高学府として創設された東京大学、それに対抗して自由闊達を気風とする京都大学。それらに対して、近畿圏に帝国大学は不要との声を押し切って、民間からの資金をもとに創設されたのが現在の大阪大学である。そういった歴史的背景の中で医学や工学、経済学といったいわゆる実学と呼ばれる分野の中で大阪大学は特に強みを発揮してきた。こういった背景を持つ大学はそう多くはないであろうし、ましてや総合大学としては稀有な存在であろう。

大阪大学のこのようなプラクティカルな姿勢はまさに“Live Locally”、つまり「地域に生きる」ことで生まれたものだ。社会が大学に求めることを的確に察知し、それに応えられるように努力する。現代社会にはものごとが複雑に絡み合った難問が山積しているが、大阪大学における知の蓄積はそういった問題に対し、何らかの解決策を提示できるだけのポテンシャルがあるはずだ。地域社会から要請され、現代の難問を解き明かそうとする過程で、世界で通用する個性が大阪大学の中に育まれていくのではなかろうか。

グローバル化が叫ばれる中、大阪大学もグローバル化を掲げているが、ただ「国際性」だけで勝負しても香港やシンガポールの大学に対抗することは難しいだろう。しかし、大阪大学が「地域に生き、世界に伸びる」精神を実践することで、大阪大学は「22世紀に輝く」

第一歩を歩みだすことができるに違いない。

大阪大学にとって「世界 10 指」は極めて難しい数字に思える。しかし、現在は世界トップクラスの大学として君臨するスタンフォード大学も 20 年前までは、アメリカ西海岸カリフォルニアの”Local University”にすぎなかったのだ。大阪大学にとっても、「世界 10 指」は決して不可能なものではないだろう。

おわりに

日本の大学を取り巻く環境は厳しい。「グローバル化」と一言で言ってしまうれば簡単だが、優秀な留学生をいかにして獲得するのか、入試制度はこのままでよいのか、研究者の給与システムはどうするのか、台頭する東アジアの大学にどう対抗するのか、いちいち数えていけばきりが無いほど、日本の大学が越えなければならない壁は多い。

日本屈指の伝統を誇る、大阪大学とて例外ではない。ヒト・モノ・カネが国境を越えて移動する中で、国立大学法人化などとは比べ物にならない、本質的な変化が大阪大学にも求められている。

英語と中国語が飛び交う香港大学のカフェテリアで、私は「グローバル化」というものがいかなるものであるのかを肌で感じたが、あの環境をそのまま大阪大学に持ち込むことは大阪大学にとって最善の道ではない。また現実的でもないだろう。ただ「グローバル化」を推進するといっても、「大阪大学にしかないもの」を打ち出していかねば、永遠に「世界 10 指」は見えない。

独自の戦略で「世界 10 指」への階段を駆け上がっていくのか、極東の地方都市における矮小なアカデミアへと衰退していくのか。現在の大阪大学はまさに岐路に立たされている。

我々は「世界大学ランキング」という一つの切り口から、大阪大学が目指すべき方向性を見出すことを試みた。結論としては「地域に生き、世界へ伸びる(Live Locally, Grow Globally)」を実践するという、まさに大阪大学の標語そのままのものになってしまったが、口で言うほど「地域に生きる」ことも、ましてや「世界へ伸びる」ことも簡単なことではない。大阪という都市の中で、日本のアカデミズムを背負って立つ覚悟がこの大学にあるのか、いま一度問いたい。

未熟さゆえ、至らなかった部分も多々あるように思われるが、なんとかこのようにして報告書としてまとめることができた。これまでお世話になったすべての方にあらためて感謝の意を表したい。

この報告書が、大阪大学が「22 世紀に輝く」ための一助となることを願って、本稿を終える。

平成 26 年 2 月 13 日

小川 智之

参考資料

香港科技大学紹介

香港中文大学紹介

アンケート調査用紙（香港大学版 英文・中文）

香港科技大學

The Hong Kong University of Science and Technology

香港科技大學は1991年に香港を経済・社会的に発展させることを目的として当時の香港総督のエドワード・ユート (Edward Youde) と鍾士元名誉博士によって設立された。名前こそ科学技術大学であるが人文社会系の研究教育も実施する総合大学である。設立20余年にして QS アジア大学ランキングにおいて2011、2012年と2年連続でNo. 1に、"QS Top 50 Under 50" (創立50年以内の大学世界ランキング)において2013年に世界2位にランクインするなど国際的な評価も高い。また、Financial Times 誌が発表した2012年の MBA ランキングでは世界10位にランクインするなど アジアを代表するビジネススクールとしても有名である。

学部・学生

学部は以下の5つであり、8640人の学部生と3944人の院生、計12584人の学生が在学している。(2012年12月31日現在)

理学院 (School of Science)

工学院 (School of Engineering)

工商管理學院 (School of Business & Management)

人文社会科学學院 (School of Humanities & Social Science)

霍英東研究院 (Fok Ying Tung Graduate School)

校内の基本語は英語であり、授業も全て英

語で行われる。

教員

教員数は538人 (うち客員教授62人 2013年1月31日現在)であり、北米、ヨーロッパ、アジアの世界各地から集められている。年齢層は40歳以下が多く、大半が中国系である。

立地・施設

香港科技大學は香港東海岸沿いの九龍清水湾 (Clear Water Bay, Kowloon) に位置する。繁華街である尖沙咀 (Tsim Sha Tsui) からは車で約30分かかるものの、風光明媚な地に立地している。敷地面積は600,000㎡で、その中にアカデミックビルディング、学生寮、教職員宿舎、各種アメニティ施設が散在する。キャンパスが市街地から遠いこともあり、スーパーマーケット・書店・銀行・郵便局・ヘアーサロン・ファーストフード店・レストラン・コーヒーショップなどのアメニティ施設は充実しており、教育・研究機関と生活空間が近接する。李兆基図書館 (Lee Shou Kee Library) は77万冊の蔵書を有する。赤い日時計のオブジェ火雞 (ターキー) が印象的である。



日本の大学との交流

千葉大学 京都大学 名古屋大学 大阪大学 立命館アジア太平洋大学 信州大学

上智大学 東北大学

学費

国内学生が 42,100HK\$、留学生が 120,000HK\$であるが、国内生には政府から補助がある。(2014年2月現在 1HK\$ = 13円程度)

香港中文大學

The Chinese University of Hong Kong

香港中文大学は1963年創立の公立の総合大学である。香港の学術振興と人材養成を担うアジア屈指の名門であり、海外諸大学との広範な国際交流が特色である。中文大学は一貫して「伝統と現代を結合させ、中国と西洋とを融合させる」という崇高な理念を堅持しており、中国語と英語の両言語を以て文化の境界を乗り越えることを教学理念としている。「THE アジアの大学ランキング」(2013)では12位(香港3位)、イギリスのQS社が発表するアジア大学ランキング(2013)では、東京大学(9位)を抑え、7位(香港3位)を獲得している。

学部・学生

学部は以下の8つであり、61学系(専攻科)を有している。

文学院 (Faculty of Arts)

工商管理学院 (Faculty of Business Administration)

教育学院 (Faculty of Education)

工程学院 (Faculty of Engineering)

医学院 (Faculty of Medicine)

法学院 (Faculty of Law)

理学院 (Faculty of Science)

社会科学院 (Faculty of Social Science)

11,594名の学部生と3,223名の院生、計14,817名の学生が在学している。(2012年)

教員

教員数は1,392名である。(2008年)

中文大学は中国人最初のノーベル物理学賞受賞者の楊振寧教授、1966年にノーベル経済学賞受賞のサー・モーリスといったノーベル賞受賞者を教員に迎えている。

立地・施設

香港中文大学は1,373,000㎡の広大な敷地面積をもつ香港最大の大学である。吐露湾を見下ろすキャンパスは山沿いに建てられ、自然豊かである。大学図書館を始めとする6箇所の図書館システムや中国考古文物・発掘品・古美術を収集した香港中文大学博物館(Art Museum)、中国研究拠点として有名な中国研究サービスセンター(University Service Center for China Studies)がある。

他にも、音楽堂や陸上競技場、体育館、プール、テニスコートなど多様な施設が収容されている。また、キャンパス内にはスーパーや本屋、銀行もあり、生活に不自由することはない。さらに、大学駅という中文大学専用



の駅があるため交通も便利である。

日本の大学との交流

香港中文大学は交換留学生プログラムにおいて21の日本の大学と提携している。

九州大学 早稲田大学 慶應義塾大学 上智大学 国際基督教大学 東京学芸大学 東京外国語大学 同志社大学 立命館大学 関西学院大学 関西大学 立教大学 南山大学 創価大学などである。

学費

秋学期：9月上旬～12月上旬の15週間

授業料 23,700HK\$

春学期：1月上旬～4月中旬の15週間

授業料 23,700HK\$

夏学期：5月下旬～8月上旬の11週間

授業料 17,325HK\$

(2014年2月現在 1HK\$ = 13円程度)

A Survey about

The Perception of Exchange Students

- The purpose of the survey

The purpose of this survey is to research the national rankings of universities and the consciousness of it to exchange students at your university. The survey is being carried out by Osaka University of Japan with the public support of Osaka University and your university.

The information we collect will be used for research activities. We will also be announcing it in public such as presentations and reports, but not for other purposes. It is appreciated if you could be cooperative to the survey with this in mind.

Please write your answers in the brackets or put a check in the boxes like below.
(example :)
Now we will move on to the questions.

1 . What is your sex?

male female

2 . Are you a graduate student or university student?

graduate school university

3 . What department do you belong to?

law art business and economics education social science
architecture science engineering medicine dentistry

4 . Which country and region do you come from?

[]

5 . What is the name of the school you come from?

[]

6 . How did you come to know Hong Kong University?

(You may choose a few answers)

~We will move on to questions about the national ranking of universities~

1 6 . Which national rankings do you know about? (You may choose a few answers)

- Shanghai Jiao Tong University QS
Times Higher Education HEEACT other() don't know any

1 7 .Do you think the national rankings of universities are important when you are choosing where to exchange to?

- yes rather yes rather no no

1 8 . Hong Kong University is 35th on the THE (Times Higher Education).

What do you think about that?

- it should be assessed higher reasonable it should be assessed lower

1 9 . How well do you know the ranking of the university that you are from?

- exactly roughly don't know

2 0 . (For those who answered “exactly” or “roughly” on question 19)

Do you think that ranking is reasonable compared with Hong Kong University?

- yes rather yes rather no no

2 1 . Do you think Hong Kong University is taking action to get a better ranking on the national ranking of universities?

- yes rather yes rather no no

2 2 . What do you think about the national ranking of universities?

- reliable rather reliable rather unreliable unreliable

~Thank you very much for your cooperation~

关于留学生观念的问卷调查

· 调查目的

*这是一份基于大阪大学的课外研究所展开的问卷调查，主要目的在于调查以大阪大学及贵校的留学生关于世界大学排名的看法以及相关的意

问卷中收集到的信息将用于研究活动。我们将会在相应的报告及展示中公布这些数据，但不会将其用于其它用途。如果您已经了解这点，希望您能够协助我们完成这份问卷。

请在方框内打钩，以及在空白处写上您的答案。

(例：)

下面将进入问卷部分。

1. 你的性别是？

男性 女性

2. 请问你是研究生还是大学生？

研究生 大学生

3. 请问你所属的学部是什么？

法学部 艺术文化学部 经济学部 教育学部 社会学部 建筑学部
科学学部 工学部 医学部 牙医学部

4. 你来自哪个国家/地区？

[]

5. 你在读学校的名称是？

[]

6. 你是通过何种方式了解到香港大学的？

(可选择多项)

网络 书本杂志 公告宣传或海报

母校的老师 前辈 家人 朋友

其他()

7 是什么让你决定来香港大学就读？

(可选择多项)

- 公众信息和宣传
- 世界排名
- 良好的设施
- 优质的教育
- 良好的环境
- 独特的院系设置
- 学校/国家的奖学金
- 优质的课外活动
- 交通
- 对应你的母语
- 适合你目前的学术水平
- 其他()

8. 你毕业之后想做什么?

- 保证就业
- 前往高一级的院校深造
- 未确定

9. 你想在哪里找工作/深造?

- 香港
- 你的祖国
- 其他()

10. 你期待在香港大学中找到哪些元素?

- 全球性的教育
- 更好的设施
- *完善的语言体系 (体现在学校主页·指示板等)
- 财务上的支持 (如奖学金)
- 更好的课外活动
- 与本地的学生、居民相聚
- 其他 ()

11. 香港大学会是你作为留学生的第一选择吗?

- 是
- 否

12. (若在 11 题中选择了“否”, 请完成此题)

你的第一选择是什么学校? 为什么?

[]

13. 你计划在香港大学取得博士学位吗?

- 是
- 否
- 未确定

14. 你对于香港大学的印象是?

- 正面积极的
- 积极的
- 相对反面的
- 消极反面的

15. 你对于香港这座城市的印象是?

- 正面积极的
- 积极的
- 相对反面的
- 消极反面的

~以下是关于世界大学排名的问题~

16. 你知道以下哪个世界大学排名? (可以选择多项)

- 上海交通大学
- QS
- 泰晤士高等教育
- HEEACT (台湾财团法人高等教育基金会)
- 其他()
- 不知道

17. 在你选择学校时, 一所学校的世界排名会是你重要的参考因素吗?

- 是
- 基本是
- 基本不是
- 不是

1 8. 在泰晤士高等教育世界大学排名中，香港大学位于第三十五位。

对此你有什么看法？

应该排的更高 合情合理 应该排的更低

1 9. 你对于你所来自的学校的世界排名了解多少？

非常清楚 大概知道 不知道

2 0. (若在 19 题中选择了“非常清楚”或“大概知道”，请完成此题)

跟香港大学的排名相比，你认为你的学校的排名合理吗？

合理 比较合理 比较不合理 不合理

2 1. 你认为香港大学为了取得更高的世界排名正在采取一些行动吗？

是的 大概是 大概不是 不是

2 2. 你对于各机构评出的世界大学排名有何看法？

非常可信 比较可信 比较不可信 不可信

～非常感谢您的合作～

謝辞

この研究は大阪大学未来基金の第14回課外研究奨励費からの支援により実施することができました。ここに、深く御礼申し上げます。また研究の過程で非常に多くの方から様々な形で研究に協力していただきました。ご多忙にも関わらず、この研究に協力して下さったみなさまには、大変感謝しております。ここにお名前を掲載させていただくとともに、改めて感謝の意を表したいと思えます。本当にありがとうございました。

石川 真由美 (大阪大学 未来戦略機構教授)
依田 高典 (京都大学大学院 経済学研究科教授)
葛城 政明 (大阪大学大学院 経済学研究科准教授)
佐野 隆司 (京都大学 経済研究所助教)
榎木 哲夫 (京都大学大学院 工学研究科教授・理事補)
芹澤 成弘 (大阪大学 社会経済研究所教授)
中野 嘉子 (香港大学 文学部准教授)
藤井 翔太 (大阪大学 国際交流オフィス特任研究員)
古川 裕 (大阪大学大学院 言語文化研究科教授)
宮坂 博 (大阪大学大学院 基礎工学研究科教授)
渡辺 安虎 (Northwestern 大学 Kellogg 経営大学院助教)

(五十音順 敬称略)

Fendy Li (Student Admissions Counsellor, Academic Liaison Section, University of Hong Kong)

Jasmine Wong (Program Associate, Office of Academic Links, Chinese University of Hong Kong)

Joey So (Program Officer, Office of Academic Links, Chinese University of Hong Kong)

Natalie Chang (Planning Manager, Office of Planning and Institutional Research, Hong Kong University of Science & Technology)

Samantha So (Assistant Planning Manager, Office of Planning and Institutional Research, Hong Kong University of Science & Technology)

(アルファベット順 敬称略)

2013年2月13日

大阪大学国際高等教育戦略研究チーム一同

